

天啓編

序文

1 既成文化の謬点（梗概）

2 天国建設の順序と悪の追放

5 悪と守護霊

10 悪の発生と病（九分九厘と一厘）

15 《神意と医学》

18 健康と寿命（病気と寿命）

20 救い主と贖罪主

23 地上天国

科学編

24 病気とは何ぞや

28 病気と医学

31 医学の解剖

34 病気とは何ぞや・感冒

38 肺炎と結核

41 肺炎と薬毒

43 結核と精神面

47 自然を尊重せよ

49 結核と特効薬

50 栄養

55 人間と病気

58 無機質

60 霊主體

63 薬毒の害

66 心臓

68 胃病

71 主なる病気

71 腎臓病とその他の病

75 主なる病気

75 肋膜炎と腹膜炎

77 喘息

78 肝臓・胆嚢・膀胱の結石

80 神経痛とリョウマチス

81 上半身の病気と中風

84 脳貧血・其他

85 睡眠不足

86 耳鳴

86 其他のも

扁	148	觀世音菩薩
87	150	彌勒三會
口中	154	佛教に於ける大乘小乘
88	156	キリスト教
下半身の病氣と痔疾	158	善悪発生とキリスト教
90	159	経緯
婦人病	164	序文
92		
小児病		
98		
総論		
103		
手術		
104		
薬毒の種々相		
110		
人形医学		
116		
擬健康と真健康		
120		
宗教編		
124		
靈的病氣・癌病		
126		
結核と憑靈		
128		
精神病と癩癘		
130		
唯物医学と宗教医学		
137		
靈界に於ける昼夜の轉換		
140		
佛滅と五六七の世		
144		
佛教の起源		
146		
伊都能賣神		

此著は歴史肇つて以来、いまだ嘗て無い大著述であり、一言にして言えば新文明世界の設計書ともいふべきもので、天国の福音でもあり、二十世紀のバイブルでもある。というのは現在の文明は眞の文明ではないので、新文明が生まれる迄の假の文明であるからである。聖書にある『世の終り』とは、此假想文明世界の終りを言つたものである。又今一つの『洽く天国の福音を宣べ傳えらるべし、然る後末期到る』との予言も、此著頒布である事言つ迄もない。そうしてバイブルはキリストの教えを綴つた物であるが、此著はキリストが繰り返し曰われた処の、彼の天の父であるエホバ直接の啓示でもある。又キリストは斯うも言われた、『天国は近づけり、爾等悔改めよ』と。之によつてみれば、キリスト自身が天国を造るのではない、後世誰かが造るといふ譯である。

處が私は天国は近づけりとは言わない、何となれば最早天国実現の時が来たからである。それは目下私によつて天国樹立の基礎的準備に取り掛かつてをり、今は甚だ小規模ではあるが、非常なスピードを以て

進捗しつつあつて凡てが驚異的である。それというのも、一切が奇蹟に次ぐ奇蹟の顯われてくるには驚嘆している。そうして之を仔細に検討して見る時、神は何万年前から細大漏す處なく慎重綿密なる準備をされていた事である。之は明瞭に看取出來るが、其根本は旧文明の精算と新文明の構想にあるのであつて、私はそれに対し實際を裏付けとした理論を徹底的に此著を以て説くのである。そうして先ず知らねばなら

ない肝腎な事は旧文明は悪の力が支配的であつて、善の力は甚だ微弱であつた事である。處が愈々時期來つて今度は逆となり、茲に世界は地上天国實現の段階に入るのである。然し之に就ては重大問題がある。というのは旧文明は当然精算されなければならぬが、何しろ世界は長い間の悪の堆積による罪穢の解消こそ問題で、之が世界的大淨化作用である。従つて之による犠牲者の数は如何に大量に上るかには到底想像もつかない程であらう。勿論之こそ最後の審判であつて亦止む事を得ないが、神の大愛は一人でも多くの人間を救わんとして私という者を選び給ひ其大業を行わせられるのであつて、其序曲といふべきものが本著であるから、此事を充分肝に銘じて読みたいのである。

そうして右の如く最後の審判が終るや愈々新世界建設の運びになるのであるが、其轉換期に於ける凡ゆる文化の切換えこそ空前絶後の大事變であつて、到底人間の想像だも不可能である。勿論旧文明中の誤謬の是非を第一とし、新文明構想の指針を興えるものである。それを之から詳しく説くのであるが、勿論之を読む人々こそ救いの綱を目の前に下げられたと同様で直ぐに之を掴めば救われるが、そうでない人は後に到つて悔を残すのは勿論で時已に遅き者は救われて、将来に於ける地上天国の

住民となり得るのである。そうして來るべき地上天国たるや其構想の素晴らしさ、スケールの雄大さは到底筆舌に尽せないのである。其時に到つて現在迄の文明が如何に野蛮極まる低劣なものであつたかがハッキリ判ると共に人類は歡喜に咽ぶであらう事を断言するのである。

既成文化の謬点

此著は序文にもある通り、現代文明に對する原子爆弾といつてもよからう。そうして既成文明の根幹となつてゐる、宗教も思想も哲学も教育も芸術も悉く包含されており、其一々に就いて鋭い眼を以て徹底的に批判し究明し赤裸々に露呈してあるから、之を読むとしたら何人と雖も古い衣を脱ぎ棄て新しき衣と着更えざるを得ないであらう。此意味に於て本著が人々の眼を覚ますとしたら、茲に既成文明は一大センセーションを捲起し、百八十度の轉換となるのは必然であり、此著完成の暁は全世界の宗教界・各大学・学界・言論界・著名人等に適當な方法を以て配布すると共に、ノール賞審査委員会にも出すつもりであるが、只惜しむらくは同審査委員会諸氏は唯物科学の權威であるから、初めから理解する事は困難であらうが、此著の説く處科学の根本をも明示してあり、悉くが不滅の眞理である以上充分検討されるべしとすれば、理解されない筈はないと思つのである。

之に就いて重要な事は、今日迄の学者の頭脳である。それは彼等は宗教と科学とを別々のものとして扱つて來た事で此の考え方こそ大きな誤りであつたので、それを根本から解明するのが此著の目的である。そうして地球上に於ける森羅万象一切は相反する二様のものから形成されている。それは陰陽・明暗・表裏・靈体というよう

になつてゐる。處が今日迄の学問は体の面のみを認めて靈の面を全然無視していた事である。といつのは靈は目に見えず機械でも測定出来なかつたからでもあるが、其為学問では今日迄地球の外部は只空気と電気だけの存在しか分つていなかつたのである。處が私はそれ以外確實に存在している靈気なるものを発見したのである。之に就ては先ず地球上の空間の實態からかいてみるが、それは斯うである。即ち前記の如く靈氣(火)・空氣(水)の二元素が密合し一元化した気体のようなものが、固体である地塊(土壤)を包んで居り、此三元素が合体して宇宙の中心に位置しているので、之が吾々の住んでゐる世界及び周囲の状態である。處が科学は右の空氣と土壤のみを認めて靈を認めなかつたが為、空氣と土壤の二元素のみを対象として研究し進歩して来たのであるから、言わば三分の二だけの科学で全体ではなかつたのである。此根本的欠陥の如何に進歩発達したといつても、三位一体的眞理に外れてゐる以上、現在の如き学理と實際とが常に矛盾して

いたのであるから、此欠陥を発見し是正しない限り眞の文明世界は生まれる筈はないのである。そうして右三者の關係を一層詳しくかいてみると、經には靈・空・地の順序となつており、彼の日・月・地の位置がよくそれを示していると共に、緯即ち平面的には三者密合し重なり合い距離は絶對なく翻然と一丸になつて中空に浮んでゐるのが地球である。勿論三者夫々の性と運動状態は異つてゐる。即ち火は經に燃え水は緯に流れ、地は不動体となつてゐるが、之は絶對ではなく呼吸運動による動体中の不動体である。そうして經と緯とは超微粒子の綾状的氣流となつて地球を中心として貫流し運動してゐるのである。そうして此氣流なるものは空の如く無の如くである為、現在の学問程度では到底把握出

来ないのである。然るに意外にも此氣体其ものこそ實は一切万有の力の根源であつて、其本質に至つては実に幽幻靈妙想像に絶するものである。佛者のいふ覺者とは此一部を知り得た人間を言つたもので、それ以上になつた者が大覺者であり一層徹底した大覺者が見眞實の境地に到達したのである。釈迦・キリストは此部類に属するのであるが、只併し此二聖者は時期尚早の為或程度以上の力を附與されなかつた事である。それが為救世的力の不足はどうしようもなかつた。其証據として両聖者は固より其流れを汲んだ幾多覺者達の努力によつても今以て人類の苦惱は解決されなに見て明かである。處が愈々天の時来たつて絶對力を興えられ、其行使による人類救済の大使命を帯びて出頭したのが私である以上、私によつて眞理の深奥を説き人類最後の救いを実行すると共に、新文明世界設計に就ての指導的役割をも併せ行うのであるから、實に全人類に対する空前絶後の一大福音である。

茲で話は戻るが、前記の如き物質偏重の文化を見眞實の眼を以て大局から検討してみると、意外にもそれによつて今日の如き絢爛たる文化が発生し進歩しつつあつたのであるから、此矛盾こそ實に神秘極まるものであつて、之こそ神の經綸に外ならないのである。之を一言にしていえば現在の迄の文明は前記の如く体的面は成功したが、靈的面は失敗した事である。では何が故に神は最初から失敗のない完全な文明を創造されなかつたかといつと、此疑問こそ此著を順次精読するに従い、始めて判然と理解されるのである。

天国建設の順序と惡の追放

抑々此世界を天国化するに就ては一つ

の根本条件がある。それは何かというと、現在大部分の人類が心中深く蔵されている悪の追放である。それに就て不可解な事には一般人の常識からいっても悪を不可とし悪に触れる事を避けるのは勿論、倫理道德等を作って悪を戒め教育も之を主眼としており、宗教に於ても善を勧め悪を排斥している。其他社会何れの方面を見ても親が子を夫は妻を、妻は夫を主人は部下の悪を咎め戒めている。法律も亦刑罰を以て悪を犯さぬようにしている等、之程の努力を拂っているに拘わらず、事實世界は善人より悪人の方が多く厳密に言えば十人中九人迄が大なり小なりの悪人で善人は一人あるかなしかというのが現實であらう。

併し乍ら單に悪人といっても、それには大中小様々な種類がある。例えば一は心からの悪即ち意識的に行う悪、二は不知不識無意識に行う悪、三は無智故の悪、四は悪を善と信じて行う悪等である。之等に就て簡単に説明してみると斯うであらう。一は論外で説明の要はないが、二は一番多い一般的のものであり、三は民族的には野蛮人、個人的には白痴・狂人・児童等であるから問題とはならないが、四に至っては悪を善と信じて行う以上正々堂々として而も熱烈であるから、其害毒も大きい譯である。これに就ては最後に詳しくかく事として次に善から見た悪の世界観をかいてみよう。

前記の如く現在の世界を大観すると全く悪の世界といつてもいい程で、何よりも昔から善人が悪人に苦しめられる例は幾らでも聞くが、悪人が善人に苦しめられる話は聞いた事がない。此様に悪人には味方が多く、善人には味方が少ないので悪人は法網を潜り堂々世の中を横行闊歩するに反し、善人は小さくなって戦々兢兢々としてるのが社会の姿である。此様に弱者である善人は強者である悪人から常に虐げら

れ苦しめられるので、此不合理に反抗して生まれたのが彼の民主主義であるから、之も自然発生のものである。處が日本に於ては長い間の封建思想の爲、弱肉強食社会が続いて来たのであるが、幸いにも外国の力を借りて今日の如く民主主義となつたので、自然発生と言つよりも自然の結果といった方がよからう。というように此事だけは珍らしくも悪に対して善が勝利を得た例である。併し外国と異つて日本は今の處生温い民主主義で、まだまだ色々な面に封建の滓が残っていると見るのは私ばかりではあるまい。

茲で悪と文化の關係に就て書いてみるが、抑々文化なるものの発生原理は何處にあつたかということと根本は善悪の闘争である。それは古えの野蛮未開時代からの歴史を見れば分る通り、最初強者が弱者を苦しめ自由を奪い掠奪殺人等恣いままに振舞う結果、弱者にあつてはそれを防止せんとして種々の防禦法を考えた。武器は固より垣を作り備えをし交通を便にする等、集団的にも個人的にも凡ゆる工夫を凝らしたのであつて、此事が如何に文化を進めるに役立つたかは言つ迄もない。それから漸次進んで人智は発達し文字の如きものも生れ、集团的契約を結ぶようになったのが、今日の国際条約の嚆矢であらう。尚社会的には悪を制圧するに法や罰則を作り、これが條文化したものが今日の法律であらう。處が現實はそんな生易しい事では人間から悪を除く事は到底出来なかつた。寧ろ人智の進むにつれて悪の手段が益々巧妙になるばかりである。というように人類は原始時代から、悪の横行とそれを防止する善との闘争は絶える事なく今日に至つたのである。然しそれによつて、如何に人智が進み文化が発達したかは知る通りであつて、其為の犠牲も亦少なくなかつたのは亦止むを得ないといつべく、兎に角現在迄は

善悪闘争時代が続いて来たのである。處がそれら善人の悩みを幾分でも緩和すべく時々現われたのが、彼の宗教的偉人で其教の建前としては物慾を制限し、諦観思想を本位とし従順を諭えると共に将来に希望を有たせるべく地上天国・ミロクの世等の理想世界實現を豫言したのである。又一方悪に対しては極力因果の理を説き速かに悔い改めるべく戒めたのは勿論で、それが為幾多の苦難に遭ひ血の滲むような暴圧に堪へつつ教へを弘通した事蹟は涙なくしては読まれないものがある。成程之によつて相当の効果は挙げ得たが、然し大勢ではどうする事も出来なかつた。又反対側である無神主義者の方でも学問を作り唯物的方法を以て悪による災害を防ごうとして努力した其結果、科学は益々進歩し文化は豫期以上の成果を挙げたのである。然るに一方思わざる障碍が生まれた。というのは右の如く進歩した科学を悪の方でも利用するようになった事である。

先ず戦争を見ても判る通り兵器は益々進歩すると共に、凡てが大規模になりつつある結果生れたのが彼の原子爆弾である。之こそ全く夢想だもしなかつた恐怖の結晶であるから此発見を知つた誰もは愈々戦争終焉の時が来たと言んだのも束の間、之を悪の方でも利用する危険が生じて来たので、不安は寧ろ増大したといつてもいい。とはいうものの結局戦争不可能の時代の接近した事も確かである。之等を深く考えてみる時、結局悪が戦争を作り悪が戦争を終結させるといふ奇妙な結果となつたのである。斯う見てくると、善も悪も全く深遠なる神の経綸に外ならなかつた事はよく窺われる。斯うして精神文化の側にある人も、物質文化の側にある人も心からの悪人は別とし共に平和幸福なる理想世界を念願しているのは言つ迄もないが、只問題は果して其實現の可能性がありやと

いう事と、ありとすれば其時期である。處がそれらに就ての何等の見通しもつかない為、人類の悩みは深くなるばかりである。そこで心ある者は懷疑の雲に閉ざされつつ、突き当たつた壁を見詰めているばかりであるし、中には宗教に求める者、哲学で此謎を解こうとする者などもあるが、大部分は科学の進歩によつてのみ達成するものと信じ努力しているが、之も確実な時期は得られそうもないので、行き詰り状態になつてゐる。處が現実を見れば人類は相変わらず病貧争の三大災厄の中に喘ぎ苦しみ乍ら日々を送つてゐる。處が之等一切の根本を神示によつて知り得た私は凡ゆる文化の誤謬を是正すべく解説するのである。

前記の如く悪なるものが、人間の不幸を作るとしたら神は何故悪を作られたかという疑問である。然し此様な不可解極まる難問題は到底人智では窺い知る由もないから諦めるより致し方ないとして、宗教は固より如何なる学問も今日迄之に触れなかつたのであろう。然し何といつても之が明かにならない限り、眞の文明は成立される筈はないのである。そこで之から其根本義を開示してみることが、實は現在迄の世界に於ては悪の存在が必要であつたので、此事こそ今日迄の世界の謎でしかなかつたのである。斯うして悪の中で最も脅威とされていたものは何といつても生命の問題としての戦争と病気の二大災厄であらう。

そこで先ず戦争からかいてみるが、戦争が多数の人命を奪ひ悲惨極まるものであるのは今更言つ迄もないが、此災厄から免れようとして人間はあらん限りの知能を絞り努力を拂つて来た事によつて、思いもつかない文化の發達は促進されたのである。見よ勝つた国でも負けた国でも戦争後の目覚ましい發展振りは如何なる国でも例外はあるまい。假に若し最初から戦争がないとしたら文化は今以て未開のままか、

さもなければ僅かの進歩しか見られなかったであろう。そのようにして戦争と平和は糾える縄の如くにして一步一步進んで来たのが現在迄の文化の推移である。之が又社会事情にも人間の運命にも共通している處に面白味がある。之によって之をみれば善悪の摩擦相剋こそ實は進歩の段階である。

斯うみてくると、今日迄は悪も大きな役割をして来た譯になる。といつても悪の期は無限ではなく限度がある。それは世界の主宰者たる主神の意図であり哲学的に言えば絶対者とそうして宇宙意思である。

即ちキリストが豫言された世界の終末でありそうして次ぎに来るべき時代こそ、人類待望の天国世界であり、病貧争絶無の眞善美の世界、ミロクの世等、名は異なるが意味は一つで帰する處善の勝つた世界である。此様な素晴らしい世界を造るとしたら、それ相應の準備が必要である。準備とは精神物質共に、右の世界を形成するに足るだけの條件の揃う事である。處が神は其順序として物質面を先にされたのである。というのは精神面の方は時を要せず一挙に引上げられるからで、それに反し物質面の方はそう容易ではない。非常に歳月を要すると共に、其為には何よりも神の實在を無視させる事である。之によって人間の想念は自然物質面に向く。茲に無神論が生れたのである。故に無神論こそ、實は悪を作る為の必要な思想であつたのである。斯くして悪が生れ漸次勢力を得て善を苦しめ争闘を起し、人類をして苦惱のドン底に陥らしめたので人間は這上ろうとして足掻くのは勿論、発奮努力によって苦境から脱れようとした。それが文化発展に拍車を掛けたのであるから悲惨ではあるが止むを得なかつたのである。

以上によつて善悪に就ての根本義は大體分つたであろうが、愈々茲に悪追放の時

が来たので、それは善悪切替の境目であるから、悪にとつては容易ならぬ事態となつたのである。右は臆測でも希望でも推理でもない。世界経綸の神のプログラムの現われであるから、信ずると信ぜざるとに拘わらず右は人類の決定的運命であつて、悪の輪止りであり、悪が自由にして来た文化は一転して善の手に帰する事となり、茲に地上天国樹立の段階に入つたのである。

悪と守護靈

前項の如く現在迄必要であつた悪が、不必要となつたとしてもそう容易に追放される譯には行かないが、それに就いての神の経綸は寔に幽玄微妙なるものがある。之は追々説いてゆくが茲で前以て知らねばならない事は抑々宇宙の構成である。言う迄もなく、宇宙の中心には太陽・月球・地球の三塊が浮在している。そこでこの三塊の元素を説明して見ると太陽は火素・月球は水素・地球は窒素というようになっており、此三元素は勿論各々の特質を有ち、夫々の本能を發揮しているが、右の中の火素・水素の二精気が密合して大氣となり地球を圍繞し一切万有の生成化育を営んでいるのである。

そうして地球上のあり方であるが、之は陰と陽に別けられている。即ち陽は火の精・陰は水の精であつて、火は経に燃え水は緯に流れており、此経緯が綾状となつて運動している、此状態こそ想像もつかない程の超微粒線の交錯であつて、地上或程度の高さに迄達してをり、之が空気の層であり大氣でもある。右の如く陽と陰との本質が具体化して火・水・冷・熱・晝・夜・明・暗・靈・体・男・女等々に表われているのである。又之を善・悪に分ければ陽は靈で善であり陰は体であり悪である。此意味に

於て善も悪も对象的のものであつて之が大自然の基本的様相である。

此理は人間を見ても分る如く、人体は見ゆる肉体と見えざる靈の二元素から成立つており、体と靈とは密接不離の關係にあつて人間が生命を保持しているのも此兩者の結合から生れた生命力によるのである。處が茲に一つの法則がある。それは靈が主で体が従であつて、之は事実がよく示している。即ち人間は靈の中心である心に意欲が起るや体に命令して行為に移るのであるから靈こそ人間の本体であり、支配者であるのは明かである。そこで靈は何が故に悪心を起すかという、之が最も重要な焦点であるから詳しくかいてみるが、それにはどうしても宗教的に説かねばならないから其つもりで読みたい、というのは善悪は心の問題であるからである。

偲て愈々本論に移るが、右の如く人間は靈と体との兩者で成立つて以上、肉体のみを対象として出来た科学では、如何に進歩したといつても畢竟一方的跛行的であつてみれば眞の科学は生れる筈はないのは分り切つた話である。之に反し吾々の方は靈体兩者の關係を基本として成立つたものである以上、之こそ眞の科学でなく何である。

以上の如く善悪なるものは心即ち靈が元であり而も靈主体従の法則を眞理として、之から解き進める説を充分玩味するに於ては根本から分る筈である。處で先ず人間というものの發生であるが言つ迄もなく妊娠である。之を唯物的に言えば男性の精虫一個が女性の卵巣に飛込んで胚胎する。之を靈的に言えば神の分靈が一個の魂となつて宿るのである。そうして月満ちてオギャーと生れるや右の魂以外別に二つの魂が接近し、茲に三つの魂の關係が結ばれる。右の二つの魂とは一つは副守護靈といつて動物靈であり、多くは二・三才の頃

に憑依する。今一つは正守護靈といつて直接憑依はしないが絶えず身辺に着き添い守護の役をする。勿論右の二靈共一生を通じて離れる事はないから、言わば人間は三者共同体といつてもいい。其様な譯で第一に宿つた魂こそ本守護靈と言ひ神性そのものであり、之こそ良心そのものでもある。昔から人の性は善なりといつのは之を指すのである。第二の副守護靈とは右と反対で悪そのものであるから、常に本守護靈の善と闘つているのは誰も自分の肚の中を思えば分る筈である。第三の正守護靈とは祖靈中から選抜されたものであつて、不斷に其人の身辺に付き添ひ守護の役目をしてゐる。例えば災害・危難・病氣・悪行・怠慢・墮落等々、凡て其人を不幸に導く原因を防止する。よく虫が知らせる、夢知らせ、邪魔が入る、食違ひ、間が悪いなどというのがそれである。又何かの事情で汽車に乘遅れた為危難を免れる事などもそれであり、悪に接近しようとする故障が起き、不可能になつたりするのもそれである。そうして本靈と副靈とは常に闘つており、本靈が勝てば善を行うが、副靈が勝てば悪を行う事になるから、人間は神と動物との中間性であつて、向上すれば神の如く墮落すれば獸の如くなるのは世間を見てもよく分るのである。では一体副靈とは何の靈かといつと、日本人は男性にあつては天狗・蛇・狸・馬・犬・鳥類等の死靈が主で其他種々の靈もあり、女性にあつては狐・蛇・猫・鳥類等の死靈が主で他にも色々な靈がある。斯んな事をいふと現代人は馬鹿々々しくて到底信じられまいが之は一点の誤りなき眞実であつて、之が信じられないのは其人は唯物迷信の爲であるから、此迷信を一徹すれば直に判るのである。何よりも人間は其憑いている動物靈の性質がよく表われているもので、注意すれば何

人にも分る筈である。右の如く臨時に憑く靈も殆んどは動物靈であつて偶には人間の死靈もあり、極く稀には生靈もある。では臨時靈が憑く理由は何かというのと、言う迄もなく其人の靈の清濁によるので、曇りの多い程悪靈が憑き易く、又元からの副靈の力も増すからどうしても悪い事をするようになる。此理によつて現代人の大部分は靈が曇り切つてゐるから悪靈が憑き易く活動し易い為、犯罪が増えるのである。處がそれとは反対に神佛の信仰者は曇りが少なく善行を好むのは魂が清まつており、悪靈を制圧する力が強いからで、茲に信仰の價值があるのである。従つて無信仰者は平常善人らしく見えても何時悪靈が憑依するか分らない状態にあるので、一種の危険人物といつてもいい譯である。此理によつて良き社会を実現するには清い魂の持主を増やすより外に道はないのである。そつして本来魂なるものは一種の発光体であつて、動物靈は此光を最も怖れるのである。處が現代人の殆んどは魂が曇つており、動物靈という御客様は洵に入りいゝようになつてゐるから忽ち人間は躍らせられるので、百鬼夜行の社会状態になつてゐるのも当然である。而も其様な事に盲目である為政者は口法と刑罰のみによつて悪を防止しようとしてゐるのであるから、全然的を外した膏藥張で効果の挙がる筈がないのである。何よりも国会を見ても分る如く殆んど議案は法律改正と追加という膏藥製造法であるから、之を常に見せつけられる吾々は其無智に長大怠を禁じ得ないのである。

以上の如く悪なるものは大体判つたであらうが、此根本解決こそ信仰以外にない事は言つまでもない。併し單に信仰といつても其拜む的である神にも上中下の階級があり、それが百八十一階級にも及んでゐると共に正神と邪神との差別もあるから、

之を見分けるには相当困難が伴つのである。世間よく熱烈なる信仰を捧けても思ふような御利益がなく、病氣も治らず行いも面白くない人があるが、それは其的である神の力が弱く邪神の活躍を阻止する事が出来ないからである。而も困る事には此状態を見る世人は之こそ低級な迷信と思ひ、偶々本教の如き正しい宗教を見てもそれと同一視するのであるから、実に遺憾に堪えないのである。そつして昔から一般人は神とさえ言えば只尊いもの有難いものと決めて了い、差別のあるなど知らない為甚だ危険でもあつた。尤も今日迄最高神の宗教は全然現われなかつたからであるが、喜ぶべし茲に最高神は顯現され給つたのである。

それが為今日迄の神は假へ正しく共、次位の階級であるから其力が弱く正邪相争う場合一時的ではあるが悪の方が勝つので、之を見る人々はそれに恐れ眞似しようとする。特に野心あり力量ある者程そつであるのは、歴史を見ても分る通り幾多英雄豪傑の足跡である。成程一時は成功しても最後は必ず失敗するのは例外がないのである。之を靈的に見ると其悉くは邪神界の大物の憑依であつて、面白い事には最初はトントン拍子にゆくので有頂天になるが、それも或程度迄で必ず挫折する。そつなる憑依靈は忽ち脱却してう。吾々の知る範囲内でもカイゼル、ムッソリーニ、ヒツラーの如きがそつで失敗後は人が違ふかと思つ程、痴呆暗愚的に氣の抜けたようになつたが、之は大きな邪靈が抜けた後は誰でもそつなるものである。そつして驚くべき事は邪神界の総頭領は今から二千年数百年前、世界の覇権を握るべく周到綿密にして永遠な計画を立て現在迄暗躍を続けつつあるが、正神界の方でも之に対立して戦つてゐるのである。其神としてはキリスト、釈迦、マホメット、国常立尊の系統の

神である。

以上の如く主宰神は正神と邪神とを対立させ闘争させつつ文化を進めて来たのであるが、其結果遂に邪神の方が九分九厘迄勝つたのが現在であつて、茲に主神は愈々一厘の力を顯現され、彼等の大計画を一挙に転覆させ給う、之が九分九厘と一厘の闘いであつて、今やその一步手前に迄来たのである。従つて此真相を把握されたとしたら、何人と雖も飄然と目覚めない譯にはゆかないであらう。

悪の発生と病

九分九厘と一厘（神意と医学）

前項の如く悪の九分九厘に対して善の一厘が現われ、絶対神力を揮つて既成文化を是正すると共に、新文化を打ち樹てる、早くいえば掌を返すのである。之が今後に於ける神の経綸の骨子であつて、その破天荒的企図は想像に絶するといつてよからう。之に就いては彼の舊約聖書創成記中にある禁断の木の実の實話である。勿論之は比喩であつて、エデンの園にいたアダムとイブの物語は実に深遠なる神の謎が秘められている。それを追々と説いてゆけば、之を読むに就ては全然白紙にならなければ到底分りようがないのである。

言う迄もなく木の実を食う事によつて悪の発生である、というのは木の実は薬の事であつて、薬によつて病気が作られ、病気によつて悪が発生する。處が人類は紀元以前から、病気を治す目的として使い始めたのが彼の薬剤であつて、禁断の木の実は何ぞ知らん此薬剤を言つたものである。という譯を知つたなら、何人も愕然として驚かない者はあるまい。ではそのよくな到底想像もつかない程の理由は何かと

いふと、之を説くとしたら理論と實際から徹底的に説かねばならないから充分活眼を開いて見られん事である。

茲で曩に説いた如く人間は靈と体とから成立つており、靈が主で体が従であるという原則も己に判つたであらうが、そのように悪の発生原は靈に発生した曇りであり、此曇りに元から憑依していた動物靈と後から憑依した動物靈と相俟つて人間は動物的行為をさせられる。それが悪の行為である。早く言えば、靈の曇り即悪である以上悪を撲滅するには靈の曇りの解消である事は言つ迄もない。處が曇りの因こそ薬剤であるから茲に大きな問題がある。勿論靈の曇りは濁血の移写で濁血は薬剤が造るのであるから、人間薬剤さへ用いなくなれば悪は発生しないのである。斯う判つてくると禁断の木の実即ち薬剤こそ悪発生の根本である事が分るのであらう。

茲で今一つの重要な事を書かねばならないが、之も曩に説いた如く文化の進歩促進の為の悪を作つた薬は他にも大きな役目をして来た事である。というのは血液の濁りを排除すべき自然浄化作用である。勿論曇りが溜ると健康に影響する。人間本来の活動に支障を及ぼすからである。處が人智未発達の為、右の浄化作用による苦痛をマイナスに解して了解した病気の苦痛を免れようとし、薬を用い始めたのである。というのは浄化作用停止には身体を弱らせる事であつて弱れば浄化作用も弱るから、それだけ苦痛は緩和される、それを病気が治る作用と錯覚したのである。という譯で抑々此誤りこそ今日の如き苦惱に満ちた地獄世界を作つた根本原因である。

右によつてみても、薬というものは其毒によつて單に痛苦軽減するだけのもので治す力は聊かもない。處が其毒が病氣の原因となるのであるから其無智なる事言つべき言葉はないのである。處が驚くべし此

病氣に対する言目は実は深い神の意図があつたのである。それを之から詳しく書いてみるが、先ず文化を發展させる上には二つの方法があつた。其一つは曩に説いた如く悪を作つて善と闘わす事と、今一つは人間の健康を弱らす事である。前者は己に説いたから省くとして後者に就いて説明してみれば、先ず原始時代からの人間の歴史を見れば分る如く最初はありのままの自然生活であつて、衣食住に対しても殆んど獸と同様で健康も体力もそつであつたから、常に山野を馳駆し猛獸毒蛇やあらゆる動物と闘つたのは勿論で、之がその時代に於ける人間生活全部といつてもいいのである。そのように獸的暴力的であつた行動は漸次其必要がなくなるに従い、今度は人間との闘争が始まつたと共に漸次激しくなつたのであるが、それらによつて人智は大いに發達すると共に長い年代を経て、遂に文化を作り出すまでになつたのである。

この様な譯で若し最初から闘争がなく平穩無事な生活としたら人類は原始時代のままか、幾分進歩した程度で智識の發達は少なく、相変らず未開人的生活に甘んじていたであろう事は想像されるのである。

處が前記の如く禁断の木の實を食つた事によつて病が作られ悪が作られたのである。處が今日迄全然それに気が付かない為、今日の如く根強い葉迷信に陥つたのであるから、最も大きな過誤を続けて来たのである。而も一面原始的な健康であつた人間は前記の如く、動物を征服し生活の安全を得るに従い体力も弱つたと共に智識は進んだので、茲に平坦な道を作り馬や牛に車を牽かせて歩行せずとも移動出来るようになったのである。右は日本であるが、外国に於ては石炭を焚きレールの上を走る汽車を考え出し、一層進んで現在の如き自動車・飛行機の如き素晴らしい便利な交通機関を作り出すと共に、他面電気・ラジ

才等の機械を作る事になつたのである。尚又人間の不幸をより減らすべく、社会の組織機構は固より政治・経済・教育・道徳・芸術等凡ゆる文化面に亘つて学問を進歩させ巧妙な機關施設等を作り、それが進歩發達して現在の如き文明社会を作つたのであるから、歸する處來るべき地上天国樹立の為の準備に外ならなかつたのである。以上の如く医学の根本は、人間の悪を作り健康を弱らす目的にあるので豫期の如き世界が出来たのである。處が之以上進むとしたら逆に人類破滅の危険に迄晒されるので最早之以上の進歩は不可とし、茲に神は文明の大轉換を行わんが為私に対し眞理を開示されたのであるから、之によつて悪を或程度制圧し善主惡従の文明世界樹立の時となつたのである。

健康と壽命

(病氣と壽命)

私は之から医学を全面的に批判解剖してみるが、其前に健康と壽命に就いてかかねばならないが、現代医学が眞の医学であるとすれば、病人は年々減つてゆかなければならない筈であり、それと共に壽命も漸次伸びてゆかなければならない道理であるばかりか、そうなる迄に数百年で充分であるのは勿論、現在最も難問題とされている結核も傳染病も全滅するし、病氣の苦しみなどは昔の夢物語になつて了つたであろう。處が事實は全然その反対ではないか。としたら眞の医学でない事は余りに明らかである。

そうして次の人間の壽命であるが、之も造物主が人間を造つた時は壽命もハッキリ決めた事である。尤も之に就いても私は神様から示されているが、最低百二十歳か

ら最高は六百歳は可能という事である。従つて人間が間違つた事さえしなければ百二十歳は普通であるから、そうなたたしなら実に希望多い人生ではないか。而も只長命だけではなく一生の間澁刺たる健康で、病気の不安などは消滅するのであるから、全く此世の天国である。では右の如き間違つた点は何かというところを驚くべし医学の為である。といったら何人も愕然とするであろうが、此百二十歳説に就いて最も分り易い譬えでかいてみるが、先ず人間の壽命を春夏秋冬の四季に分けてみるのである。すると春は一・二・三月の三月として一月の元旦が誕生日となり一月は幼児から児童までで、二月が少年期で梅の咲く頃が青年期であつて、今や櫻が咲かんとする頃が青年期で、それが済んで愈々一人前となり社会へ乗り出す、之が花咲く頃であろう。次で四月櫻の眞盛りとなつて人々の浮き浮きする頃が四十歳頃の活動の最盛期であろう。よく四十二の厄年というのは花に嵐の譬え通り花が散るのである。次で五・六・七月は新緑から青葉の茂る夏の季節で、木の実はたわわに枝に實るがそれを過ぎて気候も下り坂になつて、愈々稔りの秋となり之から収穫が始まる。人間もそれと同じように此頃は長い間の労苦が實を結び仕事も一段落となり、社会的信用も出来ると共に子や孫なども増え人生最後の楽しい時期となる。そうして種々の経験や信用もあり、それを生かして世の為人の為出来るだけ徳を施す事になるのである。それが十年として九十歳になるから、それ以後は冬の季節となるから静かに風月などを楽しみ余生を送ればいいのである。然し人によっては活動を好み死ぬ迄働くのも、之亦結構である。

以上によつてみて四季と壽齡とはよく合っている。この見方が最も百二十歳説の裏付けとしては好適であろう。此理によ

つて医療が無くなるとすれば、右の如く百二十歳迄生きるのは何等不思議はないのである。處が單に医療といつても種々の方法があるが、二十世紀以前は殆んど薬剤が主となつていたので長い間に薬剤で沢山の病氣を作つて来たのである。何しろ薬で病氣を作るのも当然であると共に壽齡の低下も同様である。此何よりの證左として医学が進歩するとすれば病氣の種類が少なくなりそんなものだが、反対に増えるのと正比例しているのである。今一つ人々の氣の付かない重要事がある。それは医学で病氣が治るものなら、医師も其家族の健康も一般人より優良でなければならぬ筈であるのに事實は寧ろ一般人より低下している。何よりも種々の博士中医学博士が一番短命だそうだし、又医師の家族の弱い事と結核の多い事も世間衆知の通りである。そうして現在の死亡の原因は突発事故を除いて悉くは病氣である。而も病死の場合の苦しみは大変なもので之は今更言う必要もないが、よく余り苦しいので一思いに殺して呉れなどの悲鳴の話をよく聞くが、では此様な苦しみは何が為かというところ、全く壽命が来ない内死ぬからで、中途から無理に枝を折るようなものであるからで、恰度木の葉が枯れて落ち青葉が枯れて萎れる。稻が稔つて穫入れるのが自然であるのに青い内に葉をむしり、青い草を引抜き稻の稔らないのに刈り込むと同様で不自然極まるからである。というようにどうしても自然死でなくてはならない。然し近代人は弱くなつてきているから自然死といつても九十歳から百歳位が止まりであろう。

以上説いた如く神は人間に百二十歳以上の壽命を与え病氣の苦しみなどはなく、無病息災で活動するように作つてあるのを愚かなる人間はそれを間違え反つて病苦と短命を作つたのであるから、その無智

なる哀れと言つても云い足りない位である。

救ひ主と贖罪主

私は之まで悪に就いての根本理論として悪が必要であつた事、悪によつて今日の如き文化の進歩発展を見た事をかいて来たが、茲で今一つの重要な事をかかねばならない。それは有史以来今日まで幾多の宗教が生れ、其説く處は例外なく善を勧め悪を極力排斥したのであつた。勿論之は悪其ものを除くのが宗教の建前であるから勿論当然である。處がそれに就いて私はよく斯ういう質問を受けたものである。一体神や佛は愛と慈悲の権化であり乍ら悪人を作つておいて罪を犯させ、それを罰するというのは大いに矛盾してゐるではないか。それならいつそ最初から悪など造つておかなければ罰を当てる必要もないから、それこそ眞の神の愛ではないかというのである。成程この質問は尤も千万で一言もないが、實をいうと私にしても無論同様の考え方であるから、其都度私は斯う答える。

『成程それには違いないが元々私が悪を作つたのでないから、私には説明は出来ない。つまり神様が何か譯があつて悪を作られたのであるから、何れ神様はそれに就いての根本理由をお示しになるに違いないからそれまで待つより仕方がない。』と曰つたものである。處が愈々其時が来たので神は其事を詳しく啓示されたので、私は喜びに堪えないのである。そうして右と同様の疑問を有つてゐる人も多数あるのである。之を讀んだなら暗夜に燈火を得た如く豁然と眼を開くのは勿論であらう。では何故今迄の宗教開祖の悉くが悪を非難したかといつと、曩にも詳しく書いた如く或期間悪が必要であつたから、其深い意

味を主神は知らさなかつたのである。従つて假令正神と雖も知り得る力はなかつたので、正神は何處迄も正義のみによつて天国世界を作らんとするに反し、邪神は何處迄も目的の爲手段を撰ばず式で悪によつて野望を遂げんとしたのである。

處が愈々悪の期限が来たので主神の直接的力の發揮となつた事で、茲に私という人間を選び善と悪との根本義を開示されたのである。それというのは今迄の各宗開祖は力が足りなかつた。其最もいい例としては彼のキリストである。キリスト自身は贖罪主といつたが、救ひ主とは曰わなかつた。贖罪主とは讀んで字の如く罪の贖ひ主である。つまり万人の罪を一身に引受け主神に謝罪をし赦しを乞ふ役目である。早くいえば万人の代理者であり、赦される側の神で赦す方の神ではなかつた。其爲罪の代償として十字架に懸つたのである。

此理は佛教に就いてもいえる。彼の釈尊が最初は佛教によつて極樂世界を造るべく数多くの經文を説き専心教えを垂れたのであるが、どうも豫期の如く進展しなかつた。佛典にもある通り『吾七十二歳にして眞實を得た』と曰われた通り、此時自己の因縁と使命を本當に知つたのである。そこで之迄の誤りを覺り極樂世界出現は遙かに先の未来である事が分つたので、之迄説いた處の經説には誤謬の点少なからずあり、之から説くものこそ眞實であり、と告白し説いたのが彼の法滅儘經であり彌勒出現成就經であり、法華經二十八品であつたのである。一言にしていえば釈尊は佛滅即ち佛法は必ず滅するという事を知り、其後に至つて現世的極樂世界である彌勒の世が来ると曰われたのは有名な話である。只茲で時期に就いて注意したい事は釈尊は五十六億七千万年後三ロクの世が来ると曰われた。併しよく考えて見るといくら釈尊でも其様な途徹もない先の事を

豫言する筈はない。第一そんな先の事を豫言したとて何の意味もないではないか。何故ならばそんな遠い時代、地球も人類もどうなっているか到底想像もつかないからである。之は神示によれば五六七の数字を現はす為で、此数字こそ深い意味が秘めてあつた。即ち、五は日(火)・六は月(水)・七は地(土)であり之が正しい順序であつて、今日迄は六七五の不正な順序であつた。之は後に詳しくかく事として、兎に角キリスト・釈尊の二大聖者と雖も眞理は説けなかつたのである。何よりも経文やバイブルにしても明確を欠き、何人と雖も到底眞理の把握は不可能であつたにみて明かである。勿論時期の関係上止むを得なかつたのである。

處が茲に主神は深奥なる眞理を愈々開示される事となつた。此著に説く處明快にして些かの疑点なく何人も容易に眞理を掴み得るのである。そうして今迄強大なる悪の力が一切を九分九厘迄掌握し、後一厘という間際に来て意外にも茲に一厘の力が現われ、邪神の謀害を一挙に覆すのである。つまり悪主善従であつた世界が善主悪従となるのである。そうして之を具体的にいへば斯うである。即ち九分九厘の悪とは現代医学であつて、之も曩にかいた通り必要悪であるから今迄はそれでよかつたのである。然し其結果として人間の最大貴重な生命を完全に握つて了つた。若し医学が誤つていとすれば生命の危険は言語に絶するといつてもいいであろう。之程世界人類から固く信じられていた医学を是正するのであるから、容易の業でない事は言う迄もない。

地上天国

地上天国とはバイブルから出た言葉で

あり、佛教ではミロクの世といい西洋ではユートピアなどというが勿論意味は同一であつて、つまり理想世界である。之が曩にかいた如く神の目的であるから、現在の歴史は其世界を造る課程であつたので幾變遷を経て漸く天国の一步手前に来たのが現在である。此世界を一口にいへば病貧争絶無の世界である。處が此三大災厄の中の王座を占めているのが病氣であるから、病氣さえ解決すれば貧乏も争いも自ら解消するのは言を俟たない處である。

以上の意味に於て私は病氣に就て根本原因を凡ゆる面から徹底的に解剖し明かにするのである。而も之は医学と異つて人智によつて生れた学問上の研究理論ではなく、神の啓示を土台とし實驗によつて得たる眞理であるから毫末も誤りはないのである。そうして實驗とは今日迄、何万に上る私の弟子が毎日何十万に上る患者の治療に當つており、其治癒率の素晴らしい事は医学の一に對し百といつても決して過言ではない程である。

右の如く驚くべき治病の實績が此地球上に出現したに拘わらず全人類は、治る力のない医学を無上のものと誤信し、病苦に悩み長く生きられる生命を中途に挫折して了う、其無智悲惨なる現状は到底黙視出来ないのである。此様な末期的慘状を神として、そう長く放任して置けないのは当然である。という理由と来るべき理想世界の住民としての健康人を作らんが為との二つの理由によつて、茲に医学の迷妄を發表するのである。

篇

科学

病氣とは何ぞや

愈々之から病氣に就ての一切を解説する順序となつたが、抑々病氣とは何かという一言にしていえば、体的にあつてはならない汚物の排泄作用である。従つて体的に汚物さえなければ血行は良く、無病息災で年中澆刺たる元氣を以て活動が出来るのである。としたら一体汚物とは何であるかというところ、之こそ薬剤の古くなったもので毒血又は膿化した不潔物である。では何故其様な病氣の原因となる處の薬剤を使用し始めたかというところ、之こそ大いに理由があるから詳しくかいてみるが、抑々人類は未開時代は兎も角漸次人口が増えるに従つて食物が不足になつて来た。そこで人間は食物を探し求め手当たり放題に探つては食つた。勿論濃作法も漁獲法も幼稚の事として、山野河川至る處で木の實・草の實・虫類・貝類・小魚等を漁つたが其良否など見分ける術もないので、矢鱈に食欲を満たそうとしたので毒物に中てられ其苦痛を名付けて病氣と謂つたのである。そこで何とかして其苦痛を脱がれやうと草根木皮と試みた處、偶々苦痛が軽くなるものもあるのではと稱して有難がつたのである。其の中での藥の発見者として有名なのが、中国漢時代に現はれた盤古氏で別名神農という漢方藥の始祖人であるのは余りにも有名である。

右の如くであるから食物中毒の苦痛も勿論其浄化の爲であり、藥効とは其毒物の排泄停止によつて苦痛が緩和されるので、已に其頃から浄化停止を以て病を治す手段と思つたので、此迷盲が二千有餘年も続いて来たのであるから驚くの外はない。そして西洋に於ても草根木皮以外凡ゆる物から藥を採つたのは現在と雖もそうである。従つて藥で病氣を治す考え方は、之程開けた今日でも原始時代の人智と些かも變つていないのは不思議といつていい。

偕て愈々之から實際の病氣に就いて徹底的に解説してみるが、抑々人間として誰でも必ず罹る病としては感冒であろうから、之から解説するとしよう。先ず感冒に罹るや発熱が先駆となり、次で頭痛・咳嗽・喀痰・盗汗・節々の痛み・懈さ等、其内の幾つかの症状は必ず出るが、此原因は何かというところ体内保有毒素に浄化作用が発り、其排除に伴う現象である。處が其理を知らない医療はそれを停めようとするので之が大変な誤りである。今其理由を詳しく説明してみると斯うである。即ち人間の体内に毒素があると機能の活動を妨げるので、自然は或程度を越ゆる場合其排除作用を起すのである。排除作用とは固まつた毒素を熱によつて溶解し喀痰・鼻汁・汗・尿・下痢等の排泄物にして体外へ出すのであるから、其内の僅かの苦痛さえ我慢すれば順調に浄化作用が行われるから毒素は減りそれだけ健康は増すのである。處が医学は逆に解して苦痛は体内機能を毀損させる現象として悪い意味に解釈する結果、極力停めようとするのであるから全く恐るべき誤謬である。そして元來浄化作用とは活力旺盛であればある程起り易いのであるから弱らせるに限るから、茲に弱らせる方法として生れたのが医療である。勿論弱つただけは症状が減るから之も無理はないが、實際は無智以外の何物でもないのである。その弱らせる方法として最も効果あるものが藥である。つまり藥と稱する毒を使つて弱らせるのである。人体の方は熱によつて毒素を溶かし液体にして排泄しようとして神経を刺戟する、それが痛み苦しみであるのを何時どう間違えたものか、それを悪化と解して溶けないよう元通りに固めようとする。それが氷冷・濕布・下熱劑等であるから實に驚くべき程の無智で、之では病氣を治すのではなく治さないようにする事であり、一時の苦痛緩和

を治る課程と思い誤ったのである。處が前記の如く苦痛緩和手段其ものが病氣を作る原因となるのであるから、由々しき問題である。つまり天與の病氣という健康増進の恩恵を逆解して、阻止排撃手段に出る其方法が医学であるから、其無智なる事評する言葉はないのである。近来よく言われる闘病という言葉も右の意味から出たのであろう。

右の如く感冒に罹るや、排泄されようとする毒素を停めると共に薬毒をも追加するので一時は固まって苦痛は解消するから、之で治つたものと思つが、之こそ飛んでもない話で却つて最初出ようとした毒素を出ないようにして後から追加するのであるから、其結果として今度は前より強い浄化が起るのは當然である。其證據には一旦風邪を引いて一回で治り切りになる人は殆んどあるまい。又陽氣のvari目には大抵な人は風邪を引くし風邪が持病のようになる人も少なくないので、そういう人が之を読んだら成程と肯くであろう。此様に人間にとつて感冒程簡単な体内清潔作用はないのであるから、風邪程有難い物はないのである。處が昔から風邪は万病の基などといつてゐるが之程間違つた話はない。何よりも近來の如く結核患者が増えるのも風邪を引かないようにし、偶々引いても固めて毒素を出さないようにする。従つて結核豫防は風邪引きを大いに奨励する事である。そうすれば結核問題など譯なく解決するのである。それを知らないから反対の方法を採るので益々増えるのは當然である。

そうして右の如く病原としての毒素固結であるが、此原因は先天性と後天性と両方ある。先天性は勿論遺伝毒素であり、後天性は生れた後入れた薬毒である。處が其両毒は人間が神経を使う局部え集中固結する。人間が最も神経を使う處としては上

半身、特に頭腦を中心とした眼耳鼻口等であるから、毒素は其處を目掛けて集中せんとし一旦頭部附近に固結するのである。誰でも首の周り肩の附近を探ればよく分かる、其處に固結のない人は殆んどないといつてもいい。而も必ず微熱があるのは軽微な浄化が起つてゐるからで、頭痛・頭重・首肩の凝り・耳鳴・眼脂・鼻汁・喀痰・齒槽膿漏等はその為である。處が毒結が或程度を越ゆると自然浄化が発生するし、其他運動によつて体力が活潑となつたり氣候の激変によつて自然順応作用が起つたりする等の諸原因によつて、風邪を引くといふのは之である。又咳嗽は液体化した毒結排除の為のポンプ作用であるが、之は首の附近とは限らない各部の毒結もそうである。次に嚏であるが之は恰度鼻の裏側、延髓附近の毒素が液体となつたのを出すポンプ作用であるから、此理を知れば實際とよく合つ事が分るのである。

右の如く頭腦を中心とした上半身の強烈な浄化作用が感冒であるから此理窟さえ分れば、假令感冒に罹つても安心して自然に委せておけばいいので、体内は清浄となり順調に割合早く治るのであるから、此事を知つただけでも其幸福の大なる事は言つ返もない。

病氣と醫學

前述の如く、私は反文明の原因としての戦争と病氣の二大苦を挙げたが、其外に今一つの貧困がある。然し之は戦争と病氣とが解決出来れば、自然に解決されるものであるから書かないが、先ず戦争の原因から説いてみると、之は勿論精神的欠陥即ち心の病氣にあるので、之も肉体の病氣さえ解決出来れば共に解決されるべきものである。

右の如く病氣も戦争も貧困も同一原因

であるとしたら、眞の健康人即ち靈肉共に完全な人間を作ればいいのである。然し斯う言えば至極簡單のようであるが、実は之が容易でない事は誰も想像されるであらう。然し私から言えば決して不可能ではない。何となれば必ず解決出来るだけの方法を神から啓示されているからで、之が私の使命でもあり、その一段階としての此著である。

従つて先ず病氣なるものから書いてみるが、病と言つても前述の通り肉体と精神との両方であるが、現代人は普通病とさえ言えば肉体のみのもと思つてゐる處に誤りがあるので、此精神の不健康者こそ戦争の原因となるのである。其様な譯でどうしても人間が肉体と精神と共に本當にならない限り眞の文明世界は生まれれないは言う迄もない。ではどうすればそれが実現されるかといつと、それには勿論其根本が解ると共に可能の方法も発見せられなければならない。處が私はそれに関する根本義を発見し、而も絶対解決の方法迄も把握し得たので、茲に詳細徹底的にかくのである。それに就ては先ず吾々が住んでいる此地上の真相から解いてみるが、元來此地上の一切は今日迄の学問では物質のみの存在とされており、それ以外は無とされて来たのである。然し此考え方たるや非常に誤りであつて、無處ではない人類にとつて之程重要なものはない程のものが確實に存在している事である。にも拘わらずそれが何故今日まで分つていかなかったかといつと、全く唯物科学にのみ依存して来た結果であるからで、即ち唯物科学に於ての理論は見えざるものは無と決めていた以上、之程進歩したと思われる唯物科学でも把握出来なかつたのである。右の如く唯物科学で知り得ないものは悉く否定の闇に葬つて了つた。其独断的觀念こそ、学者の頭腦なるもののいと頑な偏見さであ

る。之に就て多くをいう必要はあるまい程、人類の幸福が文化の進歩に伴はない事実である。それを之から漸次説き進めてみよう。

以上説いた如く精神と肉体共に完全な人間を作るのが眞の医学であるとしたら、現代医学は果たして目的通りに進んでいるであろうか、茲で検討する時それは余りにも背反している事実である。それ處ではない寧ろ病氣を作り病人を増やしていると言つても過言ではない程の誤りを犯している事で、それを之から詳しく書いてみるが、先ず医学なるものの今日までの根本的考え方である。といつのは医学は病氣の原因が全然分つていないから凡て反対に解釈している。勿論唯物科学本位で進んで来たものとすれば致し方ないであらう。

右の結果医学は病氣の場合外部に表われたる苦痛を緩和するのみに専念している。従つて医学の進歩とは一時的苦痛緩和法の進歩したものであつて、その方法として採られているものが彼の薬剤・機械・放射能等の物質の応用である。成程之によつて病氣の苦痛は緩和されるので、之で病氣が治るものと誤認し、緩和法を続行するのであるが、事實は苦痛緩和と病氣の治る事とは根本的に異つのである。即ち前者は一時的で後者は永久的であるからである。而もその苦痛緩和の方法自体が病を作り病を悪化させる結果なのであるから問題は大きいのである。何しろ唯物的医学であるから、人体も單なる物質と見るのみか人間と人間以外の動物をも同一視するのである。それによつて動物を研究資料として病理の発見に努め、偶々何等かの成果を得るや直ちに人間に応用するのであるが、之が非常な誤りである。何となれば人間と動物とは形も本質も内容も全く異つてゐる事で之に氣が付かないのである。此理によつて人間の病氣は人間を對象として研究さ

れなければならぬ事は余りにも明らかであつて、之以外人間を治す医学は確立される筈はないのである。

そうして今一つ斯ういふ点も知らなければならぬ事は、動物には人間のような神経作用がないが人間には大いにある。人間が神経作用の為にどの位病気に影響するか分らない。例えば一度結核と宣告されるや此一言で患者の神経は大打撃を受け、目に見えて憔悴する事実は医家も一般人もよく知る處であらう。處が動物にはそういう事が全然ないに見ても肯れるであらう。

以上によつて見る時現代医学の欠陥は靈と体で構成されている人間を、靈を無視して体のみを対象とする事と人間と動物を同一に見ている点で、これが主なるものである事を知らねばならないのである。

医学の解剖

私は前項迄に医学の誤謬を大体かいたつもりであるが、尚進んでこれから鋭いメスを入れて徹底的に解剖してみよう、といつても別段医学を誹謗する考えは毫末もない。只誤りは誤りとして、ありのまま指摘する迄の事であるから虚心坦懐になつて読みたいのである。それには先ず事実によつて説明してみる方が早からう。先ず何よりも医師が患者から病気の説明を求められた場合、断定的な答えはしない、甚だ曖昧模糊、御座なりである。例えば患者に対する言葉であるが、何の病気に就いても言い切る事が出来ない。「貴方の病気は治ると思つ」、「治る譯である」、「医学上そういう事になつてゐる」、「此療法が効果ありとされている」、「此療法以外方法は無い」、「養生次第で治らない事はない」、「貴方の病は万人に一人しかない」などと言つ

かと思えば、「貴方は入院しなければいけない」、と言われるので患者は「入院すれば治りますか。」と訊くと「それは請合えない」といふように実に撞着的言葉である。又予想と実際と外れる事の如何に多いかも医家は知つてゐるであらう。

そうして最初診察の場合型の如く打診・聴診・呼吸計・体温計・レントゲン写真・血沈測定・注射反応・顕微鏡検査等々機械的種々な方法を行うが、医学が眞に科学的でありとすればそれだけで病気は適確に判る筈である。處が両親や兄弟の死因から祖父母・祖祖父母に迄及ぶのは勿論、本人に対しても病歴・既應症など微にいり細に涉つて質問するのである。之等も万全を期す上からに違いないが、實をいふと余りに科学性が乏しいと言えよう。處がそう迄しても餘想通りに治らないのは全く診断が適確でないか、又は治療法が間違つてゐるか、或は両方かであらう。事実本当に治るものは恐らく百人中十人も難しいかも知れない。何となれば假に治つたようでも、それは一時的であつて安心は出来ない。殆んどは再発するか、又は他の病氣となつて現われるかで、本当に根治するものは果たして幾人あるであらうか疑問と言えよう。此事實は私が言つ迄もない、医師諸君もよく知つてゐる筈である。此例として主治医と言つ言葉があるが、若し本当に治るものならそれで済んで了うから主治医などの必要はなくなる譯である。

右によつても判る如く、若し病氣が医学で本当に治るとしたら段々病人は減り医師の失業者が出来、病院は閑散となり経営も困難となるので売物が続出しなければならぬ筈であるのに事實は凡そ反対である。何より結核だけに見ても療養所が足りないベッドが足りないと言つて、年々悲鳴を上げてゐる現状である。政府が発表した結核に関する費額は官民合せてザツ

ト一ケ年一千億に上がるといのであるから、實に驚くべき数字ではないか。之等によつてみても現代医学の何処かに一大欠陥がなくてはならない筈であるに拘わらず、それに気が付かないと言つのは不思議である。といつのは全く唯物科学に捉われ他を顧みないからであらう。

そうして診断に就いて其科学性の有無を書いてみるが之にも大いに疑点がある。例えば一人の患者を数人の医師が診断を下すが區々である。といつのは茲にも科学性が乏しいからだと言えよう。何となれば若し一定の科学的基準がありとすれば其様な事はあり得る譯があるまい。若し医学が果たして効果あるものとすれば何よりも医師の家族は一般人よりも病気が少なく健康であり、医師自身も長壽を保たなければならぬ筈である。處が事實は一般人と同様處か反つて不健康者が多いという話で、之は大抵の人は知っているのであらう。而も医師の家族である以上手遅れなどありよう譯がないのみか、治療法も最善を盡す事は勿論であるから、どう考えても割り切れない話だ。そればかりではない、医師の家族が病氣の場合その父であり夫である医師が直接診療すべきが常識であるに拘わらず、友人とか又は他の医師に診せるのはどうした事か、之も不思議である。本当から言えば自分の家族としたら心配で他人に委せる事など出来ない譯である。それに就いてよく斯ういふ事を聞く。自分の家族となるとどうも迷いが出て診断が付け難いと言つのである。としたら全く診断に科学性がないからで、つまり推定憶測が多分に手伝つからであらう。

私は以前某博士の述懐談を聞いた事がある。それは仲々適確に病氣は判るものではない。何よりも大病院で解剖の結果診断と異う数は一寸口えは出せない程多いといつた事や、治ると思つて施した治療が豫

期通りにゆかない處か反つて悪化したり、果ては生命迄も危なくなる事がよくあるので、斯ういふ場合どう説明したら患者も其家族も納得するかを考え、夜も寝られない事さえ屢々あり、之が一番吾々の悩みであるといつので、私も成程と思つた事がある。此様に医学が大いに進歩したと言いつら診断と結果が實際と餘りに喰違つので、医師によつては自分自身医療を餘り信用せず精神的に治そうとする人もよくあり、老練の医師程そつういふ傾向がある。彼の有名な故人澤達吉博士の辞世に「効かぬと思えど之も義理なれば、人に服ませし薬吾服む」といふ歌は有名な話である。又私は時々昵懇の医博であるが自身及び家族が羅病の場合自分の手で治らないと、私の處へよく来るが、直に治してやるので喜んでゐる。以前有名な某大学教授の医博であつたが、自身の病疾である神経痛も令嬢の肺患も私が短期間で治してやつた處、某婦人は大いに感激して医師を廃め本療法に転向させるべく極力勧めたが、地位や名譽、經濟上などの關係から決心が付き兼ね、今以て其儘になつてゐる人もある。今一つ斯ういふ面白い事があつた。十数年前或大実業家の婦人で顔面神経麻痺の為、二回と見られない醜い顔となつたのを頼まれて往つた事がある。其時私は何にも手当をしてはいけなと注意した處、家族の者が餘り五月蠅いので某大病院へ診察だけに行つたが、其際懇意である其病院の医長である有名な某博士に面会した處、その博士曰く『その病氣は二年も放つておけば自然に治るのだから電気なんか掛けてはいけなよ。此處の病院でも奨めやしないか』と言われたので『仰言る通り奨められました。私はお断りしました』と言つと『それは良かった』といふ話を聞いたので私は世の中には偉い医師もあるものだと思つた事があつた。その夫人は二ケ月程で全快し

たのである。

偕て愈々医学の誤謬に就いて解説に取り掛かる。

病気とは何ぞや・寒冒

愈々之から病気に就いての解説であるが、現代医学の解釈は人体を単なる物質と見做(みな)して、唯物療法を進歩させて来た医学はどの点に最も欠陥があるかを順を逐つて書いてみるが、それに就いては先ず実際の病気を取上げて説明してみるのが最も判り易いからさういう事にする。

先ず人間として何人も経験しない者のない病としては寒冒であろう。處が寒冒の原因は医学では今以て不明とされており、近来僅かに発見されたのがウイルスによる空気伝染とかアレルギー性によると言われている位で、吾等からみれば問題とするには足りない稚説である。此説も近き将来無意味とされる事は間違ひあるまい。抑々人間は先天的に種々なる毒素を保有している事は医学でも認めている。例へば天然痘・麻疹・百日咳等は元より、未知の毒素も色々あるであろう。處でそれら毒素は自然生理作用が発生し外部へ排泄されようとする、これを吾等の方では浄化作用と言ふ。さうして毒素は最初一旦人体の各局部に集溜する。その場合神経を使う處程多く集まる。人間が最も神経を使う處は言つまでもなく上半身特に頭脳に近い程そつである。人間が目が醒めている間手足は休む事はあつても頭脳を始め目・耳・鼻・口等は一瞬の休みもない。としたら毒素集溜の場合もさうであつて肩・頸・淋巴腺・延髄・耳下腺付近は元より頭脳が主となつている。此様に各部に集溜した毒素は時日を経るに従つて漸次固結する。それが或限度に達するや排除作用が発生する。茲

に自然の恩恵を見るのである。何となれば固結の為血行が悪くなり、肩・頸が凝り頭痛・頭重・視力減退・耳鈍聴・鼻詰まり・臭覚の鈍化・齒槽膿漏・齒牙の劣弱・息切れ・手足の弛緩・腰痛・浮腫等々により活動力が減殺されるからで、それが為人間本来の使命が行われない事になる。それで造物主は病気という結構な浄化作用を作られたのである。

右の如く毒素排除作用の苦痛が病気であるとしたら、病気こそ浄血作用であり健康上最も必要な物で、神の恩恵中最大な物といふべきである。故に若し人類から病気を取除いたとしたら人間は漸次弱つて遂には滅亡に到るかも知れないのである。處が私は病無き世界を造るといふのであるから矛盾するように思うであろうが、これは根本的に異つている。というのは人間が無毒になれば浄化作用の必要がなくなるから共に病気もなくなるのは判り切つた話である。此意味に於て私は之から出来るだけ解り易く徹底的に説いてみよう。

話は戻るが固結毒素の排除作用を私は浄化作用と名付けたが、先ず初め寒冒に罹るや発熱が先駆となる。自然は固結毒素の排除を容易ならしめんが為熱で溶解させ液体化させる。この液毒は速やかに肺に侵入するが此作用は実に神秘であつて、例えば吾等が浄靈(之は療病法の名稱)によつて固結毒素を溶解するや、間髪を入れず肺臓内に侵入する。實際筋肉でも骨でも透過して了つのである。何より身体各局所にある固結毒素(以下毒結と稱す)が普通一二箇所位なら軽い症状で済むが局所を増す毎に重くなる。最初軽いと思つた寒冒が漸次重くなるのはその意味である。

右の如く液毒は迅速に肺臓内に侵入し稀薄な場合は痰となつて即時排泄されるが、濃度の場合は一時停滞し咳というポンプ作用を持つて間もなく気管を通じて外

部へ排泄される。咳の後には必ず痰が出るに見ても明らかであり、嘔の後には鼻汁が出るのも同様の理である。又頭痛・咽喉の痛み・中耳炎・リンパ腺炎・手足の関節や鼠蹊腺等の痛みはいずれも其部にあった毒結が溶解し出口を求めようとして動き始める、それが神経を刺戟するからである。そうして液毒には濃い薄いが出来る。濃いのは喀痰・鼻汁・下痢等になるが、極薄いのは水様となり盗汗や尿によって排泄される。此様に浄化作用なるものは、最も自然に合理的に行われるもので、造物主の神技に感嘆せざるを得ないのである。

一 体造物主即ち神は人間を造っておき乍ら病気などという人間を苦しめ活動を阻害するような物を与えられる筈はない。常に健康であらねばならないに拘わらず、人間が誤った考えで毒素を作り貯溜させるので、止むなく排除の必要が発る。それが病気であるとすれば寒冒の場合も何等の療法もせず、自然に放任しておけば完全に浄化が行われるから順調に治り健康は増すのである。此理によって人間は出来るだけ風邪を引くようにすべきで、そうすれば結核等という忌わしい病は跡を絶つのである。

處がどうした事か何時の頃からか不思議にも右の清浄作用を逆解して了った。そこで発病するや極力浄化を止めようとする。何しろ浄化の苦痛を悪化の苦痛と間違えたのだから堪らない、そのため熱を恐れ下げようとする。解熱すれば毒結の溶解が停止されるから喀痰を初め凡ゆる症状を軽減する。恰度病気が治るように見えるのである。判り易く言えば折角溶け始めた毒結を元通りに固めようとする、其固め方が医療なのである。氷冷・濕布・薬剤・注射等すべてはそれである。全部固まると同時に症状が消失するので之で治ったと思つて喜ぶが、何ぞ知らん実は折角排除を

しようとする其手を抑えつけるようなもので、之は事実が證明している。よく風邪が拗れるというが之は人体の方は浄化しようとする、それを止めようとする為で、つまり浄化と非浄化との摩擦となるから長引くのである。一旦風邪が治つても暫くすると必ず再発するのを見ても分るであらう。故に結果から言えば医療とは病気を治す方法ではなく治さない延期させる方法という事である。従而本当に治るという事は毒素を外部へ排泄させ体内が清浄となつて病気の原因が皆無となる事である。だから眞の医療とは浄化が発つた際、固結毒素をより速く溶解させより多く体外へ排泄させる事でそれ以外眞の療法はないのである。

右の理に対し一つの譬えを書いてみよう。即ち借金をしている場合である。段々利息も溜り、期限が来て返済を迫られるので一時に拂つのは辛いから、外から利子の金を借りて一時凌ぎをする。すると又期限が来たので又借金して一時免れをするという工合で、元金の外に利子も段々増え請求も厳しくなるが益々返金が出来なくなる。そこで貸主は承知せず差押え又は破産の訴えをするが、遂に返済が出来ないので破産する。つまり寒冒も之と同様で最初の返済期が来た時苦しくとも拂つて了えばそれで済むものを、辛いから借金を増しても一時免れをする。それが薬を主とした医療である。従つて引き延ばす毎に薬毒が殖え遂に一時に請求される事となる、之が肺炎である。處が貸主も相手の支拂い能力を考慮し緩慢な請求をする、之が結核と思えばいいのである。

肺炎と結核

寒冒と最も密接な関係ある病気として

は言う迄もなく肺炎であろう。特に現在日本に於て最も悩みとされているものは之であるから充分解説する必要がある。抑々肺炎と結核という病気の初因は勿論寒冒からである。というのは前項に述べた如く折角寒冒という浄化作用が発生するや医療は極力停止させようとして種々の手段を行う。之も既に述べた通りであるが、その中の最も不可であるのは薬剤と氷冷である。元来薬剤とは如何なるものであるかというところと悉く毒物である。にも拘わらず何故毒物を薬剤として用いるようになったかというところ、今迄に説いた如く浄化作用停止が最も効果があるからである。

茲で浄化作用なるものの本質を説いてみるが、曩に述べた如く体内の毒素を排除すべく生れ乍らに保有している自然良能力である。従つて此力の強弱によつて浄化力にも強弱が出来る。何よりも結核が青少年に多いという事は浄化力が旺盛であるからで、壮年から老年に及ぶに減少するのも其理由であり、又各種の伝染病が青少年や小児に多いのも同様の理である。そこで病氣即ち浄化発生の場合医学は浄化を極力止めようとする。それには何よりも体力を弱らせる事である。その唯一の方法として考えられたのが毒物を体内に入れる事で、それによつて体力が弱るから浄化も弱り病氣症状も軽減するという譯である。

又氷冷は何故不可かというところ毒素を溶解すべき熱を冷やすから浄化が弱り、元通り固まり、それだけ苦痛も減る事となる。勿論濕布も同様であつて只些か異う点は人体は不斷に皮膚の毛細管から呼吸しているのですそれを窒息させるから、其部の浄化は停止し症状は緩和されるのである。

特に近來は注射が流行するが、之も毒分の強い薬は服んでは中毒の危険があるから皮膚から注入するのである。

感冒に罹つた場合右の如く薬毒やその

他の方法で浄化停止を行う以上、保有毒素の幾分は減るが大部分は残存し再び固まつて了つと共に、新しい薬毒も追加されるので寒冒に罹る毎に毒素は累加し、ある程度に達するや一時に浄化活動が起る。それが彼の肺炎で前項に説いた借金の理で、何より肺炎の特異性は喀痰が肺臓内に多量に溜る事でその為喘音が甚だしいのである。喘音とは呼吸の度に肺胞が動くにつれての喀痰の響きである。又呼吸困難は喀痰多量の為、肺臓内の容積が縮小するから必要量の空気を吸うには頻繁に呼吸しなければならぬからである。此の理によつて肺炎の場合何等の療法もせず、自然にしておけば痰は出るだけ出て順調に治るのである。處が医療は凡ゆる手段によつて浄化を停止させようとする。何よりも肺炎に対しては医療は特に強い薬を用いる。それは毒が強いと言つ譯で浄化停止に強力だからである。そんな譯で強い浄化と強い浄化停止とで猛烈な摩擦が生じ非常な苦痛が伴う。その為食欲減退・高熱による体力消耗と相俟つて衰弱死に至るのであるから、医学の誤謬たるや言つべき言葉を知らないのである。

右の如く肺炎は強烈な浄化である事は体力が旺盛であるからで、体力の弱つている人は浄化が緩慢に発る。それが結核である。そうして医師が初めての患者を診断する場合、種々の方法の中今日最も決定的とされているものはレントゲン写真である。之は肺臓内の雲翳又は空洞が写るからで、之を見て結核と断定するが、医学は之は何が原因であるかを知らない。そこで其原因を書いてみるが、感冒の説明にもある通り最初液体となつた毒素が一旦肺臓内侵入停滞した時、極力浄化停止を行う結果喀痰は排泄されず肺臓内に残存して、日を経るに従つて固結となる。それが雲翳であつてみれば之は全く人為的所産と言えよ

う。故に最初の液体侵入の際は肺臓は何等異常はないのである。そうして固痰の位置が比較的上部の場合には肺炎カタル又は肺門リン巴腺と言つのである。それと似たものに肺浸潤がある。之は軽微な肋膜炎又は肋骨付近に溜結せる毒素が浄化溶解し、肺臓内に浸潤・吐痰とならうとするので、此の場合も医療は固めようとするから容易に治らないので、何れも放任しておけば順調に治癒するのである。

そうして一度結核と断定するや寒冒と同様医療は極力浄化停止を行うが、それに最も効果ありとされているのが近來熱心に推奨されている彼の安静法である。處が此の安静法が曲者である。何となれば假に健康者が一ヶ月も安静にすれば運動不足で食欲は減退し、体力は減り外出しないため顔色は悪くなり目に見えて衰弱し一寸動いても息切れをするようになるので、況んや病人に於いておやである。尚其上薬毒を入れられ栄養と稱して動物性蛋白を多く攝らせるが、右は悉く衰弱を増させる方法であるから、結核患者ならずとも衰弱するに決まっている。

此様に衰弱法を行う結果予期通り浄化力は極度に減退し症状は減り遂に無熱となり、咳も吐痰も無くなるので之で恢復したと思つて喜ぶが、何ぞ知らん実は浄化以前の状態に還元させたままで、而も反つて薬毒は増し体力は弱り消極的小康を得た迄で、眞に治つたのではないから何かの機会に触れるや俄然悪化し重体に陥り遂に死に至る事が往々ある。斯ういう経路は医家もよく経験する處であらう。故に医学では決して治るとは言わない、固めるというにみても明かである。又経過中に患者が偶々少し運動でもすると直に発熱する。すると医師は周章てて戒めるが、之は運動によつて沈静していた浄化が頭をもたげるからで本当はいいのである。よく長い間掛

つて漸く治つたと曰われ、ヤレ安心と普通の生活を始めるや間もなく再発、元の木阿彌となる事もよくあるが、之等も何年掛りで漸く固めた毒素が俄に溶け始めた為である。以上によつて明かな如く今日の医療が如何に誤っているかで忌憚なく言えば医療が結核を増やしていると言つても過言ではなからう。

茲で結核菌に就いて大いに注意したい事がある。医学では結核菌は伝染するとして恐れるが、それも無い事はないが大部分は自然発生である。前述の如く最初喀痰が肺臓内に侵入するや医療は固めて出なくするので、時日の経過につれて腐敗し微生物が発生する、之が結核菌である。そんなった痰は悪臭があり粘着力が強いものである。考えてみるがいい如何なる物質でも古くなれば腐敗する、腐敗すれば微生物が湧くのは物質の原則である。ましてや体温という好条件も手伝つからである。之によつてみても最初の寒冒時、肺臓内に喀痰が滞留した時極力出してええればそれで済んで了う。それを一生懸命出さないようにして腐敗させ菌まで湧かせ、菌の蠶食によつて空洞さえ作るのであるから、結果からいへば善意の加害的行為とも言えるであらう。此理に目醒めない限り今後如何に多くの犠牲者が出るか測り知れないものがある。

肺患と薬毒

現在の結核療法に就いて注意すべき事は今最も有効とされているものに氣胸療法がある。之は肺に空洞のある場合肺胞を萎縮させて出来るだけ縮小させようとして肺の活動を鈍らせる。つまり肺の安静法でその為空洞の原因である濃度の喀痰も固まると共に空洞も縮小され一時は小康

を得るが、普通人の生活をするようになる
と再浄化が起り、元の木阿彌となるのが殆
んどである。としたら之も根本的療法でな
いのは勿論である。

その他結核以外の肺患に対しても簡單
に説明してみるが、肺壞疽とは肺臓と肺膜
の中間に腫物が出来るので放置しておけ
ば腫れるだけ腫れて自然に穴が穿き多量
の血膿が痰となつて出て全治するのであ
る。之も浄化の一種であるが医学は浄化停
止するので仲々治らない、ついに不結果
に終るのである。

又粟粒結核は肺胞にブツブツが出来
るのだが、之も皮膚の湿疹と同じようなもの
で一種の浄化であるから、自然にしておけ
ばブツブツから排膿されて全治する。又肺
臓癌は肉食多量が原因で、肉中に含む一種
の毒素によつて血液が濁りそれが肺臓内
に溜り、一旦硬度の腫物となるが、浄化作
用によつて逐次喀痰となつて出る。然し此
病症は性質が執拗で長くかかるのは勿論
である。原因は菜食不足の為であるから菜
食を多く攝るだけで全治するのである。何
よりも肉食多量の西洋人に多いにみても
肯かれるであろう。次に麻疹の際肺炎を併
発する事がよくあるが之は何でもない。只
呼吸頻繁の為驚くが之は麻疹の際肺胞に
表われ肺の容積が減る為で其儘にしてお
けば二・三日で必ず治るものである。

次に結核に關聯した病気に喉頭結核が
ある。これは結核の末期に發生するもので、
特異性としては声が嘎れる事と食事の際
咽喉が痛み嚥下困難になる症状である。此
原因は痰が咽喉を通る際猛毒痰である為、
気管や咽喉の粘膜を刺激し加答児を起こ
すからで、此痰は最も古く腐敗の度も強い
のである。だから痰の出る間は仲々治らな
いから先ず見込みはない。而も此時は衰弱
も酷くなつているからでもあり、医師も喉
頭結核と判るや必ず匙をなげるのである。

次に腸結核であるが、此症状は臍を中心
に腹部全体に涉つて無数の固結が出来る。勿
論押すと痛いからよく判ると共に必ず多
少の熱がある。此固結が熱で溶解されて下
痢となつて毎日のように出るが、勿論此固
結は薬毒の固つたものであるから服薬を
廢めなければ治らないに決つてゐる。又下
痢の為衰弱を増す病氣だから医師も恐れ
るのである。

最後に結核が他の病氣に較べて執拗で
治らない原因を書いてみるが、一度結核と
なるや何といつても薬物が主となる以上
最初から種々の薬物を体内に入れる。それ
が原因となつて経過が長引くので患者は
焦つて凡ゆる薬物を求めるといふ鼯鼠ゴ
ツコになり、漸次体内に薬物が溜まり溜ま
つてどうにもならなくなる。其薬毒が肉体
を喰む以上遂に不治となるのである。そう
なると痰迄が薬の臭いがする位であるか
ら、全く恐ろしい錯誤と言えよう。従つて
三期結核は薬毒病と言つてもいい位で斯
ういふ患者を私はよく治療したが、その目
的は薬毒を除るだけである。何よりも薬毒
が減るに従つて漸次恢復するに見て明か
である。但し此薬物を除る方法こそ私の発
見した浄靈法である。

結核と精神面

結核に就いて割合關心を持たれていな
いものに精神面がある。處が事実之程重要
なものはない。誰も知る如く一度結核の宣
告を受けるや如何なる者でも精神的に一
大衝撃を受け、前途の希望を失い世の中が
眞つ暗になつて了う。言わば執行日を定め
ない死刑の宣告を受けたよつなものであ
る。處が可笑しな事にはそれを防ごうとす
る為か、近來結核は養生次第、手当次第で
必ず治るといふ説を医局も医師も旺んに

宣伝しているが、之をまともに受取るものは殆んどあるまい。何故なれば實際療養所などに入れられた者で本当に治つて退院する者は幾人もあるまいからである。然し偶には全治退院する者もないではないが、大部分は退院後再発して再び病院の御厄介になるか、自宅療法かで結局死んで了うのである。だから何程治ると宣伝しても信じないのは当然であろう。

其様な譯で結核と聞いただけで、忽ち失望・落膽・食慾は不振となり元氣は喪失する。何れは死ぬという予感がコビリついて離れないからで実に哀れなものである。私も十七・八才の頃、当時有名な入澤博士から結核と断定された事があるので其心境はよく判る。そういう次第で結核宣告するのもよくないが、そうかと言つて現在の結核療法では安静や其他の特殊療法の関係上、知らない譯にもゆかないというジレンマに陥るのである。そうして近來ツベルクリン注射やレントゲン写真などによつて、健康診断を行う事を万全の策としているが、之は果たして可いか悪いかは疑問である、私はやらない方がいいと思う。何故なれば現在何等の自覚症状がなく健康と信じていた者が一度潜伏結核があると聞かされるや、晴天の霹靂の如き精神的ショックを受けると共にそれからの安静も手伝いメキメキ衰弱し、数か月後には吃驚する程憔悴して了う。以前剣道四段という筋骨隆々たる猛者が健康診断の結果、潜伏結核があると云い渡され、而も安静と来たのでフウフウ言つて臥床している状(さま)は馬鹿々々しくて見ていられない程だ。何しろ少しも自覚症状がないので凝乎と寝ている辛さは察して呉れと言つのである。處が半年位経た頃は、頬はゲッソリ落ちて顔色も蒼白一見結核面となつて了つた。それから翌年死んだという事を聞いたが、之などは実に問題であろう。勿論健康診断など

受けなかつたらまだまだピンピンしていたに違いないと思つて私は心が暗くなつたのである。

右のような例は今日随分多いであろう。處が之に就いて面白いのは、医学の統計によれば百人中九十人位は一度結核に罹つて治つた痕跡があるといつのである。此事より解剖によつて判つたといつた話で医家は知つている筈である。してみれば寧ろ健康診断など行わない方が結核患者はどの位減るか判らないとさえ、私は常に思つている事である。併し医家は曰つてであろう。結核は感染しない病氣なら兎に角伝染病だから、結核菌種を有つている以上甚だ危険だからそれを防ぐ為に早く発見しなければならぬし、又早期発見が治療上効果があるからと言つてであろうが、後者に就いては詳しく説いたから略すが、前者の伝染に就いて書いてみるが、之が又大変な誤りで結核菌は絶対感染しないことを保證する。私が之を唱えると当局はよく目を光らせるが、之は結核の根本がまだ判つていないからである。以前斯ういふ事があつた、戦時中私は海軍省から頼まれて飛行隊に結核患者が多いから解決して貰いたいと申し込んで来たので、先ず部下を霞ヶ浦の航空隊へ差遣した。そこで結核は感染しないと云つた處、之を聞いた軍医はカンカンに怒つてそんなものを軍へ入れたら今に軍全体に結核が蔓延すると言つて、忽ち御拂箱になつて了つた事がある。

私が斯ういふ説を唱えるのは絶対的確信があるからである。何よりも私の信者数万中に結核感染者など何年経つても一人も出ないといふ事実と、今一つは実験の為に以前私の家庭には結核患者の一人や二人は何時也不必ず宿泊させていた。其頃私の子供男女合わせて五・六才から二十才位迄六人居り、十数年続けてみたが一人も感染する處か今以て六人共に希に見る健康体で

ある。勿論其間結核患者と起居を共にし、消毒其他の方法も全然行わず普通人と同様に扱ったのである。今一つの例を挙げてみるが数年前之は四十才位の未亡人、夫の死後結核の為親戚知人も感染を恐れて寄せ付けないので、進退極まっているのを知った私は可愛想と思い、引取って今も私の家で働かせているが、勿論一人の感染者がなければかりか此頃は殆んど普通人と同様の健康体になつてよく働いている。尤も假に感染しても簡単に治るから、私の家庭にいる者は何等結核などに関心を持たないのである。

以上の如くであるから、吾々の方では結核は伝染しないものと安心しているので、此点だけでも一般人に比べて如何に幸福であるが判るであらう。處が世の中では此感染を恐れる為、到る處悲劇を生み常に戦々兢兢々としている。夫婦・親子・兄弟でも近寄つて話も出来ず食器も寝具も別扱いで除け者同様である。然し医学を信ずるとしたら、そうするより外致し方ないであらう。以前斯ういう面白い事があつた。某農村の事であるが或農家に十六・七才の娘がいた。彼女は結核と宣告されたので一軒の離れ家を作つて貰い一人ボッチで住んでいたが、其離れ家は往来に面している為、其前を通る村人等は口を覆つて駆足で通るといふ話を、私は本人から直接聞いて大笑いした事がある。成程空気伝染と曰われればそれも無理はないが実に悲喜劇である。だから私の部下や信者は数十万あるから其中の一万でも二万でも纏めて一度に試験してみたら面白いと思つのである。

右に就いて尚詳しく説明してみるが、先ず家庭内に結核患者がある場合、他の者は何時感染するか判らないといふ心配がコピリついて離れない。だから偶々風邪など引くと、さては愈々自分にもうつたんじゃないかと思つし、又常に風邪を引かない

ようにと用心をするが、運悪く一寸風邪でも引くと慌てて医者に走り薬に頼るといふ譯で精神的恐怖感に加えて、薬毒や浄化停止によつて結核を作る事になるという譯で、今以て伝染説が持続されているのである。今一つは靈的原因でもあるが、之は親子兄弟等の近親者や親しい友人男女關係者などある場合、右の死者の靈が憑依して其通りの症状を呈する事がある。之が恰度感染したように見えるのである。憑靈問題に就いては後に詳説するからそれを充分読めば良く判る筈である。又近來小学児童に集団結核が出たといつて屢々報ぜられるが、この場合教師を検診するや一人や二人の開放性結核患者が必ずいる。するとこの患者が感染の元であるといつて大騒ぎをするが、之なども実をいえば現在何処の学校の教師でも嚴密に検診すれば二人や三人の結核患者のない学校は先ずあるまい。それらをよく考え合はしてみる時、感染説といふものが如何に確実性の乏しい事を知るであらう。

自然を尊重せよ

医学は特に結核患者に対しては安静を最も重要とされているが、之は前にも述べた如く大変な間違ひである。ではどうするのが一番いいかといふと、何よりも自然である。自然とは自分の身体を拘束する事なく無理のないよう気儘にする事である。例えば熱があつて大儀な時は寝ろといふ命令を身体がすると思ひ寝ればいいのである。又寝たくない起きたいと思つのは起きていてもいいと命令されたと思ひ起きればいいのである。歩きたければ歩き駆出したければ駆出し、大きな声で唄いたければ唄い仕事をしたければするといふやうに、何でも心の命ずるまゝにするのが本當で

ある。気が向かない心に満たない事は止すことである。要するに何処までも自然である。之が結核に限らず如何なる病に対しても同じ事がいえる。

食物も同様で食べたい物を食べたい時に食べたいだけ食つ、之が最もいいのである。薬は勿論不可ないが、食物としても薬だからとか滋養になるとかいつて欲しくないものを我慢して食つたり、欲しいものを我慢して食わなかつたりするのも間違つてゐる。人体に必要なものは食べたい意欲が起ると共に食べたくない物は食べるなどと言つ譯である。そうして結核に特に悪いのは動物性蛋白質である。少しは差支えないが成可く野菜を多く攝る方がよい。處が今日の医学は栄養は魚鳥獸に多いとして奨めるが、之が大変な誤りで、一時は元気が出戻るように思うが続けると必ず衰弱を増す事になる。本来栄養とは植物性に多くある。考えてもみるがいい、動物性のもののみを食つていれば敗血症などが起つて必ず病気になる、生命に関わる事さえもある。それに反して菜食はいくらしても健康にこそなれ、病気には決して罹らなればかりか長壽者となるに見ても明かである。之に就いて私の体験を書いてみるが、私は若い頃結核で死の宣告を受けた時、それ迄動物性食餌を多量に攝つていたのを或動機で其非を覺り菜食にしてみた處、それからメキメキ恢復に向つたので医学の間違つてゐる事を知り、薬も癈めて了い三ヶ月間絶対菜食を続けた處、それで病気はスツカリ治り病氣以前よりも健康体となつたのである。其後他の病気はしたが結核のケの字もなくなり六十八才の今日に到るも豊饒として壯者を凌ぐものがある。もし其時それに気が付かなかつたら、無論彼世へ旅立つていたに違いないと今でも思つ度にゾツとするのである。

今一つは嗜血の場合である。之こそ菜食

が最もいい。以前斯ういふ患者があつた、肉食すると其翌日必ず嗜血するが菜食をするとすぐ止まるといふ、実にハッキリしていた。之でみても菜食のよい事は間違いないのである。

今一つは医師は疲労と睡眠不足を不可として戒めるが之も間違つてゐる。それは原理を知らないからで、疲労とは勿論運動の為で運動すれば足や腰を活動させるから其部にある毒素に淨化作用が起り微熱が発生する。微熱は疲労感を催す、それが疲れてである。併しそれだけ毒素が減るのだから結構な譯である。何よりも運動を旺んに行い常に疲労を繰返す人は健康であるに見ても判るであらう。だから草臥れた際足や腰の辺りを觸つてみれば必ず微熱があるに見て、それだけ毒の溶ける譯である。

又睡眠不足は結核には何等影響はない、寧ろいい位である。之は事実によつてみればよく判る。何よりも睡眠不足の階級を見るがいい、旅館の従業員や花柳界の人達には結核が最も少ないと医学でも言われている。

之に就いても説明してみるが睡眠不足だと起きてゐる時間が長くなるから活動の時間が多くなり、淨化が余計起るからそれだけ疲れる。處が逆解的医学である以上睡眠不足を不可とするのである。今一つ斯ういふ事でも判る。それは普通朝は熱が低い、午後三時か四時頃になると熱が出てくる。之も右の理と同様で假令寝ていても神経を使うから淨化が起るのである。

結核と特效薬

結核の薬位次々と出るものはあるまい。近年になつてセファランチン・ペニシリン・ストレプトマイシン等々、之等は今随分もてはやされている。恰度何かの流行の

ようである。此様にそれからそれへと新薬が出るという事は勿論前に出たものより効き目がよい、高いからであろうが曩に詳説した如く薬の効き目とは毒の効き目であるから毒が強い程よく効く譯で、浄化停止の力もそれだけ強いから症状が軽減するという譯で特效薬として売出されるのである。然し何れはその薬毒の浄化作用が起るから毒の強い程浄化も強く来るという次第で、結果は一の苦痛を免れようとする其方法が二つの苦痛の種を蒔くという事である。それが薬学の進歩と思うのであるから問題は実に大きいと言わねばならない。従つて有体に言えば医学の誤りが病苦を増し、薬剤業者を繁盛させ新聞屋に多額の広告料を奉納すると言つ譯で、それ以外の何物でもない事を知るのであろう。憐れむべきは現代文化民族である。私が此重大事を発見し得たという事は愈々時期到来、暗黒界に一條の光明が射し初めたのである。勿論地上天国出現の間近い事の示唆でなくて何であらう。

栄 養

私は前項までに薬剤の恐るべきものである事を詳説したから最早判つたであらうが、茲に見逃す事の出来ないのは栄養に関する一大誤謬である。先ず結核の項に動物性蛋白の不可である事を述べたが、之ばかりではない全般に涉つて甚しい錯誤に陥っているのが近代栄養学である。

其最も甚だしい点は栄養学は食物のみを対象としていて肝腎な人体の機能の方を閑却されている事である。例えばビタミンにしろ、ABCなどと種類まで分けて栄養の不足を補おうとしているが之こそ実に馬鹿々々しい話である。それは前述の如く体内機能が有している本然の性能を無

視しているからである。というのは其機能なるものを全然認めていないのである。即ち機能の働きとは人体を養うに足るだけのビタミンでも含水炭素でも蛋白でもアミノ酸でもグリコーゲンでも脂肪でも如何なる栄養でも、其活動によつて充分生産されるのである。勿論全然ビタミンのない食物からでも栄養機能という魔法使用の活力によつて必要なだけは必ず造り出されるのである。

此理によつて人体は栄養を攝る程衰弱するといふ逆結果となる。即ちビタミンを攝る程ビタミンは不足する事になる。之は不思議でも何でも無い、それは栄養を体内に入れる程栄養生産機能は活動の余地がなくなるから自然退化する。之は言う迄もなく栄養の大部分は完成したものであつて、特に消化機能の活動こそ生活力の主体であると言つてもいい。言わば生活力即機能の活動である。

此理によつて未完成な食物を完成にすべき機能の労作過程こそ生活力の発生源である。何よりも空腹になると弱るといふのは食物を処理すべき労作が終わつたからであり、早速食物を攝るや身体が確かりするのにみて明らかである。而も人体凡ての機能は相互関係にある以上根本の消化機能が弱れば他の機能も弱るのは当然である。

そうして人間に運動が健康上必要である事は言つ迄もないが、それは外部的に新陳代謝を旺盛にするのが主で内部的には好影響はあるが、それは補助的である。どうしても消化機能自体の活動を強化する事こそ、健康増進の根本条件である。故に消化のいい物ほど機能が弱るから普通一般の食物が恰度いいのである。處が医学は消化の良いものを可とするが、之は如何に間違つているかが分かるであらう。而も其上よく囓む事を奨励するが之も右と同様

胃を弱らせるから勿論不可である。此例として彼の胃下垂であるが、之は胃が弛緩する病気で全く人間が造つたものである。というのは消化のいい物をよく噛んで食い消化薬を常用するとすれば胃は益々弱り弛緩するに決っている。何と愚かな話ではないか。之に就いて私の経験を書いてみるが、今から三十数年前アメリカで当時流行したフレッチャーズム喫食法というのがあつた。之は出来るだけよく噛めという健康法で私は実行してみた處、初めは一寸よかつたが約一ヶ月位続けると段々弱り力がなくなつて来たので、之は不可んと普通の食べ方に還元した處元通りに快復したのである。

以上によつても判る如く、栄養学は殆んど逆であるから健康に好い筈がないのである。又他の例として斯ういう事もあつた。乳の足りない母親に向かつて牛乳を奨めるが之も可笑しな話である。人間は子を産めば育つだけの乳は必ず出るに決っている。足りないという事は何処かに間違つた点があるからで、其点を発見し是正すればいいのである。處が医学ではそれに気が付かないか、気が付いてもどうする事も出来ないのか右のようにする。之では呑んだ牛乳は口から乳首まで筒抜けになるように思つているとしか思えない。実に馬鹿々々しいにも程がある。従つて牛乳を呑むと反つて乳の出が悪くなる。何となれば外部から乳を供給する以上乳生産の機能は退化するからである。そればかりではない、病人が栄養として動物の生血を呑む事があるが、之も呆れたものである。成程一時は多少の効果はあるかも知れないが、実は体内の血液生産機能を弱らせ却つて貧血する事になる。考えても見るがいい、人間は白い米やパンを食ひ青い菜や黄色い豆を食つて赤い血が出来るのである。もしたら何と素晴らしい生産技術者ではな

らうか。血液の一耗だも無い物を食つても血液が出来るとしたら、血液を呑んだら一体どういふ事になるうか。言つ迄もなく逆に血液は出来ない事になるう。そこに気が付かない栄養学の蒙昧は何と評していい言葉はあるまい。彼の牛という獣でさえ藁を食つて結構な牛乳が出来るではないか。況んや人間に於いてをやである。之等によつても栄養学の誤謬發生の原因は全く自然を無視し、学理のみに偏した處に原因があるのである。

そうして人間になくはならない栄養は植物に多く含まれている。何よりも菜食者は例外なく健康で長生きである。彼の粗食主義の禅僧などには長壽者が最も多い事実や、先頃九十四才で物故した英国のバーナードショウ翁の如きは有名な菜食主義者であつた。

以前斯ういふ事があつた。或時私は東北線の汽車に乗つた處、隣にいた五十才位の顔色のいい健康そうな田舎紳士風の人がいた。彼は時々洋服のポケットから青松葉を出して美味そうにムシャムシャ食つている。

私は変だと思つて訊ねた處、彼は誇らし気に自分は十数年前から青松葉を常食にしていて外には何も食わない。以前は弱かつたが松葉がいい事を知り、それを食ひ始めた處最初は随分不味かつたが段々美味しくなるにつれて素晴らしい健康となつたと言ひ、此通りだと釦を外して腕を捲つて見せた事があつた。又最近の新聞に茶殻ばかり食つて健康である一青年の事が出ていた。之は本人の直話であるから間違ひはない。以前私は日本アルプスの槍ヶ岳へ登山した折の事、案内人の弁当を見て驚いた。それは飯ばかりで菜がない、訊いてみると非常に美味いという。私が罐詰めをやるうとしたら彼は断つてどうしても受けなかつた。それでいて十貫以上の荷物を背負つ

ては十里位の山道を毎日登り下りするの
であるから驚くべきである。之は古い話だ
が彼の幕末の有名な儒者、新井白石は豆腐
屋の二階に厄介になり二年間豆腐殻ばか
り食って勉強したという事が或本に出て

いた。又私は曩に述べた如く結核を治すべ
く三ヶ月間絶対菜食で、鯉節さえ使わず薬
も廢めて了った處それで完全に治ったの
である。此様な譯で私は九十才過ぎたら大
いに若返り法を行おうと思つてゐる。それ
はどうするのかというとな菜食を主とした
出来るだけの粗食にする事である。粗食は
何故いいかというとな養が乏しい為消化
機能は栄養を造るべく大いに活動しなけ
ればならないから、それが為消化機能は活
潑となり、若返る譯である。とすれば健康
で長生きするのは当然であろう。又満州の
苦力(クーリー)の健康は世界一とされて
西洋の学者で研究してゐる人もあると聞
いてゐる。處が苦力の食物と来たら大変だ、
何しろ大型な高粱パンを一食に一個一日
三個といつのであるから、栄養学から見
たら何と言つてあるうか。之等の例によつて
も判る如く、今日の栄養学で唱える色々混
ぜるのをよいとするのは大いに間違つて
おり、出来るだけ単食がいいのである。何
故なれば栄養生産機能の活動は同一の物
を持続すればする程其力が強化されるか
らで、恰度人間が一つ仕事をすれば熟練す
ると同様の理である。それから誰しも意
外に思ふ事がある。それは菜食をすると実
に温かい。成程肉食は一時は暖かいが或時
間を過ぎると反つて寒くなるものである。
之で判つた事だが欧米にストーブが發達
したのは全く肉食の為寒気に耐えないか
らである。之に反し日本人は肉食でない
為寒気に絶え易かつたので住居等も餘り
防寒に意を用いていなかったのである。又
服装にしても足輕や下郎が寒中でも毛脛
を出して平氣でいたり、女でも晒の腰巻

一・二枚位で足袋もあまり履かなかつたよ
うだ。それに引き換え今の女のように毛糸
の腰巻き何枚も重ねて尚冷えると言つよ
うな事など考え合わすと成程と思われ
るのである。

今一つ茲に注意しなければならぬ重
要事は近來農村人に栄養が足りないとし
て、魚鳥獣肉を奨励してゐるが、之も間違
つてゐる。といつのは前述の如く菜食によ
る栄養は根本的に耐久力が増すから労働
の場合持続性があつて疲れない。だから昔
から日本の農民は男女共朝早くから暗く
なる迄労働する。もし農民が動物性のもの
を多く食つたら労働は減殺されるのであ
る。何よりも米国の農業は機械化が發達し
たといつのは、体力が続かないから頭脳で
補おうとしたのが原因であろう。故に日本
の農民も動物性食糧を多く攝るとすれば
機械力が伴わなければならない理窟で、此
点深く考究の要がある。

右によつてみても判る如く、身体のみを
養つとしたら菜食に限るがそもゆかな
い事情がある。

といつのは成程農村人ならそれでいいが
都会人は肉体よりも頭脳労働の方が勝つ
てゐるから、それに相応する栄養が必要と
なる。即ち日本人としては魚鳥を第一とし
獣肉を第二にする事である。其譯は日本は
周困海というにみてもそれが自然である。
元來魚鳥肉は頭脳の栄養をよくし、元氣と
智慧が出る効果がある。又獣肉は競争意欲
を旺んにし、果ては闘争意識に迄發展する
のは白人文明がよく物語つてゐる。白色民
族が競争意識の為今日の如く文化の發達
を見たが、闘争意識の為戦争が絶えないに
見て文明国と言われ乍ら、東洋とは比較に
ならない程戦争が多いにみても明かであ
る。

以上長々と述べて来たが要約すれば斯
ういふ事になる。人間は食物に関しては栄

養等を余り考えないで、只食いたい物を食うという自然がいいのである。其場合植物性と動物性を都会人は半々位がよく、農村人と病人は植物性七・八割動物性二・三割が最も適している。食餌を右のようにし薬を服まないとしたら人間は決して病氣などに罹る筈はないのである。故に衛生や健康法が実際と喰違つて以上、反つて余計な手数をかけて悪い結果を生んでいるのであるから、哀れなるものよ汝の名は文人と曰いたい位である。

今一つ栄養学中最も間違つている一事は彼の栄養注射である。元來人間の口から食物を嚥下、それぞれの消化器能によつて栄養素が作られるよう

に出来ているのに、これをどう間違えたものか皮膚から注射によつて体内へ入れようとすると。恐らく之程馬鹿々々しい話はあるまい。何となれば其様な間違つた事をすると消化器能は不要物となるから退化するに決まつている。即ち栄養吸収機能が転移する事になるからである。先ず一・二回位なら大した影響はないが、之を続けるに於ては非常な悪影響を及ぼすのは事実がよく證明している。

人間と病氣

近代医学に於ては病原の殆んどは細菌とされている。従つて細菌の伝染さえ防げば病に罹らないとする建前になつてゐるが、只それだけでは甚だ浅薄であつて、どうしても細菌というものの実体が明確に判らなければならぬのである。というのは假令黴菌と雖も何等かの理由によつて何処からか発生されたものである以上、其根本迄突止め把握しなければ意味をなさない譯である。としたら現在程度の学問ではそれが不可能であるから、眞の医学の成

立などは思いもよらないのである。いくら微小な細菌と雖も突如として偶然に発生したものでは勿論ない。此原理は後に詳しく書くが、其黴菌が病原となりその感染によつて人間が苦しむとしたら、一体黴菌なるものは何が為に何の必要あつて此世界に存在するものであるかを考つべきである。何となれば森羅万象一切は悉く人間に必要なもののみであつて不必要なものは一つもないから、若し不必要となれば自然淘汰されて了うのは歴史に見ても明かである。只其時代に必要である間生存しているだけに過ぎない事なので、人類学上からみても幾多の実例のある事で、彼の古代に於けるマンモスや恐竜や名も知れぬ怪獣等の存在していた事もよくそれを物語つてゐる。としたら黴菌と雖も実在する限り何等かの役目を有つてゐるに違いないが、何等かの役目を有つてゐるに違いないが、今日迄の学問では其處が判らなかつた為、無闇に恐れていたのである。右によつてみる時、造物主即ち神が人間を苦しめ其生命迄も脅かすような病原菌を作つたという譯は、実は重大な意味が含まれてるのであるに拘わらず、今迄の人間は此点に何等疑問を起さず全然無関心に過して来た處に問題がある。それというのも学問が其處迄進歩していなかつたからで、此意味からいつても私は此著によつて現代文化人に自覚を与え頭腦を高く引き上げなければならぬと思つのである。

茲で今一つの重要事を書かねばならぬが、抑々主神は何故宇宙及び人間を作られたかという事であつて、恐らく之以上重要な根本的問題はあるまいと共に、此事程誰も知りたいと希つ事柄も又あるまい。而も現在に到る迄之に就いて何人も異論なく首肯すべき程の説明を与えた物はなかつたのであるから、それを茲に説いてみるが、本来主神の御目的とは何であるかといつと、それは人間世界をして眞善美完き

理想世界を造り之を無限に向上發達せしめるにあるので、之こそ永遠不滅の眞理である。従つて今日迄の人類では到底想像すら出来得ない程の輝かしい未来を有っているのである。としたら人間は此前途の光明を胸に抱きつつ楽しんで天職使命に盡すべきである。そういう譯で主神の御目的を遂行すべき役目として造られたのが人間である以上、人間は右の使命を眞底から自覚すると共に、生命のあらん限り其線から離れる事なく働くべきである。それには何と云つても先ず健康が第一であるべきに拘わらず現実は果たしてどうであろうか。誰も知る如く人間は実に病に犯され易く健康を損なう場合が余りに多い事実である。それが為神は不断に健康を保持されるべく人体に対し健康擁護の自然作用を与えられているのである。

では其作用とは一体何であるかと言うと、之が意外にも病氣と曰うものであるから何人も驚くであろう。それに就いて充分説明してみるのが先ず人間が人間としての役目を果たさんとする場合どうしても全身に汚穢が溜る。之に就いても後に詳しく説くが、兎も角汚穢とは靈にあつては曇りであり肉体にあつては濁血である。處が人体に汚穢が溜り或限度を越えるや人間活動に支障を及ぼす事になるので、之が除かれるべく前述の如く自然作用即浄化作用が起るのである。處が此浄化作用の過程が苦痛となる為、この苦痛を病氣として悪い意味に解釈したのが現在迄の考え方であった。そこで人間一度病氣に犯されるや健康を損ねるものと逆に考えるから、生命の危険をも予想し憂慮するのである。その為曩に説いた如く其苦痛を消滅或は軽減させようとして種々の工夫を凝らして出来たものが、現在の如き医療であるから如何に誤つていたかが判るのである。以上によつて考えても分る如く病氣なるものは実

に人間の健康を保持せんが為の神の最大なる恩恵である事が分るのである。

従つて此眞理を基本として構成された医学こそ眞の医学と言つべきである。

無機質界

茲で、愈々細菌發生の原理と其順序を書いてみるが、抑々細菌という有機物は現在最も進歩した原子顕微鏡でも六万倍位迄しか見えないとされており、之が現在迄の限度ではあるが、無論極点ではない。いずれの日か顕微鏡の發達は超微生物迄をも捕捉出来るようになる事は予想されるが、先ず現在の程度から推してもずつと先のことと見ねばなるまい。

そうして科学の現在であるが、唯物的に見れば最早その極点に迄達しており、次の世界である處の無機質界の一步手前迄来ていて大きな壁に突き当たっているという状態にあるという事だ。従つて其壁を突き破つて了えばいいのであるが、実はそれが容易ではない處か假令壁を突き破り得ても其先が問題である。というのは其先こそ唯物科学では到底捕捉する事の出来ない、言わば無に等しい世界であるからである。それに就いては彼の湯川博士の中間子論であるが、勿論同博士は理論物理学専攻の学者であるから最初理論によつて中間子の存在を發表した處、偶々他の学者が宇宙線を写真に撮影しようとした際、中間子である幾つかの素粒子が乾板に印映されたので、茲に博士の理論は実験的に確認された譯である。つまり実験物理学によつて裏付けされたのでノーベル賞獲得となつたので、之は普く知られている通りである。處が私の唱える説も理論神靈学であると共に、この応用によつて素晴らしい治病の効果を挙げているのであるから、実験神靈

学としての立派な裏付けも完成しているのである。としたら科学的に言っても如何に大なる発見であるかが分るのである。

之を一層判り易く言えば唯物科学の到達し得た處の極致点が現在の原子科学であるとしたら、其次ぎの存在である處の世界、即ち私の唱える無機質界が明かにされたのであるから、科学上から言っても実に画期的一大進歩と言えよう。そうして此世界こそ曩に述べた如く科学と神靈との繋りの存在であつて、今茲に説く處の此文はつまり科学界と神靈界との中間にある空白を充填した譯である。実に此空白こそ今日迄科学者も哲学者も宗教家も知らんとして知り得なかつた處の神秘的謎の世界であつたのである。勿論以前から知識人の誰もが心の奥深く内在していた處の眞理探求のそのものが、愈々茲に暴かれたのであつて長い間の理想の夢が実現されたのである。然し文化の進歩は何時の日かは此神秘境に迄到達されなければならぬ事は誰も予想していたに違いないが、多くの人達は無論科学の進歩によるとしか想つていながつた事も肯けるが、意外にも其予想は裏切られ私という宗教家によつて発見されたのである。けれども單に捉えただけでは何等の意味もなさないが、要はそれを活用し普く人類の福祉に役立たせてこそ初めて大なる意義を生ずるのであるが、此事も期待に外れず病患の九パーセント以上は完全に治癒されると共に人間壽令の延長までも可能となつたのである。

以上の如く此大発見によつて人類に与える恩恵は到底言葉や文字で表す事は出来得まい。従つて此事が世界人類に普く知れ渡つた暁、現代文明は一大転換を巻き起し人類史上空前の一新紀元画する事となる。茲に致つては最早科学も宗教もない。否科学でもあり、宗教でもあり、未だ人類の経験にも想像にも無かつた處の眞の文

明時代出現となるのである。事は断言して憚らないのである。

偕て愈々無機質界と物質界との関係に移るとしよう。

靈主体従

前項に説いた如き、無機質界と人間の病氣との関係であるが無機質界とは吾々の唱える靈界であつて、此靈界と人間との関係はどういう事になつてゐるかといつて、抑々人間とは体と靈との二原素の密接合致によつて成立つてゐるものであつて、勿論体とは眼に見ゆる物質で誰にも判るが、靈とは眼に映らないものである以上長い間分らなかつたのである。處が確實に存在してゐる一種のエーテルの如きものである。としたら方法によつては把握出来ない筈はないのである。といつのは人間の肉体が空气中にあると同様の意味で人間の靈と雖も靈界にあるからである。靈界とは曩にも書いた如く、空氣とは比較にならない程の稀薄な透明体であつて今日迄無とされてゐたのも無理はなかつたのである。然し此世界こそ無處ではなく寧ろ万有の本源であつて絶対無限の力を蔵してゐるもので、一切は此力によつて生成し化育されてゐるのである。そうして靈界の本質は太陽の精と月の精と土の精との融合一致想像を絶する程の靈妙不可思議な世界である。處が茲で問題であるのは、人間が各々其役目を果たす上には肉体に垢が溜る如く靈には曇りが溜積するのである。従つて之に対し自然浄化作用なるものが発生し浄められる。之も恰度人体に溜つた垢が入浴によつて清められるようなものである。處が右は独り人間ばかりではなく天地間一切の物がそうである。例えば此地上靈界に汚穢が溜るや自然作用によつて一定の

個所に集中され、低気圧という浄化活動が發つて清掃される。暴風も出水も洪水も又雷火も人的火災もそれであると同樣人間にも浄化作用が發生する。今其理由を詳しく書いてみよう。

右の如く人靈に溜つた汚穢は一種の曇りであつて、この曇りとは本来透明体であるべき人靈に不透明体の部分が出来るそれであり、然し乍ら此曇りの原因には二種類ある。一は靈自身に發生するものと、二は逆に体から靈に移写されるものである。先ず前者から説いてみるが元來人靈の内容は經に言えば求心的三段階に、緯に言えば求心的三重層になつてゐる。つまりの形と思えばいい。勿論丸の中心が魂であつて、魂とは人間が此世に生れる場合、自然法則によつて男性から女性の腹へ宿らせる。本來魂なるものは極微のポチであつて、勿論各々の個性を有つており生命のある限り、人間に対し絶対支配權を有つてゐる事は誰でも知つてゐる通りであるが、其魂を擁護的に包んでゐるものが心であり心を包んでいるものが靈であつて、靈は全身的に充実してゐるから、人体と同様の形である。此様に人靈体は一致してゐる以上、魂の如何は其儘心を通じて靈へ反映すると共に靈のそれも心を通じて魂に反映するのである。斯くの如く魂と心と靈とは大中小・小中大の相互關係で言わば三位一体である。處が如何なる人間と雖も生きてゐる間、善も行えば悪も行つのでその際善よりも悪が多ければ多いだけ罪穢となつて魂を曇らすので、其曇りが心を曇らせ次第で靈を曇らすのである。そうして曇りが溜つて一定量を越ゆるや自然に浄化作用が發生し曇りの溶解排除が行われる。然しそうなる迄の課程として曇りは漸次一個所又は數個所に分散し濃度化と共に容積も縮小され固結される。面白い事には其罪によつて固結場所が異つ。例えば目の罪は目に、

頭の罪は頭に胸の罪は胸にとつように相應するものである。次に後者を解いてみるが、之は前者と反対で体から靈に映るのであるが、其場合最初血液の方に濁りが生ずる。即ち濁血である。すると靈にも其通りに映つて曇りとなるが、之も前者と同様局所的に分散濃度化するのである。元來人体なるものは靈の物質化したものが血液であり反対に血液の靈化が靈であるから、つまり靈と体は同様といつてもよいが、只靈体の法則上靈の方が主になつており、体の方が従となつてゐるのである。處が何れにせよ右の原因によつてその固結が浄化作用によつて溶解され、液体となつて身体各所から排除されようとする。其為の苦痛が病氣なのである。

右に述べた如く体に發生する濁血とは何であるかといつに、之こそ実に意外千万にも医療の王座を占めてゐる處の彼の薬剤であるのである。といつのは本來薬といふものは此世の中には一つもない。現在薬とされているものは悉く毒であつて、其毒も体内にいれるとしたら、それによつて濁血が作られるのは当然である。何よりも事實がよく證明してゐる。それは病氣が医療を受け乍ら長引いたり悪化したり、余病が發るといふことは薬毒によつて病氣が作られるからである。

従つて薬毒で出来た濁血が靈へ映つて曇りとなり、之が病原となつたら、現代医学の治療方法自体が病氣を作る意味でしかないことになつた。

右の如く万有の法則は靈が主で体が従であるとしたら病氣は靈の曇りさえ解消すれば濁血は浄血と化し全治するのは言う迄もない。それで我治療法は此原理の応用であるから浄靈と曰つて靈を浄める事を目的とするものである以上、病氣は根本的に治る譯である。處が医学に於ては靈を無視し体のみを対象として進歩して来た

のであるから、結局一時的治病法でしかない譯である。事實医療が根治的でない事は偶々手術などによつて全治したに見えるが、成程元の病氣は発らないとしても他の病氣が起るか又は再発するのは必ずと言いたい程である。

例えば盲腸炎の如きも患部を剔出するので盲腸炎は起り得ないが、盲腸に近接している腹膜炎や腎臓病が起り易くなる。之は全く靈の方の曇りは依然として残っているからで、而も薬毒も加わる為濁血は増えて新たな曇りと合併し位置を変えて病原となるのである。そつして濁血の変化であるが、濁血が不断の浄化によつて一層濃度化するや血粒に変化が起り漸次白色化する。之が膿である。よく血膿と言つて膿と血液が混合しているのは、之は変化の中途であつて尚進むと全部膿化する。よく結核患者の喀痰が血液の混じつてゐるものと、そつでないものがあるのは右による。又医学に於ける赤血球に対する白血球の食菌作用というのもそれである。

薬毒の害

前項に説いた如く人間の罪が魂の穢れとなり、それが心を介して靈の曇りとなり、その浄化が病氣であるとしたら其曇りを解消する以外病を治す方法のあり得ない事は余りにも明かである。處が西洋に於てはヒポクラテス・東洋に於ては彼の神農が病人に薬劑又は薬草を服ますと、一時的苦痛が緩和されるので、之を可として医術の始祖となつたのであるから、此時から既に誤謬は発生した譯である。成程薬を用いれば一時的苦痛が減るので、之こそ病を治すべき方法と單純に考えたもので、其時代の人智の程度としては無理もなかつたのである。それが現在まで続けて来たのであ

るから、今迄の人間の迷蒙さは不思議としか思えないのである。

處が私が生れた事によつて此人類の不幸の源泉たる病氣が解決される事となつたので、全く有難い時代が来た譯である。従つて之によつて文明は百八十度の転換となり理想世界実現となるのは勿論である。

右の如く人類は古い時代から薬劑を体内に入れつつ今日に到つたのであるから、現代人悉くは薬劑中毒に罹っている。曩にも述べた如く薬劑なるものは有毒物である以上体内に残存して病原となるに拘わらず、医学は薬毒は自然消滅するように思つてゐるが之が大変な誤りで、実は薬毒は生命の在らん限り消滅しないのである。之に就いて私の体験を書いてみよう。私は今から三十六年以前入歯をする為歯を抜き、其穴へ消毒薬を詰めた處歯痛を起し始めたので、それを治すべく又薬を用いた處漸次痛みは増すばかりなので、次から次へ有名な歯科医に罹つたが、どうしても治らず遂に二進も三進もゆかなくなつて了つた。何しろそれまでに四本の歯を抜いた位であるから如何に酷かつたかが判るであろう。それでも治らず而も薬毒は頭脳までも犯して来たので、私は結局発狂か自殺かの運命にまで押詰められて了つたのである。然るに天未だ吾を捨てざるか、或動機によつて薬の為である事が判り、それから歯科医を癈めた處漸次治つて今日に到つたのであるが、驚いた事には今以て少しではあるが痛みが残つており毎日のように自分で浄霊している。之によつても薬毒は数十年掛かつても消滅しない事がよく判るのである。右によつても判る如く薬劑は決して消えない事である。

ではどういふ譯かといふと本来造物主は人間を造ると共に人間が生きてゆけるだけの食料や其他一切の物を造られてお

り、其為に土壤や海川に其力を附与され植物・鉱物などは元より、空氣・日月星辰悉くがそつである。そつして單に食物といつても一定の条件がある。条件というのは食すべきものと、食うべからざるものとが別けられてある。従つて其必要から人間には味覺を与え食物には味を含ませてある。又食物の種類も色々あり悉く人間の健康や環境に適合するよう造られている。例えば塩分が必要な時には塩辛い物が食いたくなり、甘味が必要な時は甘味が食べたくなり、水分が必要な場合は咽喉が渴ぐといつたように、自然は必要によつて意慾が起るよう造られている。それと共に消化機能も一定の條件に適うよう出来ている。即ち食うべき物は悉く消化されるが、食うべからざる物は処理されないで残存する。此理によつて薬剤は異物であるから消化処理されないで、之が古くなると毒素に変化してつう。その毒素の排除作用が病氣であるから、病原は取りも直さず薬剤という事になる。喀痰・鼻汁・汗・膿・毒血等は悉く薬毒の変化したものであるから世に薬剤程恐るべき物はないのである。

之を知らなかつた人類は病氣を治そうとして病氣を作つて来た譯である。何と重大誤謬を犯して来た事に氣がつくであらう。實に之程愚かな話はあるまい。としたら此一事だけを人類に知らせるとしたら如何に大なる救いであるかは今更贅言を要しないであらう。何よりも此私の説を信じて専門家諸君は病氣と対照してみるがいい、一点の誤りない事を知るのであらう。右によつてみても判る如く長い間人類は病氣に対する誤つた解釈が因となり、病氣の解決處か逆に病氣を作り病氣の種類も増やしつう今日に到つたのであり、然も此誤謬が貧乏も戦争の原因ともなつていたのであるから、何よりも此蒙を啓かなければ眞の文明は生れる筈はないのである。

従つて現在の人間は薬毒のない原始時代の人間に比べれば其健康の劣弱さは比較にならない程で、無薬時代の人間の壽命が百才以上が普通であつた事等種々の記録や文献などに見ても余りに明かである。私は彼の武内宿弥の壽令三百六才という有名な話は本当とは思つてはいなかつたが、先年武内家の家系を見た處、之は確實である事が判つた。武内家の祖先の中長壽者は三百四十九才で次は三百二十何才次は三百十何才、武内宿弥は確か四番目であつたと記憶している。この時代は今から二千年以前から千六・七百年前位にかけてであるから、まだ漢薬の渡来以前であつた事は間違いない。又神武天皇から千数百年迄は天皇の壽令は殆んど百才以上であつた事は記録に明かである。

近來米國及び日本人の壽令が些か延びたといつて喜んでゐるが此原因は医学の進歩の為ではなく他に原因があり、之は後に書く事にするが要するに一切の病原は薬毒である事が判ればいいのである。病氣の為の痛み・痒み・発熱・不快感等凡ての苦痛は悉く薬毒が原因である事は、私の多数の経験によるも絶対誤りはない。勿論遺伝微毒も癩病も天然痘・麻疹・百日咳等の先天的保有毒素も悉く薬毒である。何よりも現代人が全然無病の人は恐らく十人に一人もないであらう。どの人を見ても何かしらの病氣を持っている。数人の家族で病人のない家は珍しいとされており、一人や二人は一年の内に入院する者のない家庭は殆んどあるまいと共に、一年中一滴の薬を服まない人も希であらう。此様に現代人は弱体となつてゐるから病氣を恐れる事も甚だしく、此為に要する費用不安努力の為に及ぼす影響等も蓋し甚大なるものがある。

從而此世界から薬剤悉くを海に投げ捨てたとしたら其時を期とし病氣は漸減し、

何十年後には病なき世界の實現は断言し得るのである。

次に之から主なる病気に就いて解説してみるが人体の基本的機能としては何と云つても心臓・肺臓・胃の腑の三つであるから、之から先に書いてみよう。

心 臓

人体の機能中最も重要であるのは心臓であつて機能中の王者と言つべきものである。従つて心臓機能の本体が根本的に判らない限り眞の病理は確立する筈はないのである。医学に於ても他の臓器は手術が出来ても心臓は出来ないに見ても肯れるのである。處が此様に肝腎な心臓機能が医学では適確に判つていない事である。只僅かに肺臓から酸素が送られ浄血作用を行う機関位にしか思つていないようで、殆んど取るに足らない考え方である。では心臓機能の眞の働きとは何であるかを詳しく書いてみよう。

抑々此機能は靈界と最も密接な關係のある点である。というのは左の如き事を前以て知らねばならない。というのは地球の構成原素である。それは曩に説いた如く三段階になつてゐる。即ち一、靈界・二、空氣界・三、現象界であつて、之を一言にして言えば一は火素が本質であり、二は水素が本質であり、三は土素が本質である。勿論一は日の精、二は月の精、三は土の精であつて此三原素の力によつて一切は生成化育されている以上、人間と雖も其三原素の力によつて生命を保持されているのは勿論である。

そこで三原素を吸収すべき主要機能としては心臓・肺臓・胃の附である。即ち心臓は靈界から火素を吸収し、肺臓は空氣界から水素を吸収し、胃の附は物質界から土

素を吸収するのである。だから此理を基本として人体の構成を見ればよく判る。然るに今迄は肺臓は空氣を吸い胃は食物を吸収する事だけしか判つていなかった。従つて心臓が火素を吸収するなどは全然判つていなかったのである。では何故そうであつたかと言つとそれには理由がある。即ち空氣も食物も科学で測定が出来るからであるが、ひとり心臓機能のみはそれが不可能であつた。というのは靈界は無とされていた以上機械的には把握不可能であつたからで、之も無理はないのである。早く言えは三原素の中の二原素だけ判つたが一原素だけが判らなかつた譯である。處がこの一原素こそ実は二原素以上重要なものであつてみれば、之が判らない以上完全な医学は生れない譯である。故に今迄の学理は言わば不具的であつた事は言つ迄もない。以上の如く最重要な火素を吸収すべき機関が心臓であつて、水素を吸収するのが肺で土素を吸収するのが胃であつて、それによつて人間は生きてゐるのである。

處が病氣であるが、病氣とは再三説いた如く毒素の排泄作用であるから、固結毒素を溶解する場合熱が必要となる。其熱を心臓が吸収する役目であるから平常よりも余分に熱を要するので、心臓はそれだけ活動を旺んにしなければならぬ。発熱の際鼓動が頻繁なのはそれが為であつて、實際の悪寒は体温を心臓に補給する為不足となるからで、又呼吸頻繁なのは心臓の活動を助ける為肺臓は水分を余分に供給しなければならぬが、それには熱は水分を加える程力を増すからである。又発熱の際食欲不振なのは消化に要する熱量を心臓へ奪われるからである。此様にして毒結の溶解が終れば熱の必要はなくなるから下熱するのである。

茲で肺臓の解説をするのが順序であるが、之は最初に十分に書いたから略して胃に移る事にしたのである。病氣の原因が殆んど薬毒である事は今迄説いた通りであるが、特に胃に關した病氣程それが顯著であつて、悉く薬で作られるといつてもいいのである。それを今詳しく書いてみるが、

血を吐くようになる。サアー大變と医師に診て貰うと之は立派な胃潰瘍で充分養生しないと取り返しのつかない事になりますよ、先ず固形物を食べないで絶対流動食にして安静にする事等々、萬事重症患者扱いにされて了う。

誰しも食べすぎとか食靠れとか胸焼けがする事がよくある。すると放つておけば治るものを何でも薬さえ服めばいいと思ひ、早速胃の薬を服んで了う。然し一時はよくなるからそれで最早済んだと思つていつと何ぞ知らん、此一服の薬が将来命取りの因となる事さえあるのだから問題である。つまり一服の薬が病の種を時く譯である。というのは暫く経つと再び胃の具合が必ず悪くなるもので、そこで又薬を服むという具合にいつしかそれが癖になつて了う。此点麻薬中毒と同様であつて終いには薬がなくてはおられない事になるが、斯うなるともつ駄目だ、立派な胃薬中毒患者である。そこで医者に診て貰つとまず胃弱・消化不良・胃加答兒・胃酸過多症等と診断され、斯ういふ物を食つてはいけないとか此薬を服まなければいけない。斯ういふ養生をなさいななどと言われるので、其通り実行するが、一時は一寸良いようでも決して治りはしないばかりか、寧ろ悪化の傾向さえ進る事になる。痛み・嘔氣・胸焼・食慾減退など種々の症状が次々発るので、仕方がないから薬を服むと一時良くなるので薬で治るものと思ひ込み益々薬が離せなくなる。處が初め効いた薬が段々効かなくなるもので、それからそれへと種々な薬を変えるが、変えた時だけは一寸良いのでそれに頼つていると又駄目になつて了うといふ譯で、言わば胃薬中毒患者になるのである。そんな事をしてい内、遂々口から

右は最初からのありふれた経路を書いたのであるが、実は斯ういふ人は今日尠くないのである。そこで初めからの事をよく考えてみると初め胃の具合が悪かつた時、放つておけば直に治つて了つたものを何しる医学迷信に陥つていいる現代人は薬を服まないと治らない、放つておくと段々悪くなるかと心配し、一刻も早く医師に罹つたり売薬などを用いたりする。そんな譯で全く薬によつて重症胃病を作り上げて了う譯である。何と恐るべくして又愚かな話ではないか。處がそれは斯うである。大体胃の薬といふものは勿論消化促進剤であり消化剤は必ず重曹が土台となつていいる。衆知の如く重曹は物を柔らかくする力があるので煮物などによく使われるが、其理窟で常住消化薬を服むとすると食物ばかりではない胃壁をも段々柔らかくして了う。そうなつた時偶々固形物などを食つとブヨブヨになつた胃壁の粘膜に触れるから疵がつく、其疵から血液が流れるのである。吐血の際鮮血色は新しい血で、破れた局所が大きい程多量に流出するのである。處が人により珈琲色の液体それに黒い粒が見える事もあるが、之は古くなつて変色した血で粒とは血の固りである。又よく大便に黒い血の固りが交る事があるが、之は古い血で疵口から出た血液が胃底に溜り固つたものが溶けて出たものである。然し此珈琲色の古血を吐く場合非常に量の多いもので、一度に一升から二升位毎日のように吐く患者さえあるが、斯うなつても吾々の方では割合治りいいものとしていいる。然し此病氣は医学の方では仲々治り難いと

されているが、全く原因が薬であつてみればお医者としたら具合が悪いに違いない。何しろ薬を癩めなければ治らない病氣であるからで、従つて此の病氣は薬を癩めて氣長にすれば必ずと言いたい程治るもので、其方法は最初血液を少しでも見る内は流動食にし、見えなくなるに従い漸次普通食にすればいいのである。次に他の胃に關した病を書いてみよう。

最も多くあるのは胃アトニー（胃酸過多症）という症状で、之は文字通り酸の多い病であるが、酸とは勿論薬の変化した物であるから薬を癩めれば順調に治るのである。次は胃痛で此酷いのが胃痙攣である。之は激しい痛みで堪えられない程である。

医療はモヒ剤を用いるが、之は一時的麻痺によつて苦痛を抑えるだけであるから、日ならずして又発るといふ譯で癖になり易いもので此の病の原因も勿論薬毒であるが、其経路を書いてみよう。先ず薬を飲むと一旦胃に入るや曩に述べた如く薬は処理されないで胃に停滞する。人間は仰臥するから薬は胃を透過して下降し背部に固まる。それが浄化によつて溶け胃に還元するが、其時は最早毒素に変化しているから胃はそれを外部へ排泄しようとする。其刺戟が激痛であるから胃痙攣の起つた場合何にもしないで一度我慢して痛いのを通り越して了えば、下痢となつて毒素は出て了うので根本的に治るが、毒素が出切る迄には何回も発るが之は致し方ない。然し其次發つた時は必ず前より軽く済み、次は又軽くなり遂に全治するのである。

次に胃癌であるが、之には疑似と眞症とあるが實際上疑似の方がズッと多いものである。そつして眞症の胃癌は靈的であり宗教的になるから茲では疑似胃癌のみに就いて説明するが、勿論之は薬毒が原因で前述の如く一旦背部に固結し胃に還元した際医療は排泄を止める結果再び固結す

る。之は普通の固結よりも悪性である。何故なれば毒素に変化したものが、再び固まるからで之が即ち癌である。然し之は薬の性質によるので、どの薬もそうであるとは言えない。之も放任しておいても長くは掛るが必ず治るものである。

主なる病氣（一）

私は人体の重要な三大機能の大体を書いたが之から主なる病氣に就いて解説してみよう。

腎臓病とその他の病

腎臓は体内機能中三大機能に次いで重要な役割をしているもので、之は医学でも唱える如く一旦腎臓へ集溜されたる液中から、貴重なホルモンを抽出すると共に廃物液体である尿は膀胱へ送られるのである。處が厄介な事には腎臓が完全に活動されるとしたら右の通りであるが、實際上幼児から少年・青年・壮年と年を重ねるに従つて漸次働きが鈍るのが通例で、其原因は腎臓が萎縮するからである。では何故萎縮するかといふと腎臓が前述の如く必要なものと不必要なものが分けられる場合、右の二者以外の異物が混じる場合がある。此異物こそ言つてもなく薬毒であつて之がどう處理されるかといふと、ホルモンにも尿にもならないので腎臓の表皮を透過して背部腎臓面に浸出するから、薬毒に追加され両毒合併して毒結は愈々増大する以上、脊柱の両側に溜り上向延長しつづ遂に肩や頸の辺に迄及ぶのである。肩や首が凝るのは之であつて、面白い事には此両毒結を判別する事が出来る。即ち患部を押せば薬毒の方は固くて痛み頑固性で

あるが、尿毒の方は稍々柔軟で殆んど痛みがない。そうして毒素は遂に頭脳内に迄進入するので、其結果浄化が起る。それで頭重・頭痛は勿論、脳膜炎・日本脳炎・脳脊髄膜炎・脳溢血等凡ての脳疾患である。此頭脳内の毒素の有無を知るのは甚だ簡単で頭脳に手を触れてみれば直ぐ判る。即ち少しでも温度があれば毒素のある證據で温い程毒素が多い譯だが、現代人で無熱の人は恐らく一人もあるまい。

そして前頭部に固結した毒素の急激強烈な浄化が脳膜炎であり、此病気が児童に多いのは浄化力が旺盛であるからである。即ち此病気が高熱と共に前頭部の激痛と目が開けられないのが特異性で、之は眩しいのと眩暈との為である。然し之も放置しておけば毒結は溶解し、涙・鼻汁等になつて排泄され完全に治るのである。而も予後病氣以前よりも頭脳明晰となり、児童などは学業の成績も優良となるので、之は医師も一般人も意外に思うのである。處が医療は氷冷等で固める為一旦無熱となり治つたようでも、その固結が機能の活動を阻害し痴呆症やその他種々の不具的症状を表わすのである。

其他として彼の日本脳炎であるが、之は統計によるも五才から十才位迄が最も多いとされている。之によつても判る如く夏日炎天下に帽子も被らないで遊ぶ場合脳は強烈な日光の直射を受けるから、其刺激によつて背部・肩等にある毒素が頭脳に向つて集中を開始する。其際一旦延髄附近に集溜するので其部に手を触れば棒状の固結を見るが、それが高熱によつて溶解後頭内に侵入するや非常に睡くなるのである。處が医療は氷冷で固めるから予後脳膜炎と等しく種々なる不具的症状を残すのである。然し病氣も放置しておけば後脳内に入った毒素は頭脳を通過して目及び鼻・口から血膿となつて旺んに排泄され、

出るだけ出ればそれで完全に治つて了うのである。先ず全治迄一週間とみればいい。而も予後脳膜炎と同様児童等は非常に学校の成績が良くなるのみならず、初めから生命の危険などは絶対にならないに拘わらず死ぬといふのは全く氷冷等の誤れる逆療法を行うからである。そうして日本脳炎は夏季羅病するに對し、冬期に起るのが脳脊髄膜炎である。之は日本脳炎と同様延髄付近に毒素が棒状に固結するが、之は夏と異い日光に晒されていないから中途で止まるといふ譯である。此病氣の特異性は右の如き棒状の為首は前後に動かず、恰度丸太棒のような形で良く判るのであるが、此経過も日本脳炎と同様であるから略す事とする。

次に脳疾患の外の種々の症状を詳しく書いてみよう。

前述の如く萎縮腎の為頭部に向つて進行する毒素は延髄付近にも固結するので、眼球に送血する血管が圧迫され眼は貧血を発す事になる。つまり眼の栄養不足で其為視力が弱り遠方迄見得る力が足りない。之が近視眼の原因である。何よりも右の固結を溶解するに従つて近視眼は全治するに見て明らかである。乱視も同様の原因であるが只乱視の方は浄化の為人により固結状態が絶えず動揺し血管を不規則に圧迫する為視力も動揺するからである。又底翳は眼底に毒素が流血し視神経を遮断するから見えないのである。白内症・緑内障は眼球そのものに毒素が固結するので之も放置しておけば自然に溶解し全治するが、医療は点眼薬や眼球注射等を行うから、此薬毒の為毒素は固まつて了い治るべき眼病も治らない結果になるのである。そうして凡ての眼病は頭脳に集溜した毒素が出口を求めて眼球から排泄されようとし、一旦眼球に集中し再び溶けて膿・油脂・涙等となつて出るのであるから、放任してお

けば長くは掛かるが必ず治るものである。又トラホームは頭脳の毒素が眼瞼の裏の粘膜から排泄されようとし発疹となって排膿されるので、之も自然に簡単に治るものである。

次に鼻に関する病であるが鼻茸・肥厚性鼻炎・鼻加答児等は何れも頭脳の毒素が一巨鼻の両側・鼻の奥・鼻口等に集溜し排泄されるのであるから、之も自然に治癒すべきを医学は種々の逆方を施す結果治らない事になるのである。

又中耳炎は耳下腺及び淋巴腺の毒結が高熱により溶解穿骨し、一旦中耳に入り鼓膜を破って排泄されるそれらの痛みであるから、之等も一・三日そのままにしておけば順調に治癒されるのである。

次に扁桃腺炎であるが、之も淋巴腺附近の毒素が日を重ねるに従い扁桃腺に固結し高熱によつて溶解、粘膜を破って排泄されるという極めて簡単な浄化作用で結構なるものであるが、医学はルゴール等の塗布薬を用い浄化を妨害するので拗れると共に遂に膨大し手術の止むなきに至るのである。故に読者諸君は試みに今度扁桃腺の発つた場合何もせず放っておいてみられたい。すると短時日で順調によく治つて了うばかりか起る毎に段々軽くなり、遂に全治するのである。之は私が慢性扁桃腺炎を治した経験と多数の人に教えた結果、例外なく根治したに見ても確実である。

茲で面白い事がある。それは多い病気とは言えないが割合厄介なものに歯槽膿があるが、之も淋巴腺附近の毒素が歯茎を目標けて集溜し血膿となって排泄されようとする一種の浄化であるから、私は斯んな汚いものはないというのである。それは元々尿の古くなつたものが口中から出る譯だからである。之を治すのは譯はない、歯茎を固いブラシで摩擦すれば血膿が出るだけ出てそれで治つて了うものである。

右によつても分る如く最初に述べた感冒の原因である、肩から上に固結する毒素は凡て腎臓が元である事は明かであるとしたら、感冒も結核も肺炎も殆んど病気は腎臓萎縮が原因である事が判つたである。

處がそればかりではなく、肋膜炎も腹膜炎も関節リュウマチも神経痛も婦人病も勿論そうであり、カリエスも肝臓病も黄疸も糖尿病も膽嚢・腎臓・膀胱内の結石も喘息も中風も小児麻痺も精神病もそうである。としたら実に腎臓萎縮を起こさないようにする事こそ健康第一條件である。以上の病気は順次説く事にするからそれを読めば尚よく判るであらう。

此理によつて腎臓を完全に働かせる事が肝腎で、それには腎臓萎縮の原因である固結を溶解除去すると共に作らないようにする事である。處が現在の如何なる療法によつても不可能であるが、独り本教浄靈によれば可能であるから此一事によつても病なき世界は期待して誤りないのである。

主なる病気(二)

肋膜炎と腹膜炎

肋膜炎は医学でも言われる如く肺を包んでいる膜と膜との間に水が溜るので、これが濕性肋膜炎と言ひ、膿が溜まるのを化膿性肋膜炎と言ひ、何も溜らないのに腹と幕との間に間隙を生じ触れ合つて痛むのを乾性肋膜炎と言つのである。濕性の原因は勿論胸を強打したり器械体操の如き手を挙げて力を入れる等が原因となつて発するのであるが、何の原因もなく偶然発る事もあるのが此病気である。膜と膜との間隙

に溜まる水とは勿論尿であつて医療は穿孔して水を除るが、此方法は割合奏効する事もある。然し之も癖になり慢性となり易いがそうになると水が膿化し化膿性肋膜炎に転化する。又初めから膿の溜るものもあるが、何れにせよ慢性になり易く大抵は穿孔して穴から毎日排膿させるのである。然し斯うなると仲々治り難く重傷となり殆んど死は免れないが、此化膿性は薬毒多有者が多い事は勿論である。

濕性は最初高熱と胸の痛みで深い呼吸をする程余計痛むが、反つて水が多く溜まると無痛となるもので、之は膜の触れ合いがなくなるからである。又尿の出も悪くなるのは勿論で、此病氣の特異生は眠い事と盗汗であるが、此盗汗は非常によいので之は溜つた水が皮膚を透して出るのであるから、放任しておけば出るだけ出て治るものである。之を知らない医療は盗汗を悪いとして停めようとするから治らなくなるので、如何に誤っているかが判るのである。又化膿性は膿が肺に浸潤して痰となつて出るのであるから、之も自然にしておけばいいのである。乾性肋膜炎は滅多にない病氣で医診は肋間神経痛とよく間違えるようであるが、之も簡単に治るものである。よく肋膜炎から肺結核になる人も多いが、之は肋膜の水や膿が肺へ浸潤し安静其他の誤つた手当の為肺の中で固まつて了う其為であるから、最初から何等手当てせず放任しておけばそう結核にはならないのである。

次に腹膜炎(別名腹水病)は肋膜と同様腹膜と今一つの幕との間に水が溜つて頗る膨大になるものである。處が医療は穿孔排水方法を探るが、之が非常に悪く排水すると一旦はよくなるが必ず再び水が溜る。すると又除る又溜るといつように癖になるが、困つた事には溜る期間が段々短縮され量も其度毎に増えて行くので何回にも

及ぶと益々膨大、臨月の腹よりも大きくなるもので、斯うなると先ず助かる見込みはないのである。此原因は萎縮腎であるから萎縮腎を治さない限り全治しないのは勿論である。

又化膿性腹膜は薬毒が膿となつて臍を中心に其周囲に溜結するのであるから、腹水の如き膨満はなく、反つて普通より腹部は低い位である。之は押すと固い處が所々にあつて圧痛があるからよく分る。然し慢性は輕微の痛みと下痢であつて非常に長くかかり、治るのにも数年掛かる者もある。處が医療は薬で治そうとして服薬をさせるから、実は毒素を追加する事になるので治るものでも治らない事になつて了う。そうして恐ろしいのは彼の急性腹膜炎である。此病氣は急激に高熱と共に激痛が伴い殆んど我慢が出来ない程で、患者は海老の如く身を縮めて捻るばかりである。医療は切開手術を行うが、之は成績が甚だ悪く近頃は余り行わないようである。之も本療法によれば一週間乃至二週間以内で完全に治癒するのである。之は旺盛な浄化であるから青年期に多いのは勿論である。そうして此化膿性腹膜という病氣は人により軽いはあるが、全然ない人は先ずないといつてよからう。茲で注意すべきはよく禪や複式呼吸其他の意味で腹に力を入れる人はそこに毒素が溜結し腹膜炎が發り易いから注意すべきである。

喘 息

喘息に関しては医学では全然判つていないのである。というのは医学に於ける喘息の説明は殆んど問題にならないからである。ヤレアレルギー疾患だとか、迷走神経の緊張だとか、神経過敏性とかさうかと思えば食物とか土地とか中には部屋の構

造、壁の色まで関係があるというのだから、寧ろ滑稽でさえある。従つて成可詳しく説明してみよう。

医学でもいう如く喘息は大体二種ある。気管支性と心臓性(近來此方はアレルギー性ともいう)とである。先ず心臓性から書いてみるが、之は最初横隔膜の外部に薬毒が固結するのである。それに浄化が起るや微熱によつて溶解液体状となり、肺へ浸潤して喀痰となつて出ようとするが、此場合横隔膜部は肺臓から距離があるので液体の方から浸潤する事が出来ない為と、肋間に毒結がある場合浄化によつて液体となつたが、人により肺膜の厚い場合容易に浸潤し難いので肺の方から最大限に擴がり吸引しようとする。そのように大体右の二つの原因である。という譯は肺は其様な猛烈な運動の為、肝腎な空気を吸う力が減殺されて窒息状態となるのである。何よりも其際肺に侵入した毒液が咳と共に痰になつて出ると、発作は一時楽になるという事や、又肺炎に罹ると一時快くなると言われるが、之は高熱の為固結が溶解され痰になつて出るからである。

右の理が間違つていない事は、何よりも先ず心臓性喘息患者の横隔膜部を指で探れば必ず固結を見る事である。

次に気管支性喘息であるが、之は肋骨付近に固結している毒結が、浄化によつて少しずつ溶けるので、それをやはり肺の方から吸引しようとして肺臓は猛烈なポンプ作用を起す。それが咳であるから之によつて痰が排泄され一時快くなるのである。然し痰の量が多く出れば出る程短期間に治るのであるが、それを知らない医学は極力固め療法を行うので少しづつしか痰が出ないばかりか、薬毒も追加されるのと相俟つて治り難くなり慢性となるのであるから、丸で策へ水を汲んでいるようなもので、人により何十年も苦しんで治らない者は

そついつ譯である。之を考えたなら患者も医師も実に氣の毒の一語に盡きるが、何とか分からしたいと常に思つているのである。

肝臓・膽囊・膀胱の結石

医診でよく言われる肝臓病というのは、実は誤りで肝臓そのものには異常がないので、只肝臓の外部に薬毒が固結しているのを間違えたものである。然し其毒結が勿論肝臓を圧迫しているので、苦痛であるのみか之が黄疸の原因ともなるから始末が悪いのである。勿論右の如く毒結によつて肝臓を圧迫する以上、肝臓の裏にある膽囊も圧迫されるから膽囊の中にある膽汁が滲出し全身に迴る、それが黄疸である。處が黄疸は皮膚の変色ばかりの病ではなく胃の活動をも阻害させる。というのは膽汁は胃の消化を助ける為絶えず輸膽管を通じて胃に送流しているに拘わらず、右によつて膽汁の供給が減るからである。故に此病氣を本當に治すには原因である肝臓外部の毒結を溶解し排除させるより外に方法は無いが、医療ではそれが不可能であるから一時的緩和法によつて小康を得るより手段はないのである。

茲で結石に就いて書いてみるが、最も多いのは膽囊結石であつて之は膽囊の中へ石が出来るので、その石が膽汁と共に胃に向かつて流入せんとする際、輸膽管通過が困難なのでそれが堪えられない激痛となるのである。従つて医師も特に治療困難な病氣としている。近來細い針金様の機械を作り咽喉から胃を通して捕捉し出すという事を聞いているが、余り効果はないようである。處が石の小さい場合通過下降し腎臓にまで流入するので腎臓内の尿素が附着し段々大きくなってゆき、茲に腎臓結石

となるのである。そうして困る事には結石は腎臓活動の為腎臓壁に触れて疵が出来る。そこへ尿が泌みるから痛みと共に出血するので、之を医診は腎臓結核というのである。而も結石は漸次育つてゆき、余り大きくなると致命的となり医療は手術によつて片一方の病腎剔出するのであるが、其時分は非常に固い石となつており、之を細工して指環やカフスボタンなどに作られたものを見た事があるが、頗る光澤があつて寶石に見紛うばかりである。又小さい内膀胱に流入し腎臓に於けると同様育つてゆく、之が膀胱結石である。處が最も困る事にはその結石が膀胱の入口へ痞(つか)える事がある。それをうまく通過しても今度は尿道口に痞える。両方とも尿の排泄を止めるから、尿は漸次下腹部に溜り腫れるので、医師はブーチーを挿入するが、之も尿道口だけの閉塞なら奏効するが膀胱口の方は仲々困難なので遂に生命に関わる事となるのである。

茲で最初の膽嚢結石の原因を書いてみるが、之は嚢に述べた如く腎臓から滲出する薬毒が漸次上部に移行する際、膽嚢の裏面から膽嚢内へ滲透するので、其毒素と胆汁と化合して石となるのである。従而之を治すには根本である背面腎臓部の毒結を溶解し、腎臓を活発にさせ餘剰尿を作らないようにする事で、それより外に方法はないのである。従つて本浄靈法によれば割合簡単に石は分解され、砂の如くなつて尿と共に排泄されるので短期間に全治するのである。

神経痛とリヨウマチス

單に神経痛といつても色々あるが、それは勿論場所によるのである。然し普通は手や足で、肋間等でリヨウマチスを併発する

場合も多く、要するに此病氣は外部的神経が痛むだけで内臓は何ともないのである。只特殊のものとしては骨髓炎の痛みで、之は薬毒が骨に固着したその浄化である。又肋間神経痛というものも此名稱は少々の外れである。というのは医学でいう肋間神経痛は本当は肋骨神経痛である。何故なれば原因は肋骨に薬毒が固着し、それが浄化によつて溶け始め痰となつて肺に侵入しようとする場合神経を刺戟し痛むのである。

此病氣は激しく澆る場合、非常に痛み呼吸すら困難になる事がある。然し之は又非常に治りいいのである。

又神経痛の中には淋病が原因で澆る事もある。之は大抵腕の関節に多いが、割合順調に治るものである。そうして一般の神経痛は注射等の薬毒が原因で、痛みを我慢して自然にしておけば必ず治るものであるが、そうすれば毒素は漸次一ヶ所に集溜し紅く腫れて自然に穴が開き、そこから排膿して治るものである。

茲で医学でも気がつかないものにパピナル注射の中毒がある。全身的に皮膚が痛む症状で、之も自然にして置けば簡単に治るものであるが、医学は反つて種々の注射などするから反つて治り難くなるのである。

次ぎはリヨウマチスであるが、之は人も知る如く手足と指等の関節が紅く腫れ上り非常に痛むもので、原因は勿論薬毒が関節へ集溜し腫物となつて排泄されようとするとその痛みで、患者は堪へ難く悲鳴を擧げる位である。處が医療は患部を絶対動かぬよう固める手段を採るので、固まつて了えば痛みはなくなるが、その代わり関節は動かなく棒のようになつて了い、一種の不具者となり一生涯跛行となるのであるから、恐ろしい病氣の一種である。此点などにみても医学は病氣を治すのではなく苦

痛だけを治して不具者にする譯である。處が我が淨靈法によればいと簡単に短時間で全治させ得るのであるが、困る事には氷冷・塗布薬・注射等をした者はそれだけ長くかかるので、ツマリ散々金を遣つた揚げ句不具者とされるのだから厄介な世の中である。従つて最初から何等手当もせず淨靈法のみ施せば一週間以内に完全に治るのである。

上半身の病氣と中風

上半身の病氣に就いては大体書いたが、未だ書き残したものがあからから書いてみるが、先ず今日最も恐れられてる病氣としては中風であるうから、それを最初に説く事とする。

今日若い者は結核、老人は中風というように相場が決まっているが、全くその通りで誰しも老年になるに従つて最も用心を持つものは中風であろう。中風は勿論脳溢血からであるが、此病も医学では全然判っていないばかりか、判つてもどうする事も出来ないのであるから厄介である。先ず脳溢血から書いてみるが、脳溢血の原因は頸の固結であつて、特に左右何れかの延髄部に長年月を経て毒血が固まるのである。従つて脳溢血の素質を知るには雑作もない。右の部を指で探れば固結の有無が判る。それは右か左かどちらかが必ず大きく隆起しており押すと軽い痛みがある。處がそこに一度淨化作用が滲るや固結は溶解され血管を破つて頭脳内に溢血するのである。溢血するや忽ち脳を通過して反対側の方へ流下し、手及び足の先にまで下降し速やかに固まつて了い半身付随、即ち手も足もブラブラになつて了うのである。重いのは腕も手も引つ張られるようになり内側へ脳は曲り、指迄曲つたままですら動かな

くなる。そうして拇指が一番強く曲り四本の指で拇指を押える形になる。處が面白い事には足の方は反対に曲らないで伸びたまま、足首などダラリとなつて了う。それだけならいいが重傷になると舌が吊つて呂律が廻らなくなり、頭がボンヤリして痴呆症同様となり、目までドロロンとして悪い方の側の眼力は弱化し見えなくなる者さえある、というのが主なる症状で全く生ける屍となるのである。

處で医学の最も誤つている点は発病するや何よりも急いで頭脳を氷冷するが、之が最も悪いのである。医学では之によつて溢血の原因である血管を速く収縮させようとするのであるが、之が大変な間違いで本来溢血は毒血が出る丈出れば忽ち止血するもので、そうなるには数分間位である。従つて止血させる必要などないばかりか反つて氷冷の為、溢血後まで残留している頭脳内の毒血をより固めてしまふ事になるから、頭脳内の機能の活動は停止される以上より痴呆症的になるのである。それを知らない医療は氷冷を何日も続けるのであるから其結果はどうなるかという、頭脳を冷やし過ぎる為凍結状態となつて了うのである。考えてみるがいい、人体中最も重要な機能を氷結させるとしたら生きている事は到底出来ないに決つてゐる。此為生命を失う者の数は実に多いのである。全く角を矯めて牛を殺すの類いで、之こそ病氣の為の死ではなく病氣を治す為の死であるので、何と恐るべき迷蒙ではなからうか。之は私の長い間の多数の経験によつても明らかな事実であつて、脳溢血だけで死ぬ者は滅多にないのである。

茲で脳溢血に附随する種々な点を書いてみるが、医学ではよく転ぶと脳溢血が起こり易いとされているが、之は逆であつて脳溢血が滲るから転ぶのである。つまり転ぶのが先ではなく脳溢血が先なのである。

よく転んだり梯子段から落ちたりするのは溢血の為の眩暈である。そうして最初の脳溢血が幸いにも一時小康を得て歩けるようになっても医師は転ぶのを非常に警戒するのは右の理を知らないからである。又医学に於ては頭重や一部の麻痺・眼底出血・耳鳴等があると溢血の前徴として豫防法を行うが、右の症状は医学のいう通りであるが、其豫防法は滑稽である。それは身体を弱らせようとして減食・運動制限等を行わせるが、之は弱らして浄化を滞させないようにする手段である。又再発を豫防する手段も同様であるが、之等も発病を少し延ばすだけで何れは必ず発病するし再発も免れないのである。又近来瀉血療法といつて発病直後、直ぐにそれを行うのを可としているから、之も見当違いで最早溢血の毒血はそれぞれの局所に固まっているのであるから、瀉血は何等関係ない處から出血させるので其為貧血して大抵は数分後死ぬので、此例は近頃よく聞くのである。

今一つ注意すべき事は高血圧が脳溢血の原因とよく言われるが、之も甚だしい錯誤で血圧には多少の関係はあるが、直接には全然ないのである。その譯を实地に就いて書いてみるが、以前私が扱った患者に六十才位で当時講談社の筆耕書を三十年も続けていたという人があった。此人の言うのは自分は六年前血圧を計った處何と三百あつたので医者も自分も驚いたが、血圧計の極点が三百であるから実はもつとあるのかも知れないと思つた位である。その為医師から充分に安静せよと言われたが、自分は勤めを辞めると飯が食えないし自覚症状もないから毎日此通り休まず勤めているが、別に変わった事はないと言つので、私も驚いたがよく見ると左右特に右側が酷く顎の下に鶏卵大に盛上つているコリコリがあつたのでハハアー之だなど思つた。というのは此筋は腕へ繋がっている

ので血圧計に表れた譯であるが、本当の脳溢血の原因である固結は最初に書いた如く延髄部の毒血であるから右は見当違いである。處が中風といつても斯ういう別な症状もあるから知つておくべきである。それは左右何れかの頸部淋巴腺に固結がある場合、之が浄化によつて溶解するや頭腦の方とは反対に其側の下方へ流下し中風と同様の症状となるのであるが、之は脳には関係のない事と割合軽症な為医師も首を捻るが、之も医療では治らないと共に逆療法を行う結果反つて悪化し、先ず廢人か死かは何れもない事になる。此症状を吾々の方では逆中風と言っている。

脳貧血・其他

次に脳貧血を書いてみるが、之は脳溢血と反対であつて脳溢血は毒血が頭腦に入り腦の血液が増えるに反し、之は腦の血液が減少の為滞る病氣である。では何故減少するかと言つと人体は絶えず頭腦に向つて送血されているので、之が一定量なら何事も無いが、其量が減ると頭腦機能の活動が鈍る、それが脳貧血である。

右の如く量が減るといふ事は頭腦へ送血する血管が頸の回りにある毒結の圧迫によるからで、此固結を溶解しなければ治らないのは勿論である。

處が医学はそれが不可能の為一時的姑息手段を取るより致し方ないのである。其様な譯で脳貧血の症状は頭痛・頭重・圧迫感・眩暈等で、嘔吐感を伴う場合もあり本當に嘔吐する事もある。中には汽車・電車・自動車の音を聴いただけでも眩暈や嘔吐感を催す者もある。然し之は医学でもいふ如く割に軽い病氣で心配はないが、其割に苦痛が酷いものであるから初めの内は相当神経を悩ますものである。

此病氣を知るのは最も簡単である。発病するや目を瞑り額に油汗をかき嘔吐感を催す等で、其際掌を額に当ててみると普通より冷たいのでよく判るのである。そうして淨霊の場合首の周囲を挫つてみると必ず固結があるから、そこを溶かせば間もなく快復する。又発病するや枕無しで仰臥すると頭へ血が流れるから多少効果はある。今日最も多いとされている神経衰弱も脳貧血が原因である事は言つ迄もない。

睡眠不足

睡眠不足とよく言われるが、之は結果であつて睡眠困難と言つのが本当であらう。然し之が病氣とは言えないが、病氣の原因になる事が大きいから仲々馬鹿にはならないものである。此原因は全く一種の脳貧血であつて延髄部に固結が出来、それが血管を圧迫し脳貧血を起こさせ睡眠不能となるのであるが、此固結は右側の方が多く左側は少ないもので、之を溶かす事によつて百発百中必ず治るのである。

處が此原因である脳貧血は前頭部に限るので、何故それが睡眠困難の原因になるかという其部に靈が憑依する為であつて、之に就いては最後の靈の項目に譲る事とする。然し此病氣の恐ろしい事は往々精神病の原因になるので、急速に治す必要がある。医学では勿論原因すら不明であるが何よりも精神病の初めは必ず睡眠不足が長く続くのである。従つて睡眠が普通になると治り始めるに見ても分るのである。

耳鳴

之も多い症状であるが、医学ではどうする事も出来ない。併し別段命に関わる程の

病氣ではないから、大抵放つて置くが割合辛いものである。此原因もやはり延髄部の固結で、之が不断の微弱な浄化によつて溶ける其音が耳に響くのであるから、之も其部の固結を溶解すれば液体となつて、毒素は噎によるか又は自然に鼻汁となつて出て快くなるのである。

希には耳下腺附近に固結が出来、其浄化の為である。

其他のもの

之は少ない病氣だが心臓が元で脳に影響する症状がある。それは心臓辨膜症などある人が、一寸した事で動悸と共に眩暈が起るので、之は何が為かという心臓の周囲即ち胸部・横腹・肩胛骨下部等に固結のある場合、それに浄化・微熱が滲るので心臓が興奮し頭脳に反射するからである。

次は歯に関する病氣であるが、之は歯に付ける薬毒が浸透して頭にのぼる場合、中耳炎の際の薬毒、扁桃腺やリンパ腺手術による消毒薬、眼病の際の点眼注射、手術の消毒薬などが頭脳までも犯すので、右何れも慢性的頭脳の病原となるのであるが、其他に斯ういう事もある。それは背部や胸部等に出来た腫物を手術した為、其時の消毒薬が頭脳に迄浸透し固まるので、その手術が局部の前部・背部の関係で前頭部又は後頭部の病みとなるのである。要するに上半身に於ける手術の際の消毒薬が頭脳の病原になる事が分ればいいのである。

扁桃腺炎

世間よく扁桃腺炎を根治する目的で扁桃腺を除去する事が常識のようになってくるが、最近の学説によれば、扁桃腺は實

重なもので除去しない方が可いとされて来たという事である。全く除去した結果は他に悪影響を及ぼす事が分つたからで実に喜ばしい限りで、私が長年唱えて来た説が漸く認められるようになったもので、満足に堪えないのである。

そこで扁桃腺という機能の意味から扁桃腺炎の原因に就いて書いてみるが、人間は誰しも上半身の毒素は頸部淋巴腺に最も集中し易いので、そこに毒素の溜結が出るので大なり小なり此溜結のない人は殆んどないといつてよからう。すると此溜結毒素は出口を求めようと、少しずつ溶解し一旦固まる。處が扁桃腺であるから、或程度固まるや高熱が出て溶解し自然に穴が穿いて毒素は排除されるのであるから、扁桃腺なるものは実上半身毒素の掃け口とも言つていいもので、若し扁桃腺がなくなつたとしたら毒素は止むなく他の部に溜結する事ともなる。之が脳神経衰弱や中耳炎・歯痛・鼻の病氣等の原因となるのであるから、結局小の虫を殺して大の虫を助けるという結果になる。何よりも扁桃腺除去後数年間は風邪など引かないので、効果あつたように思われるが何ぞ知らん、年月が経つに従つて色々な病氣が湧るのである。處が其原因が分らない為仕方なしにいい加減な病名を付けるのである。

口中の病など

茲で口中の病に関して書いてみると先ず歯であるが、齒の強弱の原因は全く全身の健康と正比例しているものであつて、近代人の齒の弱いという事は健康が弱っているからである。勿論其原因は体内に溜っている薬毒の為ではあるが、其他として入れ歯の際の消毒や蝕歯を治す為の薬毒の害も軽視出来ないものがある。それは蝕歯

の穴へセメントなど詰めて貰う場合消毒が肝腎といつて消毒薬を使うが、之が恐るべき逆効果となるのである。というのは消毒薬は時日が経つと必ず腐敗して黴菌が湧く、それに自然浄化が湧つて外部へ排泄されようとするので、軽いのは歯茎から出ようするだけで大した事はないが大抵は重いから非常に痛む。之は齒根の骨に小さい穴が穿く痛みであつて、穴が穿いて膿が出始めればずっと楽になる事は誰しも覚えがある。従つて私などは齒医者でセメントを詰めて貰う場合必ず薬を使わせなようにする。そうすると何時迄経つても痛む事など決してない。よくセメントなど詰めた歯が痛んだ時それを除つて貰うとスーッと快くなるに見て明らかである。此場合齒医者は消毒不完全の為と思つが之も医学迷信に陥っているからである。

従つて齒磨き等も薬剤の入らない物程可い譯で、私などは近頃齒磨も塩も何にも使わず只指の腹でコスルだけである。だから齒を丈夫にしたいと思つたら全身を健康にする事で、それには薬剤と縁を切ればいいのである。然しそうはいつても現在齒の弱い人・蝕歯のある老齡者などは急の間に合わないから、そういう人は精々入歯をして美しくすべきである。

次に口内粘膜にブツブツが出来て物が泌みたり喉が痛んだり舌にオデキが出来たりする人があるが、之は悉く服み薬又は含嗽薬が粘膜へ滲透し古くなつて毒素となり排除されようとする為であるから、放つて置けば必ず治るのである。舌癌なども殆んどがそれであつて何にもせず放つて置けば十中八・九は治るものである。處が醫師は癌らしいものであつても職業柄治る治らないは別として薬を用いるより外に方法がないとして、先ず藥物療法を行うが之によつて反つて悪化させ本當の癌になる事が多いのである。従つて此事を是非

知らせたいと思つて茲に書いたのである。處が希ではあるが何としても治らないのがある。即ち之が眞症舌癌である。併し之は靈的であつて原因は其人が悪質な嘘を吐いたり、舌の先で人を傷付けたりする罪の報いであるから、そこに気が付き悔改め、正しい信仰に入らなくては絶対治らないのである。茲で凡そ馬鹿々々しいのは咳を緩和させようとして吸入を行う事で、之は何の効果もないのである。考えてもみるがいい、咳は息道から出るものであるから、吸入薬の殆んどは食道の方へ行つて了うから見当違いである。然し最初に述べた如く咳は痰を出すポンプ作用であるから、出る程可いので止めるのは如何に間違つてゐるかが判るであらう。そうして今一つ馬鹿々々しい事は含嗽薬で、之も口内を消毒する目的だが実は逆である。元來人間の唾液程殺菌作用のあるものはない。何よりも黴菌よりもズット大きな或種の虫は唾液をかければ弱つたり死んだりするのでも分るのであらう。だから実を言つと含嗽をしてゐる間だけは口内の殺菌力は薄弱である譯である。此事は眼も同様でよく眼を洗う人があるが実に滑稽であつて、目には涙と言ふ素晴らしい消毒液があり瞼の裏の粘膜は柔らかく理想的のものであつてみれば、硼酸水や布巾などで洗つ事などは最も間違つてゐる。

下半身の病氣と痔疾

上半身の病氣を書いたから、之から下半身の病氣に移るが先ず一番多い病氣としては痔疾であらう。此病の原因は甚だ簡單である。つまり全身各局部に溜結している毒素が少し宛溶解して最も都合のいい肛門から出やうとするので、言わば肛門は糞尿以外の汚物の排除口も兼ねてゐるといふ譯で、神は巧く作られたものである。そうして痔疾の中で最も多いものは脱肛といつて贅肉のようなものがはみ出る症状であるが、之も最初の内は譯なく押込ませるが時日の経つに従つて段々大きくなり押込め難くなる。そうなると非常に氣持が悪いので、色々な手段を尽しても治らないので煩悶懊惱している人が世の中には割合多いようである。特に婦人の出産の折等イキミの爲脱肛になる人も実に多いが、之などは場所が場所だけに人には言えず秘してゐるので猶更辛いであらう。元來痔疾の原因であるが此病氣は先天性薬毒及び尿毒と後天性薬毒との二種又は三種の混合毒素が下降して肛門の周囲に一旦集結する。之が脱肛の原因であつて、脱肛にも痛むのと痛まないのがあるが痛むのは後天性薬毒がある爲である。此病氣は日本人に特に多いとされてゐるが之は全く便所の構造が悪いからであらう。今一つは便所で読書をする人がよくあるが之が悪い。読みかけるとつい時間が長く掛かるから痔のある人は此点自省すべきである。私も若い頃随分痔で苦しんだものだが、此点に氣が付き必ず五分間以内と決め、假へ中途であつても便所から出るようにした處、それから自然に快方に向つたのである。

次は痔核と言つて肛門の淵に疣が出来るものがあるが、之にも内痔核と外痔核とあり前者は太つてゐる爲後者は瘦せてゐる爲である。之も放任して置けば毒が溜る

だけ溜って段々大きくなり遂に破裂して排毒され治つて了つのである。又痔出血もよくあるが、之は毒血が肛門から出ようと一部に亀裂が生じ常に排血するので気が悪く心配するものだが、本当は結構なのである。何となれば浄化の為の毒血排泄であるから健康上非常にいいのである。何よりも出血後頭脳の悪い人や首・肩の凝る人等は必ず軽快になるものである。従つて脳溢血予防にも大いに役立つのである。

次に痔の病の中一番問題なのは痔瘻であろう。之は強烈な薬毒が最初肛門の一部に固結するが、非常に痛むので医師に診て貰うと必ず切開手術を行うので一時快くなるが例外なく其お隣りが又腫れる。復切る、復腫れるという譯で遂に蜂の巣のようになつてしまい耐えきれない程の痛みとなる。之は手術の度に新しい薬が滲透するからで、つまり痛みの原料を増やすのだから堪らない。従つて最初から何にもせず放つておけば自然に排膿して必ず治るものである。又痔瘻を治すと肺病になり易いと言われるが、之は手術が奏効して排膿が止まると毒素の出所がなくなるので肺を目掛けて出よつとするからである。

又驅梅療法的一種で昔から推奨されているものに水銀を臀部へ注射する方法があるが、之は二十数年経つてから痔瘻と同様の症状を呈する事がある。非常に固い楕円形の尖起状のものが出来耐えられない程の激痛がある。之も放つて置けば二・三週間で全治するが、手術をすると慢性痔瘻になり易いのである。今一つ始末の悪いのは肛門搔痒症であるが、原因は勿論天然痘毒素及び薬毒であるが、之は放つておくも数十年掛かる位で浄霊でも数年は掛かるのである。

一口に婦人病といっても種類の多いのは衆知の如くであるが、何といつても子宮病が主であろう。子宮の役目としては月経と妊娠の二つであるが、月経に就いての病氣といえ先月の月経痛と月経不順であるが、前者は月経時一日乃至数日に涉つて多少の痛みがある。之は何が原因かというところ経血が喇叭管を通らうとする際喇叭管の入口が狭いので拡がらうとする其痛みである。何故喇叭管口が狭いかというと下部の其辺に毒結があり、圧迫しているからで、之を溶解排除させれば容易に治るのである。勿論医学ではどうにもならないので長年苦しんでいる女性もよくあり実に可愛想というの外はない。

又月経不順と一口に言つが、之には遅れ勝ちと不規則なものと経血の多い少ないとがあるが、此原因の殆んどは貧血及び濁血の爲であつて眞の健康にさえなれば必ず順調になるのである。茲では非知つて置かねばならない事は結核患者の月経異常である。之は月経が普通にある間は病氣は軽い證據で決して心配はないが、病氣が進むに従い貧血し漸次量が減つて遅れ勝ちとなり末期に至ると例外なく無月経となるのであるから、婦人患者の結核の軽重を知るには月経によるのが最も正確である。序でに今一つの關聯した事であるが、病氣が重くなり月経が減る頃は陰毛迄抜け最後には無毛となる者さえある。

次は妊娠であるが、之は婦人にとつては病氣ではなく寧ろ健康な證據であるが、近頃は妊娠するや婦人の多くは喜ぶよりも反つて恐れたり心配したりするが、之も一面無理はない。何故なれば妊娠中色々故障や病氣が起り易いからで、大抵の人は悪阻の苦しみは勿論結核・バセドー氏病等のある人は危険であるとして人工流産させたり、又人によつては出産となるや難産の場

合さえあるので、安心の出来る人など先ずないといつてもよからう。之に就いて考えなければならぬ事は、右のような種々の障害は実は変則であつて恐らく昔の婦人はそういう事は余りなかつたようで、記録等にも見当たらないのである。としたら医学の進歩とは逆効果で理屈に合わない話だが、之が即ち医学の盲点である。逆効果とは全く薬剤の爲であつて、薬剤多用者程成績が悪いのである。而も自分ばかりではなく早産・死産の外、生れた赤ん坊に影響するので近来多い弱体嬰兒や發育不良がそれである。そして本当から言えば婦人が妊娠し子を産むという事は婦人に与えられた立派な役目であるから、順調に経過し無事に出産するのが当然であり、故障など起る筈がないのに起るといふのは、そこに何等か間違つた点があるからで、其間違つた点に気が付き改めればいいので今それ等に就いて詳しく書いてみよう。

妊娠の場合最も悩みとされているのは悪阻であろう。此症状は今更説明の要のない程誰も知つているが、重いのになると生命迄も危くなるので、仲々馬鹿にならないものである。此原因も医学では判つていないが、之は至極簡単な理由である。即ち子宮が膨脹する場合邪魔しているものがある。それは臍部から胃にかけての毒素の溜結で、それが膨脹の爲其排除作用が起る。之が悪阻であつて何より頻繁な嘔吐によつてそれが排除されるので、此毒素と薬毒とであつて出るだけ出て了えば完全に治るが、医学では原因も判らず、判つても出す方法がないから気安め程度の手段か墮胎させる以外方法はないのである。

其他よくあるものに妊娠腎がある。勿論症状は浮腫であるが、之は医学でも言う通り腎臟萎縮である。此原因も曩に書いた如く平常から腎臟背部に毒結があり、其圧迫がある處へ妊娠の爲前方からも圧迫され

るので、腎臟は言わば挟み打ちとなつて萎縮し、全部の尿が処理されず溢れて浮腫となるのであるから、背部の毒結を淨靈溶解すれば腎臟の負擔が軽くなり治るのは当然である。處が医学ではどうする事も出来ないので重症の場合親の生命には代らぬとして人工流産させるが、折角出来た大切な赤子を犠牲にするのだから実に気の毒な話である。而も此時は大抵八・九ヶ月頃であるから猶更親は悲嘆に暮れるのである。

茲で妊娠に就いての医学の考え方に就いて書いてみるが、前述の如く結核やバセドー氏病等の病氣のある婦人に対し危険として流産させるのは大いに間違つている。何となれば妊娠するという事は其人の健康状態が無事に出産出来るだけの体力があるからで、言わば母になる資格が具つている譯である。そうでなければ決して妊娠する筈はない。之等も医学の考え方が唯物一方に偏つているからで、人間本来の神性を無視し動物と同一視する誤りである。之は理窟ではない。私は今迄右の理由によつて妊娠した婦人にどんな持病があつても差支えないと、只淨靈だけで悉く無事に産ませ一人の過ちさえなかつたのである。此事だけでも医学の考え方を大いに変えなければならぬと思つのである。

次に婦人病の個々に就いて書いてみるが、何と言つても子宮の病が王座を占めている。先ず子宮内膜炎であるが、之は子宮の内壁に加答兒が出来る。つまり毒素が下降して子宮内壁から排除されようとする湿疹のようなものであり、今一つは下降毒素が内壁の粘膜を刺戟し加答兒を澆させるので、どちらも氣長に放つておけば必ず治るのである。處が滑稽なのは此際よく掻爬をするが、之は何にもならない。というのはホンの一時的の効果で毒素のある間は後から後から汚すからである。之に就い

て私はいつも言う事は子宮掻爬は菌糞を除るようなもので、物を食えば直に汚れると同様で、それも歯を磨く位の簡単な事ならいいが、婦人として最も羞恥の場所を指で触れさせるのであるから断然廃めた方がいいと思う。

又子宮實質炎というのは子宮の周囲に毒素溜結し、それに浄化が起つて微熱・軽痛・不快感等でも放つておいても治るが、浄霊すれば短期間で全治するのである。

よく不妊娠の場合子宮後屈とか前屈とかいつて手術を勧めるが、成程之は子宮の位置が不良となり子宮口が外れるので、妊娠不能となるのは医学の言う通りである。では前後屈の原因は何かというと毒素溜結が子宮の前か後からか圧迫する為、医学は手術によつて其毒素を除り一時は正常な位置に復すが日を経るに従い再び毒素が溜結、元通りになるので一時的効果としたら大袈裟な手術迄するのはツマラな話である。今一つ考えて貰いたい事はよく医学の診断で後屈の為妊娠不能と云われた者が手術もせず、其儘にしておいて妊娠した例もよく聞くのである。

以前私は大病院でそう言われた婦人が、其後三人の子供を生んだという事を本人から聞いたのであるが、之なども医学の研究がまだ不充分であるからで、多くの人に迷惑をかける以上充分確信を得る迄は言わない方が良心的だと思つのである。次は子宮癌であるが眞症は滅多にないもので、普通医師から子宮癌の診断を受けた者でも殆んど癌ではなく子宮外部に溜つた濁血の塊りである。そうして医学では更年期以後出血がある場合は先ず癌の疑いを起こせと言われるそつだが、私の経験上此説は誤りである。何故なれば其年頃癌と診断された患者を今迄幾人も浄霊したが、間もなく大量の出血があり癌とされていた手に触る程の塊りが消散して了うから

である。之によつてみて子宮癌と診断された患者は殆んど経血の古い塊と思えば先ず間違いあるまい。之等も医学が今一層進歩したら必ず分る時が来るに違いない。次に子宮筋腫であるが、之は其名の如く子宮を牽引している両側の筋が腫れるというよりも其一部に固結が出来るので、其浄化による苦痛であつて医療は手術によつて除去するが、幸いそれで治る場合もあるにはあるが多くはその附近に再発し勝である。此病氣も浄霊によれば根治されるが相当日数を要するものである。

次に卵巢の病氣であるが、之は殆んど卵巢膿腫と卵巢水腫とであつて症状もよく似ている。只固い柔かきがあり人により軽重の差も甚だしい。従つて悪性か又は医療の結果によつては頗る膨大となり臨月よりも大きくなる場合もある。医療では手術によつて割合容易に除去され得るが、之で卵巢だけの病氣は治るが、他に影響を及ぼすから厄介である。最も始末の悪いのは性格が一変する事で一つなら左程でもないが、二つとも除去されると殆んど男性化したと共に、一生涯不妊となるのは言う迄もない。此外目に障害を起す事もあり盲目同様になる者さえある。又何となく身体全体が弱り、人生観迄變つて陰鬱になつたり自棄的となつたりする。現在医学では手術より方法がないから止むを得ないが、之も浄霊によれば完治するのである。原因は薬毒と萎縮腎による余剰尿が溜るので、前者は膿腫となり後者は水腫となるので何れも腎臓の活動を促進させれば治るのである。

ここで婦人病について根本原因を書いてみるが、もともと婦人病の一切は体内に保有している毒素が漸次下降する為であつて、下腹部に溜れば子宮・卵巢・喇叭管・膀胱等の障害となり、尚下降すれば痔疾並びに一般陰部の病原となるので、之等は後

に書く不感症の原因中に詳説するから、茲では婦人によくある白帯下に就いてのみ書いてみるが、元來婦人の白帯下は非常に多いもので随分悩んでいる人もあるが、実は之は非常に可いのである。というのは諸々の毒素が液体となつて排泄されるからで、出るだけ出れば下腹部全体は非常に快くなるものである。それを知らない医師も一般人も心配して停めようとしますが、之が最も悪く反つて病気を保存させるようなものであるから注意すべきである。

次に近來大分喧しく云われているものに彼の不感症であるが、之は医学でも全然判つていないし婦人にとっては之程將來の運命に関わる重要なものはないから成可詳しく書いてみよう。人も知る通り折角結婚しても何より肝腎な夫からの愛情を受入れ難いので、どうしても夫婦円満にゆかず破綻を生じ易いのである。そうでなければ夫は外に愛人を作つたり又不妊になつたりするので、結局不幸な運命になる婦人が案外多いようである。としたら何としても全治させなければならぬが、困つた事には之を人に相談する譯にもゆかず、といつて医療では全然治せないから満足な家庭も作り得ず、独身者より外道はない事により独り悶々の日を送っている女性も少なくないようであるに同情に堪えないのである。處が淨靈によれば必ず治るのであるから、女性にとつて之程の大きな福音はあるまい。では先ず其原因其他に就いて書いてみるが、一番の原因は言つまでもなく萎縮腎であつて、腎臓は医学でも言つて如くホルモンの製造であるから、腎臓が萎縮すれば活動が鈍りホルモンが不足となる。それは曩に書いた如く腎臓背部にある固結の爲であるから、それを溶かせば治るのである。又今一つの原因は陰部を中心に周囲全体に絶えず下降する毒素が溜る事である。其為下腹部に溜れば前述の如く子宮

はじめ種々の障害となり、尚下降すれば痔疾・腫瘰癧・搔痒症・粘膜の加答児や尿道障害・全面的湿疹や糜爛・痛み・臭氣・不快感等に苦しむのである。特に攝護腺部に腫れや固結が出来たり左右の何れかの大小陰唇部に毒結が出来、それが鼠蹊部に迄及んで足の運動を妨げられたりする。特に攝護腺部の故障は大いに悪いが、之等すべての診断は自分自身で押してみればよく判る。必ず痛み又は塊がある。といつても場所が場所だけに淨靈も自分か又は夫に行つて貰えばそれで結構治つてゆくのである。但し相当長引くから、そのつもりで氣長に根氣よくやれば段々快くなつてゆき、希望も湧くと共に必ず全治するものである。以上の如くであるから、此事を知つたなら如何に天下の女性は喜ぶであらうか、之程素晴らしい救いはないであらう。

小 児 病

單に小児病といつても、其種類の多い事は良く知られているが小児病は突如として発病するものが多く、而も物心のない赤ん坊の如きは只泣くばかりで、何が何だかさっぱり判らないので母親として只困るばかりである。先ずそれから書いてみるが、生まれたての嬰兒に多いのは消化不良という青便や泡便が出る病だが、之は消化不良というよりも母親の毒素が乳に混つて出るので、つまり親の毒が子を通じて淨化される譯だから実に結構なのである。從而放つておけば出るだけ出て必ず治るものであるが、それを知らない医療は乳児脚氣などと稱し薬毒を使うから反つて弱つたり発育不良となつたりする。之が將來虚弱児童や腺病質の因となり年頃になると結核になり易いので、近來結核の増えるのも右のような誤りが大いに原因しているのである。

又生後間もなく種痘をしたり何々の予防注射とか栄養の為とかいって注射をするが、之が又頗る悪い。何しろまだ体力が出来ていないから注射等は無理である。此為多くは發育不良の原因となり、よく誕生すぎても首がグラグラしたり、歩行が遅れたり知能も低かったりするのは皆これが為で、医家に対し此点一層の研究を望むのである。處が又斯ういうものも偶にはある。それは生後一・二ヶ月終った頃嘔吐する幼児で、医診は胃潰瘍等と言うが、之は滑稽である。何となれば胃潰瘍は消化薬連続服用の結果であり、此方の原因は出産前後、母親の古血を呑んだのを吐くのであるから、其後食欲も増す事である。

それから少し大きくなってから発り易いものとしては百日咳・チフテリア・脳膜炎・麻疹・日本脳炎・猩紅熱・疫痢・小児麻痺等であろう。それに就いて之から書いてみるが、先ず百日咳であるが、此原因はやはり出産前の母の悪露を呑んだ為で、それが一旦吸収され保有していたものが時を経て浄化によって出るので、何よりも此病に限って猛烈な咳と共に必ず泡を吐くのである。そして百日咳の特徴は咳する場合必ず息を引く音がするからよく分る。つまり泡を出し切る迄に百日位かかるからその名がある譯だが、浄靈によれば発病後間がなければ三週間位かかり、最盛期なら一週間位で全治するのである。急所は胸が第一・背中が第二・胃部が第三と見ればいい。即ち其辺に泡が固まっているのである。此病はよく肺炎を起し易いが、之は咳を止めようとすから溶けた泡が一旦肺に入り咳によって出るのが順序であるのに、其咳を止めるから泡が出ず肺の中へ溜り固まるので溶かす為の高熱が出る。それが肺炎であるから言わば百日咳だけで済むものを誤った方法で肺炎という病を追加する譯である。

次にチフテリアであるが、之は喉に加答児が出来其部が腫れて呼吸困難になり遂に窒息するという恐ろしい病気である。医学は臨床注射や予防注射をするが、之は一時的浄化停止で相当効果はあるにはあるが此注射薬は猛毒とみえて、悪性の病気が起こり易く而も非常に治り悪いので生命に及ぼす場合さえよくある。處が吾々の方では此病気は特に治り易く浄靈するや早いのは十分遅いのも三・四十分で全治するので、実に奇蹟的である。而も薬毒等の副作用がないから安心である。チフテリアの原因に就いては靈的が多いから後に譲る事にする。

次に脳膜炎であるが此症状は発病するや前頭部に火のような高熱が出ると共に、割れるような激痛で眩しいのと眩暈で患者は目を開けられないので、之だけで脳膜炎とすぐ判るのである。此原因は毒の多い子供が物心がつくに從って頭脳を使うから、頭脳に毒素が集中する。それが前頭部であつて学校へ行くようになる猶更そうなるから、事実も其頃起り易いのである。處が茲に見逃し得ない問題がある。というのは熱を下げようとして極力氷冷するから折角溶けかかった毒素を固めて了うので頭の機能の活動は阻止され、治つても白痴や片輪になるので特に恐れられるのである。處が浄靈によれば毒素が溶けて目や鼻から血膿になって沢山出て了うから、頭の中の掃除が出来反つて頭脳は良くなり、例外なく子供の学校成績優良となるのである。従つてそこに気が付きせめて氷冷だけでも廃めたら如何に助かるであろうといつも思つのである。

麻疹は衆知の如く生まれてから罹らない人は一人もあるまい程一般的の病気であるが、此原因は親から受継いだ毒血の排除であるから実に有難いもので寧ろ病気とは言えない位である。それを知らないか

ら無暗に恐れ、当局等も予防に懸命であるが全く馬鹿々々しい努力である。故に麻疹は何等の手当もせず放って置けば順調に治るものである。それを余計な事をして治せなくしたり、生命迄危なくするのである。只此病気に限って慎むべきは発病時外出等して風に当てない事である。というのは麻疹の毒が皮膚から出ようとすることを止めるからで、昔から言われている『風に当てるな蒲団被って寝ておれば』とは至言である。というのは発疹を妨げられ毒が残るからで、再発や他の病原となるので注意すべきである。そうして麻疹は人も知る如く肺炎が最も発り易いが之は氷冷等間違つた手当をする為で、麻疹は外部に出ず内部を冒す事となり肺胞全体に発疹する為で、肺の量が減るから頻繁な呼吸となるが、其割に痰が少ないのはそういう譯である。此肺炎も何等心配なく放っておけば二・三日で必ず治るものである。又麻疹が治ってもよく中耳炎や目が悪くなる事があるが、之は毒の出損なつた分が耳や眼から出ようとして一旦其部へ固まり高熱で溶けるのだから、放っておけば日数は掛かっても必ず治るものである。

次は日本脳炎であるが、此原因も簡単である。子供が夏日炎天下に晒されるので頭脳は日光の刺戟を受けて背中一面にある毒素が後頭部目掛けて集中する。其課程として一旦延髄部に集結し高熱で溶け液体毒素となり後頭部に侵入する。其為眠くなるのであつて、其他の症状も多少はあるが右の液毒は脳膜炎と同様目と鼻から血膿となつて出て治るのである。何よりも発病するや忽ち延髄部に棒の如き塊りが出る。之はいくら溶かしても後から後から集注して来るから、浄霊の場合根気よく二・三十分置き位に何回でも浄霊するのである。すると峠を過ぎるや目や鼻から血膿が出始める。それが治る第一歩で驚く程多

量な血膿が出て治つて了う。先ず数日間と見たらよからう。之で見ても此病気は何等心配は要らないのである。處が医学は原因も判らず毒を出す方法もないから無暗に伝染を恐れる。之も脳膜炎と同様氷冷が最も悪く其為長引いたり命に関わつたり、治つても不具になるのである。近來医学で蚊の媒介としているが、之は怪しいものである。然し吾々の方では簡単に治るのだから、そんな事はどちらでもいい譯である。

猩紅熱もヤハリ簡単な病気で原因は先天性保有毒血が皮膚から出ようとすること、一時患部の皮膚は眞つ赤になつて細かい発疹が出る。重いのは全身に及ぶが大抵は局部的か半身位である。之も放って置けば治るが、医療は氷冷や色々の手当をするので、長引いたり危険になつたりするのである。此の病気は治りかけた時毛細管から滲出する毒が乾いて細かい瘡蓋になり、之が伝染の危険多しとして非常に恐れるが、浄霊によれば二・三日乃至一週間位で全治するのだから問題ではない。

疫痢は割合多い病気で且死亡率も高いから最も恐れられているが、此症状は最初から頻繁な欠伸が特色で全然食欲もなく、グツタリして元気がなく眠りたがる等それらの症状があれば疫痢と見ていい。此原因は上半身にある殆どこの毒素が浄化によつて胃へ集まり、それが脳に反映して脳症が起り易いので医師は恐れるのである。然し浄霊によれば実に簡単に治り一日か二日で全治する。

小兒麻痺も近頃は仲々増えたようであるが最近法定伝染病の中へ入れた位である。然し此病気は日本よりアメリカの方が多きようである。之も人の知る處である。此原因は靈的と体的とあるが、靈的の方は滅多になく世間一般小兒麻痺というのは体的の方で、言わば擬似であり必ず治るものであり、症状は足が満足に歩けないとか片手

が利かないとか腰が動かない等であるが、其中足の悪いのが一番多いようである。此原因は遺伝薬毒と生後入れた處の薬毒の爲で、どちらにしる其薬毒が足の一部に凝結するので、足をついたり動かしたりすると痛むものである。特に足の裏が多いが此診断は譯はない。足や手全体を順々に押しつてみれば必ず痛い所があるから其處を淨靈すればズンズン治つてゆく。處が医療では一耗の毒も除る事が出来ないから、苦し紛れに色々な手当をするが、先ず気休め程度で本当に治るのは一人もないという譯で、世界的恐るべきものとされているのである。

そうして靈的の方は眞症で仲々深い意味があるから之は後の靈的事項中に詳記する。以上の如く小児に關した病氣は大体書いたつもりであるが、追加として二・三の心得置くべき点を書いて見よう。

先ず子が生まれるや淋毒を予防する爲として眼に水銀注射をしたり、昔からよくマクニンなどを服ますが、之も異物であるから止した方がよい。乳も成可親の乳を吞ませるようにし母親の乳だけで不足する場合は牛乳やミルクを吞ませてもよいが、親の乳が出ないという事は何処かに故障があるからで、それは毒結が乳腺を圧迫している場合と胃の附近にある毒結が胃を圧迫し胃が縮小しており、其為食事は親の分だけで子の分まで入らないという此二つであるから、どちらも淨靈で速やかに治るのである。それからよく赤子の便が悪いと曩に書いた如く母親が乳児脚氣の爲などと言われ乳を止めさせるが、之は誤りで親の保有毒素が乳に混じつて出るのであるから寧ろ結構である。次によく微熱が出るると智慧熱とか齒の生える為等と言つがそんな事はない。ヤハリ毒の爲の淨化熱であるから差支えない。又乳は誕生頃迄よく、誕生過ぎてても平気で吞ませる母親もあ

るが、斯ういう児童はどうも弱いから注意すべきである。又良く風邪を引いたり扁桃腺等で熱が出るが、之も淨化であるから結構でそれだけ健康は増すのである。それから寝冷えを恐れるが寝冷え等という言葉は滑稽である。下痢などの場合眞の原因が分らないから作つた言葉であらう。だから私の子供六人あるが、生れてから一人も腹巻はさせないが十年以上になつた今日一人も何の障りもない。又私も三十年來腹巻をしないが今以て何ともないのである。

總論

私は之迄病氣に対し、詳細に直接的解説を与えて来たから病氣なるものの眞原因と既成医学が如何に誤つていゝかが分つたであらうが、まだ知らなければならぬ点が種々あるから、之から凡ゆる角度から医学の實體を検討し解剖してみようと思つのである。

手術

近來医学は進歩したと言ひ、取り分け手術の進歩を誇稱しているが私から見れば之程の間違ひはあるまい。考ふる迄もなく手術が進歩したという事は實は医学が進歩しないという事になる、と言つと不思議に思つであらうが、手術とは言つ迄もなく病に冒された機能を除去する手段であつて、病其ものを除去する手段ではない。判り易く言えば病氣と其機能とは密接な關係はあるが本質は異つてゐる。従つて眞の医学とは病だけを除つて機能は元の俣でなくてはならない筈である。處が医学は如何に進歩したといつても病のみを除き去る事が不可能であるから、止むを得ず二儀的手段として機能をも併せて除去してし

まうのであるから、此事を考えただけでも手術の進歩とは医学の無力を表白する以外の何物でもない事が分るのである。斯んな分り切った理窟でさえ気が付かないとしたら今日迄の医学者は驚くべき迷蒙に陥っていたのである。従って何としても大いに覚醒して初めから行り直すより外あるまい。即ち医学の再出発である。處が今日迄其意味を發見した者がなかつたが為、盲目的に邪道を驀進してきたのであるから、何年経つても人類は病氣苦惱から解放されないにみて明らかである。

以上の意味に於て考えてみる時手術の進歩とは医術の進歩ではなく技術の進歩でしかない事が分るのである。そして尚深く考えて貰いたい事は造物主即ち神が造られた万物中最高傑作品としての人間であるとしたら、假にも神として人体を創造する場合、五臟六腑も胃も筋肉も皮膚も何も彼も無駄なものは一つも造られていない筈である。之は常識で考えても分るのである。處が驚くべし、二十世紀に入るや人間の形はしているが神以上の生物が現われた。其生物は曰く人体内には種々な不要物がある、盲腸も片方の腎臓も卵巣も扁桃腺もそうであるから、そんな物は切つて除つて了う方がいい。そうすればそれに関した病氣はなくなるから安心ではないか、と云つて得々としてメスを振つては切り除つて了うのである。何と素晴らしい超人的否超神的存在ではなからうか。處が不思議なる哉、此大膽極まる暴力に対し現代人は無批判處か隨喜の涙を零している。而も人民はおろか各国の政府迄も有難がつて、之こそ文化の偉大なる進歩であると心酔し援助し奨励迄しているのであるから、其無智蒙昧さは何と言つていいか言葉はないのである。としたら此現実を見らるる流石の造物主も呆れて啞然とされ給つと察せらるるのである。

そうして右の超神的生物こそ誰あろう近代医学者という人間である。としたら全く彼等の人間を見る眼が強度の近視眼に掛かつており、近くの唯物科学だけが見えて其先にある黄金の宝物が見えないのであろう。

然し私は唯物科学を敢えて非難する者ではない。人類は之によつて如何に大なる恩恵を蒙り今後と雖も蒙るかは最大級の讃辞を捧げても足りない位である。といつて何も彼もそう考える事が早計であつて唯物科学にも自から分野があり、越えてはならない境界線がある。ではそれは何かと云うと有機物も無機物も同一視する單純な考え方では駄目であるという事である。つまり唯物科学は生物である人間も他の動物も、無生物である鉱物や植物とを混同している錯覚である。というのは本来動物なるものは無生物ではないから唯物科学の分野に入れてはならないに拘わらず、どう間違えたものか入れて了つた事である。之が根本的誤謬で、それによつて進歩して来た医学であつてみれば、手術という人体を無生物扱いにする行り方も当然である。又斯ういふ点も見逃す事が出来ない。それは唯物科学の進歩が余りに素晴しかった為、何も彼も之によつて解決出来るものと信じて了つた科学至上主義である。處が實際上動物はそうはゆかない。成程医学によつて一時的には効果はあるようだが根本が間違つている以上眞の効果が挙らないにも拘わらず、それに気付かず相変わらず邪道を進みつつあるのである。

そうして右の如く私は生物無生物の關係を大体書いて来たが、今一層掘下げて見れば、生物の中でも人間と他の動物とを同一視してはならない事である。といつてもこれは根本的ではない相当の異いさがある。例えば人間に対して結核と言えば直に神経を起し悪化したり死を早めるが、牛の

結核を牛に言っても何等影響もないのである。従つてモルモットや二十日鼠を研究して人間に應用しても決して良い結果は得られないのである。

茲で前に戻つて再び手術に就いて筆を進めるが、成程一時手術によつて治つたとしてもそれで本當に治つたのではないから、暫くすると必ず何等かの病気が発生するが医学では其原因に気が付かないのである。そんな譯で手術後の先には余り関心を持たないのである。

然し考えてもみるがいい、体内の重要機能を除き去したとすれば言わば体内的不具者となるのであるから、全然影響のない筈はない。例えば外的不具者で足一本手一本處か指一本舌指の頭だけ欠損しても、其不自由さは一生涯の悩み種である。況んや内的不具者に於ておやである。而も外的不具者なら生命に關係はないが内的のそれは生命に至大の關係があるのは当然である。例えば盲腸の手術で虫様突起を失つとすればどうなるであろうか。元來盲腸なるものは重要な役目を有っている。それは人間の背部一面に溜つた毒素が一旦右側腎臓部に溜つて固結し、少しずつ盲腸部に移行固結するが、或程度に達するや急激な淨化が起り発熱・痛み等が発生し、溶解された毒素は下痢となつて排除され、それで治るのであるから実に結構に出来ている。處が可笑しいのは此際医師は手遅れになると大変だから一刻も早く手術せよと言つが、此様な事は絶対ないので、手遅れになる程反つて治る可能性が多くなる。之は理窟ではない、私は何人も其様にしたが一人の間違ひもなかつたのである。寧ろ手術の為不幸になつた例は時偶聞くのである。

又盲腸炎潜伏を知るには譯はない。医学でも言つ通り臍から右側斜めに一・二寸位の辺を指で押すと痛みがあるから直ぐ判る。然し原因は其奥にあるので盲腸部だけ

の淨靈では全部の痛みは除かれぬ。盲腸炎の場合右側腎臓部を指で探ると必ず固結があり、押すと痛むからそこを淨靈するや忽ち無痛となり全治するのである。治るまでに早ければ十数分遅くとも三・四十分位であつて、間もなく下痢がありそれで済んで了つので、再発等は決してないとしたら何と素晴らしい治病法ではなかつたか。處が医学では手術の苦痛も費用も並大抵ではない。其上不具とされ運の悪い人は手術の跡の傷が容易に治らず数年掛かる者さえある。希には手術の為生命を失う者さえあるのだから我淨靈と比較したら其異いさは野蠻と文明よりも甚だしいと言えよう。

處が手術によつて盲腸炎は治つたとしてもそれだけでは済まない。前述の如く盲腸なる機能は背部一面の毒素の排泄機關であるから、それが失くなつた以上毒素は出口がないから大部分は腹膜に溜ると共に腎臓部の固結も大きさを増すから、それが又腎臓部を圧迫し腹膜炎に拍車を掛ける事になる。之が主なる悪影響であるが、其他の個所にも溜るのみか手術後腹力や握力が弱り、持久力や粘り強さなども薄くなり性慾も減退する。之などは体験者の知る處であらう。

次は腎臓別あるが、此手術は腎臓結核であつて痛みや血尿があるのでそう決められ剔出するが此成績も面白くない。大抵は何かしら故障が起る。その中で一番困るのは残っている一つの腎臓は二つの負擔を負されるから病気が起り易いと供に、剔出する事も出来ずどうしていいのか判らないと言つ滲めな人もよくある。というのは誰しも保有毒素が相当あるから残つた腎臓へ溜結するのである。その外全身的には弱体化し歩行にも困難があり腰を捻つたり正座すら出来ない人もあつて、先ず半分癱人である。處が最初から淨靈によれば手

も触れずして簡単に全治するのである。

次は胃癌の手術であるが之も仲々厄介である。之に付いて遺憾に思う事は、切開して見ると癌が見当たらないという過失をよく聞くが患者は全く災難である。幸い予定通り切り除つても大抵は時日が経つと、僅かでも残つた癌が広がつてゆき再度の手術をするようになるが、二度目になると不可能で最早致命的である。そうして手術が成功しても縮小した胃と腸と繋ぎ合すので食物を少しづつ何回も攝らねばならず、而も医学の統計によれば手術後の寿命は平均二年半とされている。それに就いて医学は斯う言うのである。どうせ半年か一年で死ぬべものを手術によつて一年でも二年でもびるとしたら、それだけ有利ではないかと。成程其通りにゆけばいいが事実は放つておけば三年も五年も生きられるものを手術の為に縮められる例を、私は幾人とも経験したのである。又医学は癌の治療にラデュームの放射をするが之は反つて悪化する。というのはラデュームは癌を破壊すると共に組織迄も破壊してつうからである。

右の解説は眞症胃癌に就いてであるが、実は眞症は少なく大部分は擬似胃癌であり擬似は勿論薬毒が原因である。それは薬の性質によるが一旦吸収された薬は時を経て毒に変化し胃へ還元し固まる。それが癌とされるのであるから之は浄霊によれば非常に衰弱していない限り必ず治るのである。右の外卵巢除去・乳癌の手術・中耳炎・瘍疔・眼科・肋膜炎の穿孔・痔疾・横痃・睾丸炎・疽・脱疽・整形外科手術等々種々あるが、之等も大同小異であるから略すが、茲に一・三の書き残しを書いてみよう。それは各種の腫物であるが、之は手術をせず放つておけば腫れるだけ腫れて自然に穴が穿き、そこから血膿が出て完全に治つて了つものである。處が患者は痛

みに堪え兼ねるので医療は早く治そうとして手術するが、之が大変な誤りである。というのは手術にも時期がある。充分腫れてからなら左程の事もないが、そうならぬ内に行つと、今迄一か所に集中していた膿は其運動を止めて了い、他の近接部へ腫れ出すのである。之は手術處か一寸針で穴を穿けた位でも、ヤハリ集溜が停止されるので之は知つておくべき重要事である。之に就いて斯ういふ例があつた。以前私は頼まれて某外科病院へ行つた事がある。患者は四十才位の男子でよく訊いてみると初め頸部淋巴腺に鶏の卵位の腫物が出来た。早速医者へ往つて穴を穿け膿を出して貰つと間もなくお隣りへ同じような腫物が出来た。それを切ると又お隣りへ出来るといふ具合、遂に反対側の方にも出来、それも次々切つたり出したりする内、遂には腫物の数珠繋ぎとなつて私を招んだのである。そんな譯で外部には腫れる場所がなくなつたので今度は内側へ腫れ出した。恰度其時であつたので、私と雖もどうする事も出来ず断つて辞したが、其後数日を経て咽喉が腫れ塞がり、窒息で死んだとの知らせがあつた。之等は全く手術の為の犠牲者であるといふのは最初腫物が出来た時、放つておけば段々腫れて恐らく赤子の頭位に大きくなつたであろうが、それでも放つておけば終いには眞つ赤にブヨブヨになつて穴が穿き、多量の血膿が出て完全に治つて了い痕跡も残らないのである。

次は近来一部の医師で脳の手術をするが、之等は勿論癲癇とか脳疾患等の場合行つのであるが、之は何等の効果もない。何故なれば頭脳の機質性病患でなく精神的のものであるからで、つまり霊的原因である。之に就いては霊の項目に詳記するから茲では略する事とする。次は近頃流行の結核に関する手術療法で、之は肋骨を切り除つたり空洞のある患者には合成樹脂の玉

を入れたり横隔膜を手術したりするが、之等は一時的効果で反つて後は悪いのである。要するに再三言う通り手術なるものは如何に有害無益なものであるかは医学が一層進歩すれば分る筈であるから、最初に述べた如く手術の如き野蠻的方法は是非全廃して貰いたいのである。

薬毒の種々相

凡ゆる病原が薬毒である事は充分納得出来たであろうが、單に薬毒と言っても非常に多くの種類がある以上、それによる症状も自ら千差万別であるのは言う迄もない。それ等に就いて詳しく書いてみよう。

先ず洋薬であるが、之にも服薬・注射・消毒薬・塗布薬等種類があるから、先ず服薬から取上げてみるが之は昔から一番多く用いられており、其種類も何千何万あるか数え切れない程あつて、気が付いてみれば之等も可笑しいのである。何故なれば如何なる病氣と雖も其原因は一つであつて、其現われ方の局部によつて種々なる病名が付くのであるから、本当から言えば効く薬なら唯つた一つでいい譯である。

處が右の如く多数あるという事は全く眞に効く薬がないからである。そうして口から服む薬は強すぎると口が荒れたり中毒したりするから、大いに弱めたと云う上、何しろ一日数回で何日何十日何百日も服むとしたら、幾ら少ない毒素でも相当の量に上がるのである。そうして面白い事には洋薬による苦痛は鋭い痛み・痒み・高熱・麻痺等凡て強烈であるが、漢薬の苦痛は鈍痛・重懈さ・微熱等で緩慢的である。又疫痢に対する蓖麻子油とか便秘に用いるカスカラ錠とか其他色々な新しい薬もあるが、成程一時は効くが結局は悪くなる。下剤も糞便処理の機能を弱らせるから一層

便秘する事になる。又下剤を服むと便秘するとうように鼯鼠ゴッコになり遂に慢性便秘症となるのである。而も僅かずつでも其薬毒が溜る以上他の新しい病原となるが、此為の病氣は腎臓が多い。又腸を掃除するといつて下剤を服ませるが、之等も実に馬鹿馬鹿しい話で掃除はチャンと腸自体が具合よくするのだから、余計な事をして妨害するから良い譯はないのである。言う迄もなく不潔不必要なものが溜れば腸は下痢にして出すように出来ている。疫痢等も私の長い経験上蓖麻子油を服まない方が結果がいいのである。茲で浣腸に就いても注意したいが、之も非常に悪い。ヤハリ之も下剤と同様腸の活動を鈍らせるからである。考えてもみるがいい、糞便という汚物が溜れば自然に肛門から出るように出来ている。それなのに外部から誘導して出すなどは何たる反自然的行為であろうか、考える迄もなく駄目に決つてゐる。又よく下熱手段として浣腸を行うが之は熱と糞弁とは何等関係ないからである。以前斯ういう患者を扱つた事がある。それは三才の男児で腹が太鼓のようになつてゐる。訊いてみると生れて早々から浣腸を続けて来たので段々癖になり、浣腸をしなければ便が出ないようになつて了つたので、遂悪いと知りつつも余り苦しがるので、止める事が出来ないといつので、私は医学の無智に呆れたのである。今一つは医学は便秘すると自家中毒を發するとよく言われるが、之等も全然意味をなさない。医学は便が溜ると便毒が身体中に廻るように想うのだから、実に滑稽である。便はどこに溜つても便の袋以外に滲出するものではない。溜れば溜る程段々固くなるだけであるから、何程溜つても健康に些かも支障はないのである。私の経験から言つても一・二ヶ月はザラで、酷いになると半ケ年も出ない者があつたが何ともなかつ

た。以前或婦人雑誌に出ていたが、二ヶ年もの人があったそうだが何ともなかったと言ふ事である。之で見ても便秘は心配ないのである。

次に寒冒・結核・胃腸等に関する薬剤は既に述べたが、其外脳に対する鎮静剤・点眼薬・含嗽薬・利尿剤・毒下し・温め薬・強壯剤・増血剤・風邪引かぬ薬・咳止・痛み止等々、凡ゆる薬剤は悉く病氣増悪の原因となつて病氣を治し得るものは一つもないのである。それに就いて種々な実例を示してみるが先ず頭脳に用いる鎮静剤等一時は一寸効果を見せるが、遂には癖になつて不知不識の裡に其余毒が溜り種々な病原となる。又点眼薬は最も不可で、目星等でも固めて了うから反つて治り難くなる。又世人は知らないが、点眼薬はトラホームの原因ともなるから注意すべきである。之は点眼薬にもよるが、事実は眼瞼の粘膜へ薬毒が滲透し年月を経て発疹となつて出ようとすることからである。又悲しくもないのに常に涙の出る人は点眼薬が時を経て涙に変化したものであるから、出るだけ出れば自然に治つて了う。處が医学は涙囊の故障等と言ふが見当違いも甚だしい。又目脂は前頭部の毒素又は眼の奥の浄化によつて排泄されるものであるから、非常にいいので何よりも如何なる眼病でも目脂が出るようになれば必ず治るのである。次は鼻薬であるが、鼻薬の中特に恐るべきはコカイン中毒である。よくコカインを吸う癖の人があるが、一時爽快なので止められなくなり長い間に脳を冒して夭折する人も少なくないが特に芸能人に多いようである。

次に含嗽薬であるが、之は極稀薄な毒ではあるが始終用いていると口内の粘膜に滲透し毒素となつて排泄する時、粘膜が荒れたり加答児を起こしたり舌がザラザラしたり小さな腫れ物等出来たりするから

廃めた方がいい。特に咽喉を使う芸能人には最も悪い。又一般水薬に就いても同じ事が言える。長い間にヤハリ粘膜から滲透した薬毒は右と同様になるが、薬が強い為悪性である。而も意外な事には舌癌も之が原因である。處が医学は薬で治そうとするから病を追加する譯である。又薬入り歯磨等も歯を弱める事甚だしいのである。

次は塗布薬であるが之も仲々馬鹿にはならない塗布薬の毒素が皮膚から滲透して種々の病原となる事がよくある。以前斯ういう患者があつた。最初身体の一部に湿疹が出来た處、医師は悪性として強い塗布薬を塗つたので段々拡がり二・三年の内には全身に及んで了つた。それまで有名な病院に掛かつていたがもう駄目だと言われ私の所へやつて来たのであるが、私は一日見て驚いたのは身体仲隙間もなく紫色になつており、所々に湿疹が崩れ汁が流れており、痒みよりもそれを打消す痛みの方が酷いそうで、夜も眠れないという始末なので、流石の私も見込みなしとして断つたが、それから一・二ヶ月後死んだそうである。

又斯ういう面白いのがあつた。此患者は肩や背中が凝るので、有名な或膏薬を始終貼つていた處長年に及んだので、膏薬の跡が背中一面幾何学的模様のやうになつて了い、いくら洗つても落ちないという事であつた。それは膏薬の薬毒が皮膚から滲透して染めたようになつて了つたので、而も絶えず相当痛みがあるので私も随分骨折つたが、余程強い為と見えて一年位で大体治つたが、たかが膏薬等と思うが決して馬鹿にはならない事を知つたのである。

今一つ全然世人の気の付かない事がある。それは有名な仁丹で此中毒も相当なもので、之は幾人もの例で知つた事だが、仁丹常用者は消化機能が弱り顔色も悪く病気に罹り易くなる。今日問題となつて麻薬中毒の軽いようなものである。

茲で薬毒中の王者とも言つべき物を一つ書いてみるが、それは彼の驅黴剤としての六〇六号一名サルバルサンである。之は砒素剤が原料となつてゐる位で耳搔一杯で致死量となる程の劇薬であるから浄化停止の力も強いので、梅毒の発疹等にはよく効く譯である。勿論浄化によつて皮膚へ押し出された発疹であるから、一度サルバルサンを注射するや症状は忽ち引込むという譯で、一時は綺麗になるが根本的ではない。之は医学でもサルバルサンは一時的に他の驅黴療法を併せ行わねばならないとしてゐる通りであらう。

之に就いて私は大発見をした。というのはサルバルサンの薬毒は頭脳に上り易く、上ると意外にも精神病になる事が多いのである。すると医診は梅毒が脳に上つたと思うが何ぞ知らん、實際はサルバルサンが脳を冒したのである。之は専門家諸君に於ても此理を心得て充分研究されたら分る筈である。

次に一般注射に就いての誤つた点であるが、注射と雖も一時的浄化停止であるから効果も一定期間だけであるが、副作用がなければ結構だが其余毒は他の病原となるから厄介である。斯うして近来伝染病に對し夫々の予防注射を懸命に行つてゐるが、遺憾乍ら伝染病の根源は不明であり治す方法もないから止むを得ないとしても、予期の効果は仲々得られ難いのである。處が我浄靈法によれば梅毒も伝染病も至極簡単に治るのだから、之の一般に知れ渡つたとしたら予防注射の必要等は全然なくなり大いに助かるのである。茲で予防注射による弊害を書いてみるが、先ず予防注射による薬毒の悪影響が最も明かに表われるのは膝から下に小さな腫物が出来る事である。之も放任しておけば或程度腫れて自然に穴が穿き膿化した注射薬が出て治るのであるが、それを知らない医学は塗布

薬を用いたり切開したりするので長引く事になる。而も注射によつては脱疽や疽の原因ともなり指を切られる事さえある。而も運の悪い人はそれが因で生命に迄及ぶ事さえ往々ある。以前私はそういう患者を扱つた事がある。四十才位の人妻で注射の薬毒が足首へ垂れて腫物となつた處、医療は切開したので仲々治らず益々悪化し激痛も加わり拡がって行くので、医師は足首と膝との中間を切断するより方法がないといつので躊躇してゐた處、私の話を聞き訪ねて来たのである。何故それ程悪化したといつと全く切開後使用した消毒薬の爲である。

茲で消毒薬に就いて説明してみるが、之は薬毒中最も恐るべきものである。元來消毒薬とは殺菌力が非常に強いので中毒を起し易く、而も手術の場合直接筋肉に滲透するから猶更影響も大きい譯である。故に之が為種々の病原となるので此理と實際とを医家は照らし合せて貰いたいのである。

右の例として今も記憶にまざまざ残つてゐるものに斯ういふのがあつた。七・八才の女兒珍しい病氣との事でその家に招かれた處、一目見て驚いたのは患者は右側の唇から頬へかけて鶏卵大位頬が歎損してゐて歯茎まで丸見えである。勿論食物を口へ入れても出て了うから、僅かに牛乳を流し込むようにして漸く生きてゐるといふ始末である。其原因を訊いてみて二度吃驚した。といふのは最初口辺に小豆粒位の腫物が出来たので医師に診て貰つと、之は水癌といふ非常に悪性なものだから強い薬で焼いて了はなくてはいけないと言つて其様にした處、一週間で右の如く焼け切れたといふのである。察するに消毒薬ではないが余程強い薬であつた為であらうが、手のつけようがないので私は断つて歸つたが、それから一ヶ月程経つて死んだとの

事であるが、之等も実に考えさせられるのである。そうして注射薬にする消毒薬にする目方の重い軽いがあつて、重い程下降し最も重いのは膝から下、足の裏側迄垂れて来て固まる。そうなると足の裏が痛くて地につけないで歩行困難となる。又薬によつては下降して膝から下に溜り痺れるので脚氣とよく間違えられる。其他神経痛・リヨウマチスの原因も薬毒であるから、私は何よりも先ず薬毒の恐るべき事を専門家に自覚させたいので、之だけでも人類に与える福祉は蓋(けだ)し計り知れないものがある。

人形医学

私は今迄現代医学に於ける凡ゆる誤謬の点を指摘して来たが、茲で最も重要な点は人間をして人形扱いにしている事である。というのは医学には種々の科目がある。内科・外科・脳神経科・泌尿器科・皮膚科・婦人科・小児科・眼科・耳鼻咽喉科・歯科というように夫々専門部門に別れている。又右の科目中内科にしても結核・胃腸病・心臓病等夫々専門的に分れている。そうかと思つと基礎医学と稱し学問的研究にのみ一生涯没頭している人もある。彼らのみ一生涯没頭している人は誰も知れる處で、其他臨床専門で讀んで字の如く直接病人の脈を年中取つてゐる人もある。又予防医学と言つて主に伝染病予防をはじめ社会衛生・個人衛生等に専念している人もある。次に療法に於ても色々の種類がある。薬剤の服用・注射は固より、手術・電気・マッサージの外光線療法・物理療法・精神療法等々があるかと思えば、皇漢医術あり各種の民間療法あり禁厭・祈祷・

宗教による事もある。ザツト数えただけでも右の通りであるから実に複雑多岐、種類の多い事驚く程である。此様になつた原因は全く本当に治るものがなかつたからで、若し眞に治る療法があつたとしたらそれ一つで解決がついている筈である。

そうして医学の最も間違つてゐる点は人体を人形と動揺に見る事である。というのは抑々人体なるものは一個の綜合体であつて、四肢五体はバラバラのものを繋ぎ合せて作られたものではない。従つて一部分に病氣が発るといふ事は其部分だけではなく各部分に關聯があるのである。例えば手足が悪いといふ事は手足だけが悪いのではなく、手足以外の他の部分即ち甲の部分に原因があり、それが乙に移り又丙に表われるといふように何処迄も連繫してゐる。假に齒が弱いといふ事は全身が弱いからで、全身が弱いまま歯だけ丈夫にする事は絶対不可能である。女性の結核患者の病氣が進むと必ず無月經となるが、之も結核による貧血の為であり、腸が弱い人は必ず胃が弱く、胃の弱い人は肺が弱く、肺の弱い人は心臓が弱いといふように何処迄も相互關係である。一番判り易い例は假に人間を一国家としても判る。其国家の政府の政策が悪ければ国民全般が悪影響を受けると同様、人体の中央政府である心臓が悪いとしたり身体全部が悪くなる。国家が不景氣・金詰り物資不足等といふのは人体なれば栄養不足で貧血状態といふ譯である。そうして單なる痛みと雖もそれが頭腦を刺戟し心臓に影響するから胃にも影響し食慾不振となり、腸が弱り便秘・疲労等全身的に影響を及ぼすのである。又肺炎に罹るや若し肺のみの病氣とすれば肺だけの熱で他に影響はない筈だが、實際は其熱の為全身的に苦痛が及ぶに見ても明かである。

次に数種の実例を書いてみよう。

(一)二十才位の女性、右の歯が非常に痛むので浄霊した處、まもなく痛みは止まったが翌日又痛いと言つて来た。普通の歯の痛みなら一回で治る筈だが、まだ治らないのは他に原因があると思つて、歯の下部から順次下方へ向つて押してみると、胸部に固結があり痛いと言つので其固結を溶かすと直に治つたが、翌日又来てまだ痛いという。私は不思議に思つて尚下部へ向つて段々押してゆくと、盲腸部が非常に痛いと言つのでそこを浄霊した處、それですっきり治つたので訊いてみると以前盲腸を手術したという。それで判つた事は其時の消毒薬が固結し浄化が起つてそれが胸部を通つて歯茎から排泄しようとした其痛みであつた。之にみても歯痛の原因が盲腸部であつたと言つ事は実に想像もつかないのである。

(二)二十幾才の男子、結核三期で咳と痰が非常に出るのでいつもの通り頭・首・肩等を浄霊したが、余り効果がないのでよく調べた處、意外にも両股・鼠蹊部にグリグリがあつて、そこが可成の発熱があり押すと非常に痛いと言つ。ハハアア之だと思つて其處を浄霊した處一ヶ月位で全治したのである。その時私は「君の肺は股についていたんだね。」と言つて笑つたのである。處がそれに就いて面白い事があつた。有名な某医学博士に此話をした處、首を傾けているので『じゃあ試しに貴方の股を診てあげましょう』と言つて仰臥させ押した處、小さいグリグリがあり微熱もあるので浄霊するや忽ち咳と痰が出たので啞然として不思議の一語より出なかつた。某医博は今でも某大学の教授をしている。

(三)中年の男子、膽石病で苦しんでいたので右背面腎臓を見ると大きな固結があ

るので、之だと思つて数回に亘つて溶かした處それで治つて了つた。

(四)脱肛や痔核で苦しんでいる人の股を診ると、必ずグリグリがある。それを溶かすと治るので原因は股にある事を知つたのである。處が痔出血や赤痢の原因は頭部の毒血が溶解下降する為であるから、何よりも頭部を浄霊すれば治ると共に出血後は頭部が軽快になるのでよく判る。

(五)頭痛・頭重・精神集中力が乏しい人は左右何れかの頸部淋巴腺又は延髄部に必ずグリグリがあつて、そこに発熱がある、それを溶かすと直に治る。

(六)目の悪い人は延髄部を主に頸部から肩にかけて固結があり、又前頭部に必ず発熱がある。そこを浄霊すると軽い眼ならそれで治る。私は手術をしない眼ならば大抵は治ると言つが、今日迄盲目を幾人となんか全治したからである。近眼及び乱視等延髄部の固結を溶かせば百発百中治る。

(七)盲腸炎は右側腎臓部に必ず固結があり、そこを浄霊すれば治る。又胃でも腸でも原因は背部にあるからそこを浄霊するだけでよく治る。胃痙攣等激痛の際前方から浄霊しても痛みは全部取れないが、背部を浄霊すれば全治するのである。

(八)最も面白いのはヒョウ痘(ヒツシ)である。患部だけ浄霊しても全部痛みは除れないが、頸部をみると必ず固結があるからそこを浄霊すると実によく治る。

以上によつてみても判る如く、病なるものは表面に表れた症状であつて、其因が意外な處にあるものである。それを知らない医学は症状さえ治せば病氣は治るものと

解釈しているので眞の医術ではないのである。

それは全く人間は綜合体であるという事の認識がないからである。何よりも病氣によつて療法が異い薬の種類も数多いという事はよくそれを物語っている。本当に治る医学とすれば一つの方法で万病を治し得る筈である。元來病氣とは曩に説いた如く一種類となつた毒素が各局部に固結するので、言わば病氣の種類とは固結場所の種類である。それが判るとしたら療法も一つとなり進歩の必要もない事になる。何故なれば進歩とは不完全なものを完全にしようとする課程であるからである。

此一事だけにみても現代医学は如何に根本に未知であるかが判るであろう。此意味に於て今迄進歩と思つて来たのは実は外面だけのそれであつて、肝腎な病氣は治らず一つ所を往つたり来たりしていたに過ぎないのである。

凝健康と眞健康

今迄詳しく書いた如く病氣は浄化作用であり、医学は浄化作用停止を治る方法と錯覚して来た意味は判つたであろう。之に就いて今一層徹底的にかいてみるが、世間一般の人が健康そうに見えて兎も角働いている人の其殆んどは、毒素を保有しているから強く固結している為浄化作用が起らない迄である。従つて何時突発的に浄化が発生するか判らない状態に置かれているので、何となく常に不安があるのは此為で恰度爆弾を抱いているよつなものである。少し寒い思いをすると風邪を引きはしないかと心配し、伝染病が流行すると自分も罹りはしないかと案じ、一寸咳が出たり身体が懈かつたり疲れ易いと結核の初期ではなかるうかと神経を悩まし、腹が痛いと

盲腸炎か腹膜炎の初まりではないかと恐怖する。風邪が拗れると結核を心配し、熱が高くてゼイゼイというと肺炎を聯想する。一寸息が切れたり動悸がしたりすると心臓病を懸念し、足が重いと脚氣じゃないかと想つ。眼が腫れボツタイとか腰が重いと腎臓ではないかと疑う。女などは腰や下腹等が痛かつたり冷えたり白帯下が下がつたりすると子宮が悪いのではないかと苦勞し、子供が元気がないと大病が発る前兆ではないかと心配する。というようにザツト書いただけでも此位だから今日の人間が如何に病氣を恐れ怯えているかは想像に余りある。

そうして一度病氣に罹れば医者に行き薬を服むという事は常識となつてはいるが、よくも之程迄に医学を信じさせられたものと感心せざるを得ないのである。とはいふものの私としても昔の自分を考えたら人の事など言えた義理ではない。斯ういう事があつた、確か三十才前後の頃だと思つが、信州の山奥の或温泉場へ行つた時の事だつた。旅館に着くや否やイキナリ女中に向かつて、

私 「此温泉場にはお医者が居るのか」と訊くと

女中 「ハイ一人居ります」

私 「普通の医者かそれとも学士か」

女中 「何でも此春大学を出たという話です」

それを聞いた私は之なら二・三日位安心して滞在出来ると腰を落着けたのである。處が其後世間には私と同じよつな人もあると聞き、私は變つていない事を知つた譯である。又斯ういう事もあつた。人間は何時何処で病氣に罹るか判らないから、そういう場合夜が夜中でも電話一本で飛んで来てくれるよつな親切なお医者さんを得たいと思つていた處、恰度そつうにお医者さんが見付かつたので出来るだけ懇意にし、

遂に親類同様となつて了つた。現在の私の妻の仲人は其お医者さんであつた位だから、如何に当時の私は医学を信頼していたかが判るであらう。

従つて今日一般人が医学を絶対のものと信じているのもよく判るのである。處が其医学なるものは実は病気を治す處か、其反対である事を知つた時の私は如何に驚いた事であらう。然し之が眞理であつてみれば信ずる外はないが、そんな譯で現代人が医学迷信に陥つてゐるのも無理はないと思えるのである。忌憚なく言えば自分自身の体を弱らせ寿命を縮められ乍ら医学は有り難いものと思ひ込み、それに気が付かないのであるから何と情けない話ではないか。従つて此迷信を打破する事こそ救世の第一義であらねばならない。といつても之を一般人に分らせる事は実に容易ならぬ問題である。前述の如く医学迷信のゴチゴチになり切つてゐる現代人であるから、實際を見聞しても自分自身や近親者の難病が淨靈によつて治つたとしても、直に信じ得る人と容易に信じられない人がある。だが大抵な人は医学でも凡ゆる療法でも治らず、金は遣つし病氣は益々悪化する一方で遂に生命さえも危ない結果、中には自殺を計る者でさえ、偶々淨靈の話も聞いても容易に受け入れられない程医学迷信に陥つてゐる現在である。然し絶体絶命の断末魔として茲に意を決し疑い疑い淨靈を受けるが、其時の心理状態は最後に載せる報告も沢山あるから讀めば分るのであらう。

以上は現代人が如何に病気を恐れてゐるかといふ事と、医学を如何に信頼してゐるかといふ事でよくある事だが、一寸風邪を引き熱でも高いと之は大病の始まりではないかと案じるが、其反面之しきの風邪位が何だと打消そうとするが、肚の底では万一の心配も頭を擡げて来る。といふのは誰

しも経験する處であらう。之は全く医学そのものに全幅的信頼を措けないからである。

處が本当に治る医学としたら風邪や腹痛等は簡単に治るし、名の附くような病でも適確に診断がつき、其通りになるべきで如何なる病氣でも之は何が原因で今迄の療法のどの点が間違つてゐるか、どうすれば治るか、予後はどういふ風になるか、命には別状ないかあるかも正に手に取るように判り、病人に告げると其言葉通りになるとしたら誰しも医学に絶対の信頼を拂い、病氣の心配等は皆無となるのは勿論、病氣は淨化作用で体内の汚物が一掃され、より健康になる事が分るとしたら寧ろ楽しみになる位である。といふのが眞の医学である。では此様な夢にも等しい治療法がありやといふ事である。處が驚くべし、之が己に実現して偉大なる効果を与げつつある現在である。そうして吾々の方では病氣とは言われない淨化と言ふ。何と気持ちのいい言葉ではあるまいか、然し事実もそうであるから言つのである。茲で標題の眞健康・凝健康に就いて書いてみるが、凝健康とは前述の如く固結毒素があつても淨化が発生してゐない状態であり、眞健康とは毒素が全く無い為発病しない状態である。然し後者のような人は恐らく一人もないであらうし、健康保険制度も其不安の為に出来たものであらう。

右の如く現代人の殆んどは凝健康者であるから、大抵の人は何等かの持病を持つてゐる。少し仕事をすると直に頭痛や首・肩が凝つたり、一寸運動が強いと息が切れたり微熱が出たりする。又風邪を引きやすく一寸した食物でも中毒したり腹が痛んだり下痢したりする。年に数回以上は病臥し勤めを休み、何年に一度は入院するといふような譯で自分自身の健康に確信が持てず常にビクビクしてゐる。酷いものになる

と矢鱈に手術をする。少し金持ちの中年の婦人等は盲腸を除き、乳癌の手術をし卵巣も除き廃人同様の人も少なくない。又一般人でもヒョウ痘(牛痘)や脱疽で指を切ったり片方の腎臓を剔出したり喘息で横隔膜の筋を切ったり、脳の切開・手足の切断や近頃は結核の手術も流行しているというように、虚しい事を平気でやっている。處が医学は斯うするより外に方法がないから致し方ないが、今日の人間程哀れな者はあるまい。従つて之程の文化の進歩発達も其恩恵に浴する事が出来ず、病床に悩んでいる人も少なくないのである。右の如く病気の種を有っている凝健康を無毒者となし、眞の健康者を作り得るとしたら、之こそ眞の医療であつて人類にとって空前の一大福音であらう。

宗 教 編

最後の審判

私は之迄現代医学の誤謬と眞の医学の在り方を、微に入り細に亘つて徹底的に書いて来たので大体分つたであらうが、然し之だけでは全部でない。というのは今迄書いて来たものは体的即ち唯物面の方を主としたのであるから謂わば半分である。従つて残りの半分の面が根本的に分らなければ眞の医学としての全部は分らないのである。

尤も今迄説いた中にも靈の實在と靈の本質と靈の作用・影響等は相当書いたつもりであるが、それは病氣そのものに就いての直接的解説であつて、之から説く處のものは人体の内面である靈に関する一切である。従つて宗教とは離れられない靈に関

する以上、結局は宗教に迄発展し神靈の本体に迄及ぶのである。

然し此所説が最後に到つて宗教とはなるが、既成宗教の其如き信仰一点張りの独善的のものではない。言つ迄もなく経文・聖書・御筆先の如き、神秘的幽幻な説き方ではない。飽く迄論理的・実證的であつて、寧ろ科学的・哲学的と言つてもいい程のものであるから、現代人と雖も之を精読すれば理解し共鳴しない譯はあるまい。換言すれば今日迄何人も説き得なかつた處の高遠にして人間が觸るる事を恐れていた深い微妙なる謎の本体とも言つべきものであつて、之を徹底的に開明するのである。というのは現在迄の世界に宗教的形而上的の殆んどは神秘の幕に閉ざされ、其本体が明かにされなかつたからで、それが為神というものの本質は分り得ない為、神の實在等も一部の人を除いては信ずる者が殆んど無かつたのである。其結果唯物科学が絶対的信仰の的となり遂に眞理ならざるものを眞理と錯覚して、物の正邪の區別さえ分らなくなり、折角苦心して成し遂げた人類の幸福に役立つ處の發明発見と雖も邪神に利用され、本来の目的とは反対に不幸を生むべき道具にされて了つたのである。其結果病氣の氾濫となり経済的苦惱を生み戦争の原因を作つたのであるから、斯うみてくると此苦難に充ちた世界人類を救おうとするには、何よりも先ず可笑しな言い方だが本当の眞理を開明し、世界人類特に文化民族の知識人に自覚させなければならぬのである。之が眞文明を生むべき根本要素であつて、之以外決してないことを私は断言するのである。

此意味に於て私は先ず医学の誤謬から明白にすべく眞理の鏡面に映るままの眞実を書くのであるから、絶対誤りはないのであつて、私としても別段医学に対し怨恨などある譯はないが、人類救済の必要上止

むを得ないのである。従つてよしんば私が之を行わないとしても、誰かが神命によつて行つのは当然である。というのは再三言う通り、時機の到来と共に主神(エホバ)の神意の発動は之以上の遷延は許されないからであり、最後の審判は目睫に迫りつつあるからである。

そこで神は先ず第一番に医学に対し審判を開始されたのであつて、此事が先ず私に命ぜられた使命である。というのは曩に述べた如く人間生命の解決こそ文明の根本条件であるからである。従つて此問題を解らせる為には今日の人間に解し得らるるべく、時代即応の説き方でなければならぬのである。而も全人未開の眞理であつてみれば猶更そうでなければならぬので、之を以てみても此著は有史以来の偉大なる文献であつて、此大任を負わされた私としても責任の重大なる到底筆舌に表す事は出来ないのである。

靈的病氣

之から癒々靈的病氣に就いて書いてみるが、靈的病氣とは即ち憑靈による病氣であつて、憑靈と言つても多種多様な症状であるから其一々に就いて順次書いてみよう。

癌病

癌の病として最も多く而も難症であるのは何と言つても胃癌であろう。曩には薬毒による擬似胃癌を詳説したから之から眞症胃癌の原因である憑靈の事を書くのであるが、此靈は殆んど蛇の靈である。蛇が其人の前世の時か又は祖靈に殺された為に、其怨靈が恨みを返さんが為憑つて苦

しめるのであつて、此症状は主に腹部全体に亘り形は小さいが蛇の如く、或時は丸く或時は長くなり恰度泳ぐように移動するのである。其際激痛・不快感・食慾不振等もあり注意すれば其位置も判るのである。何しる靈であるから切開しても診断の時は確かにあつた筈のものが見付からないのは、見えざる蛇靈であるから移動しても分らないからである。元來蛇なるものの性格は非常に執着が強いもので、右の如く今世までも追及し復讐するのである。然し此癌は割合治り易いものであるが、同じ蛇靈でも非常に悪性なのがある。之こそ最初人間が前々世に於ける執着の罪によつて畜生界に墮ち蛇となつて再生するのである。處が其蛇が生きてる間に多くの種々の生物を呑む為、其生物の怨靈が凝つて蛇の腹中に宿つた儘、今度は人間に再生するのである。從而其生物の集團怨靈が復讐的に苦しめようとする、其苦しみが人間に移写するのであるから、実に厄介なものである。そうして此症状は中年期迄は余り発生しないが、其頃から以後になると猛威を呈し始める。最初は食慾不振・痛み・不快感等であるが、進に従つて觸れば判る程の固結が一個乃至數個出来、嘔吐するようになる。一層進むと胃中にヌラが発生し漸次増えてゆき、遂には胃の中全部にヌラが充滿する。そうなると全然食慾がなくなるから仕方なしに指を突つ込み無理に吐くようにすると、若干吐いてヌラの減つただけ胃に空虚が出来るから流動食が入るのである。そんな訳で漸次食事不能となつて衰弱死に至るのである。此ヌラというのは右の怨靈の物質化であるから、ヌラの多いのは多く呑んだ譯である。之にみてもヌラを吐く症状は眞症胃癌と思えば間違いない。然し稀には胃癌でなくてヌラを吐く場合もあるが、此ヌラは頗る稀薄であるからよく分る。

先ず濃いヌラを吐く症状が眞症胃癌と思えば間違いないのである。

次は直腸癌であるが、之は直腸部に癌が発生し移動性ではなく固定的である。直腸は糞便通過の管であるから便の通過が妨げられるので、医療は手術によって癌を切り取るので糞便の通り道がなくなるから腹部の横の方に人工肛門を造るが、之程始末の悪いものはない。何しろ開けっ放しであるから、糞便が溜まるだけは其穴へ絶えず出て来るので赤子のように始終オシメを当てねばならず、動作によっては腸が八ミ出る危険があるので、其辛さは並大抵ではない。大体の人は死んだ方がましだと歎声を漏らす、稀にはどうやら泣き泣き相当生きてる人もある。此原因は前世時代人の罪穢の浄化を妨げる行為、つまり罪人から賄賂を取って許したり軽くしたりする行為の罪や、慾の為人に醜行を行わしたり見逃したりした罪である。

次に割合多いものに子宮癌があるが、此原因は前世期又は今生期に於ける墮胎の罪であつて、つまり闇から闇に流された水児の怨霊が子宮へ憑依するのである。稀には膾癪というのがあるが、之は不道德な男女関係による罪である。

次は喉頭癌であるが、之は前生期又は今生期に於いて鳥屋などが沢山の鶏の首を絞め殺した怨霊が殆んどである。

又舌癌は前世時代舌によって作つた罪であつて、舌の為に人に迷惑や苦しみを与へた恨みの怨霊の罪であるが、此外に一寸気が付かない罪がある。それは誤つた学説や悪思想や邪教の宣伝等で多くの人を誤らせ社会に害毒を流すやうな罪で、之は多数の人に被害を与えるから割合重い罪となるのである。

次に頬癌・痔癌等もあるが、之等は滅多にない病気で、頬癌は人の頬を殴打し損傷を与へた怨みの罪、痔癌は肛門に損傷を与

えた怨みの罪等である。

結核と憑靈

結核の原因には憑靈の場合も相当多いのである。というのは事実には於いて夫婦の一方が死ぬと、間もなく残りの一方が結核となり死ぬという事がよくある。又兄弟の内誰かが結核で死ぬと、其後次々発病し症状も前に死んだ者と殆んど同様である。酷いになると五人も六人も兄弟が次々死ぬ事がある。之等を見るとどうしても伝染としか思われないので、医学が結核は感染するとしているのも無理はないのである。

處が斯ういう例は病菌による感染はないとは言えないが案外少なく、憑靈による事の方が殆んど言いたい位である。

今之を詳しく書いてみるが、普通結核で死に、靈界に往つて靈界の住人となるや、靈になつても引續いて結核患者なのであるから、病状も生前と些かの变りはなく苦しむのである。處が病気で死んだ靈は言う迄もなく地獄界に入るのであるから地獄の苦しみが續くので、病苦の外に語る相手もなく孤独で非常に寂しい為相手が欲しくなる。結果どうしても兄弟の誰かを自分の傍へ引寄せようとする。そこで憑依すれば自分と同様結核となつて死ぬのは分つているからそうするのである。何と恐るべきではなからうか。又其他にも斯ういうのがある。

それは祀り方が悪いとか、何か死後要求がある場合それを頼むべく知らせようとして之はと思ふ人に憑依する。憑依された者は勿論結核と同様になるので普通人はそういう事に気が付かず感染したと思ひ、数々医療を受け遂に死亡するので、此最もいい例として斯ういう事があつた。

今から廿数年前私がまだ修行時代の頃、私の妻が風邪を引いた處間もなく激しい咳嗽と共に引つ切りなしの吐痰である。時々血痰も混じるので、どう見ても結核症状である。私も普通の結核としても斯う急に起る筈はない、何か譯があるのだと思つて靈査法を行つた。此靈査法というのは後に詳しく書くが、それで判つた事は果たして約一年程前、二十幾才の青年で結核三期という重傷なのを治療してやつた事があつた。慥か一・二週間位で遂々死んで了つた。其靈が憑つた事がよく分つたので靈の要求を訊いてみると、生前一人の父親に世話になつていたのでが非情に貧乏なので自分が死んでからも碌々供養もして呉れず、未だに祀られていないので居所がなく、宿無しの為辛くて仕方がないからどうか祀つて貰いたいというので、私も快く承諾し、『今夜は遅いから明晩祀つてやる。然し君が此肉体に憑いていると肉体が苦しいから、今私が祝詞を奏げてやる。それが済んだら直ぐ離れなさい』と言つと彼も承知して祝詞が済むや離れたので、妻はケロリとして平素通りになつて了つた。之等は余りハッキリしているの、私も驚いた事がある。

精神病と癲癇

靈的病氣の内最も王者を占めているものとしては精神病と癲癇であろう。先ず精神病から書いてみるが、之こそ全然靈的病氣であつて肉体に関係のない事は、健康者であつても此病氣に罹るに見て明らかである。此病氣は誰も知る如く、普通人間としての精神状態を失い意識が目茶苦茶になつて了つたが、其状態も人によつて千差万別であり一人でも色々に変化する處か、一月の中でもイヤ一時間の間でも其変化は

目ま苦しい程である。此病氣に対しては医学でも相当以前から研究に研究を重ねているが、今以て分らないので治療効果に於ても何等進歩は見られない。只施設や患者に対する諸種の対策が相当進歩したに過ぎないのである。何しろ生命には別条ないとしても家族的には随分人手が要るので実に始末の悪い病氣である以上、どうしても病院へ入れなければならぬ事になるが、現在公共的の方は收容力も足りないし、そうかといつて私設病院では金が掛かるという譯で全く悲惨そのものである。近来精神病や癲癇を治すべく頭腦の手術を行うが、之は全然無効果のようである。何しる医学は唯物科学であるから手術に目を向けるのも無理はないが、此病氣は肉体との關係は甚だ浅く、目に見えざる靈の作用が主であるから靈的に治すより仕様がないのである。それを之から詳しく書いてみよう。

右の如く靈的病氣であり之こそ憑靈が原因なのである。其場合憑靈の位置は前頭部に限られているもので、何故前頭部に靈が憑るかといつと其部の靈が稀薄になるからで、つまり局部的腦貧血である。此腦貧血の原因と言へば曩に述べた如く首の周りに毒素が集溜し易く、それが両延髄及び淋巴腺附近に固結するので其固結が血管を圧迫する為、頭腦へ送流される血液が減るからである。

茲で何故靈が憑依するかの理由であるが、それを説く前に靈界なるものを充分知つておく必要がある。

元來靈界とは現象界・空氣界の外にある第三次元の世界であつて、つまり空氣よりも一層非物質であるので今日迄無とされていた世界である。従つて此世界は現在迄は一部の人を除く外、一般人には殆んど信じられていなかったのである。というのは唯物科学が其處迄を把握する程進歩して

いなかっただからである。然し事實は物象界・空気界よりも一層重要な言わば万有の根元的力の世界であつて、地上一切は此力によって生成化育されているのである。別言すれば此世界は表が物象界で裏が霊界と言つてもいいので、人間で言えば肉体は物象界に属し心は霊界に属しているのである。此理によつて人間も動物も死と共に肉体は現界に遺棄され霊は霊界に帰属する。つまり人間の死は体は滅して霊だけが永遠に残されるのである。そうして霊界の生存者となつた凡ゆる動物の内、狐・狸・龍神(蛇)等が生きてる人間の霊に憑依する。というのは前述の如く人間の霊の頭の一部分が稀薄になつてゐるからで、若し充実していれば決して憑り得ないのである。之を詳しく言えば、例えば霊が充実して十である處へ一だけ欠ければ九となり半数の五以上となるとそれだけ憑霊の方が勝つて、人霊の方が負けるから憑霊の自由になる。之が精神病の眞の原因である。

とすれば精神病の原因は全く脳貧血であつて其因は固結の圧迫にあるのである。然し單に貧血だけならまだいいが、延髄部の圧迫による貧血は睡眠不足の原因となるので、之が恐ろしいのである。何となれば精神病になる始めは例外なく睡眠不足が何月も續くからである。其理由は本来脳貧血とは体的の症状であるが、靈的に言えば其部の霊が稀薄になる事であつて、謂わば貧霊である。處が其貧霊部即ち霊の量の不足に乗じて其量だけ彼等邪霊共は憑依が出来るのである。憑依するや人間と異つた彼等の性格は動物的意慾の儘露骨に振舞う。之が即ち精神病の症状であつて、其動物の割合を言えば狐霊が八パーセント、狸霊が十パーセント、残り十パーセントは種々の霊である。

右は純精神病を書いたのであるが、茲に誰も氣附かない驚くべき事がある。それは現代の人間悉くと言いたい程、軽い精神病に罹つてゐる。勿論其原因は一般人悉くと言いたい程頭脳に多少の欠陥があるからで、極く上等の者でも十パーセント乃至二十パーセントは冒されており、普通人は先ず三・四十パーセント位であらう。處が四十パーセントを越えると大変である。眞症の精神病者となるからである。だが憑霊というものは一定してゐないもので、絶えず動揺してゐる。それは欠陥と相応するからで、其意味は霊の厚薄が絶えず増減してゐるからである。そうして此憑霊にも二種あつて、生れ乍らに其人に定住的に憑依してゐる動物霊と後天的臨時的に憑依する霊とがある。今之に就いて詳しく説明してみよう、先ず人間が此世に生を享ける場合、曩に述べた如く初めポチ即ち魂が宿るが、此魂なるものは神の分霊であつて、人間の中心であり、主人公である。之を本守護神と曰い、次は人間を一生涯不斷に守護してゐる霊がある。之を守護霊とも言い正守護神とも言つ。此霊は祖先の霊の中で霊界に於ての修行が済み資格を得た者であつて、此中から選抜されて其一人の一生涯の守護の役目を命ぜられる。次が副守護神と言つて之が動物霊である。此霊は動物ではあるが實は人間生存上必要欠くべからざる役目をしてゐるものである。そこで先ず右の三つの守護神に就いて説明してみよう。

以上は大体人間誰でも有つてゐる正規の守護神であるが、第一の本守護神なるものは神の分霊である以上其本質は良心そのもので、昔からよく言われる人の性は善なりとは之を指したものである。第二の正守護神は人間が危険に遭遇する場合それが霊界に先に起るので、それを知つて危難を免れしむるべく努力する。世間よく虫

が知らせるとか其時気が進まなかつた等と言つのは正守護神の注意である。又人間が罪を犯そうとするのを犯させまいとする事や、常に悪に引込まれないよう警戒し正しい人間にさせようとする。それには神佛を信仰させるのが最良の方法として導こうとする。處が正守護神がどんなに頑張つても、邪神の強いのに遭つと負ける事があるのだ、其為不幸を招く結果となるから仲々大変である。そこで正守護神は常に邪神に勝つ力を求めている。それには人間が立派な信仰に入らなければならぬといふ譯で、本教へ導く事が日に月に増えつつあるのである。次に第三の副守護神は動物靈であるから、悪の本来として一刻の休みもなく人間に悪を考えさせ悪をさせようとする。悪とは帰する處体的欲望の本尊である。

如何なる人間でも金が慾しい女が慾しい警沢をしたい名誉が慾しい人に偉く見せたい、賭事や競争に勝ちたい出世をしたい、何事も思い通りになりたいという慾望がそれからそれへと湧いて来る。そこで昔から信仰によって此果しない慾望即ち煩惱を押さえようと修養する。それが兎も角今日迄人類社会は破滅を免れ得て来たのであるから大いに感謝すべきである。

然し乍ら實際上人間が之等の物質慾がないとしたら之又大変である。何となれば肝腎な活動力がなくなつて了うからである。従つて何としても此点が仲々難しいのである。ではどうすればいいかといふと、之は別段困難な事はない。つまり人間は神から与えられた良心を發揮させ獸から受ける悪に勝てばいいのである。といつてもそれには自ら限度がある。即ち善も悪も決定的に勝負を付けてはいけない。此意味は人という文字を解釈すると実によく分る。それは 是天から降つた形で神の分靈である。 は地上に居る獸の形である。とし

たら が上の方から押さえており、 はを支えている形である。であるから人とはと の間になるから人間の文字もよく当て嵌つている。即ち人間は善と悪とを両有している。天性で幾分でも善が勝つていれば間違いないのである。従つて人間は向上すれば神となり下落すれば獸となるので、此理によつて人間の限りなき慾望も或程度で制御する事が出来るので、之が眞理であるとしたら、限度を越えれば人ではなくxの形となる。即ちバツテンであるから抹消の意味であり亡びるのである。右の理によつてどうしても人間本来の在り方は悪を制御するだけの力を有たねば安心が出来ないのであるが、それには力が必要。其力こそ神から与えられるべきものであるから信仰が必要となる。さすれば如何なる世にあつても何等不安なく永遠の幸福者となり得るのである。

以上説いた如き眞理を靈界の修行中知つた正守護神は極力子孫を正常に導こうとする。處が副守護神の方は其反対であるから極力妨害し悪に導こうとして心の中で常に争闘している。之は誰でも経験する處であるが、そればかりではない斯ういう事も知る必要がある。それは人間一人一人異つた性格と技能を有っている。之は神が世界を構成する上に於てそうされ給うのであつて、之を補佐し天性を充分發揮させるよう正守護神は神の命を奉じて専心努力しているのである。此手段として正守護神は先ず第一に其人間の魂を磨くべく非常な苦痛を与えるが、之は向上の為の修行である。之も其人の使命によつて大中小夫々異つ。例えば使命の大きいもの程苦難も大きいから、寧ろ喜ぶべきで私などもそうである。又運命の轉換という事は神から仕事を換える命が正守護神に下るからである。そうして神にも階級があり人間界と同様御役の種別もあるので、人間に命ずる

場合もそれ相応の神によるのである。此意味によって人間界の構成を書いてみるが、分り易く言えば人類を緯に見れば千差万別夫々能力が違つが、経に見れば上中下の差別だけである。其證據には一民族を支配するとか一國一地方等の支配者はそれに相応する能力を与えられており、最高の地位に昇る人は世界でも数人に過ぎないが下に下がるに従い段々数が多くなる。最下級になる程多数である。事實はそういう意味である。神は経綸上一切過不足なく適切巧妙に配置され按置される。其深遠微妙なる御神意は到底人間の窺い知るを得ないのである。又之は鉱物に譬えてみると一層よく判る。最高のダイヤモンドからプラチナ・金・銀・銅・鉛・鉄というように最高程産額が少なく最低の鉄に至つては最も多産であるに見ても明かである。此現實が分つただけでも人類社会の真相は認識されるであろう。此理によって階級闘争が如何に間違つているかが分る筈である。

茲に前に戻つて再び精神病の説明に移るが、之は別な面であるから其積りで讀まれないが、世間非常に偉い人でも時により迷つたり間違つた考えや道に外れた行為をする事がよくある。アレ程の人が彼んな事をするとは腑に落ちないとか、彼んな失敗をする等は意外等という事がある。又歴史上からみても大英雄がつまらない一婦人の色香に迷い千仞の功を一気に欠くような事も往々あるが、之はどういう譯かというと前に述べた如く、平常十か二十パーセント以内の欠陥なら無事だが成功して思い通りになると、慢心と我慾の為頭脳の欠陥が増えるので、それに乘じて力のある動物靈が憑依したり副守護神が頭へ上つてノサバリ始めるので、三十以上に迄押し拡がり智慧も暗くなるので、良いと思つた事が反対になり大失敗するので、英雄などに良くある例で、右の如くどんなに偉

い人でも信仰がない場合、動物靈即ち悪靈が憑依するやそれが最善の手段のように思わせるが、実に巧妙な邪智は到底看破出来ないものである。それが為遂に大失敗するのであるから実に恐るべきものである。そうして特に心得べきは其手段方法が私利私慾が目的であればある程失敗は大きくなるに反し、天下公共の為というような利他愛の為とすれば失敗しても或程度で喰止まり再び立上る事が出来るのである。何となれば前者は神の御守護がないが、後者は御守護があるからである。

そうして靈界に於ては無数の悪靈が百鬼夜行的に横行しているので、隙さえあれば忽ち憑依し瞞し迷わせ悪を行わせ不幸に陥し入れるので、之が彼等の本能であるから少しの油断も出来ないのである。處が之に対抗して飽く迄そうさせまいとする擁護者が正守護神であるから、正守護神には大いに力を得させなければならぬのであつて、それには立派な信仰に入り神の力を恵まれるべきである。

次は癲癇であるが、之は精神病と似て非なるものであつて、此病氣は悉く死靈の憑依である。何よりも癲癇の発作が起るや人間死の刹那の状態を表わす。例えば水死した靈が憑ると泡を吹き藻掻き苦しむし、又水癲癇といつて水を見ただけで発作が起るのは過つて水に落ちたり、突落とされたりした靈で其刹那の恐怖が残つてゐるからである。又火癲癇というものがあるが、之も火に焼かれた靈であり、其他獸や蛇・種々の虫を見ただけで恐怖し発作するのは其物の為に死んだのである。又斯ういうのがあつた。人込みへ行くと発作が起るが之は人込みで踏み潰されて死んだ靈であり、汽車電車に乗るのを恐れたり、誰かが背後に近寄ると恐れる人等も同様である。以前斯ういふ變つたのがあつた。それは一人での留守居は恐ろしくて我慢が出来ず、門の

外へ出て人の帰る迄佇んで待つていると
いうので、之も前世一人で家に居た際急病
等で死んだ其恐怖の爲である。まだ色々あ
るが以上によって考えれば大体判るであ
らう。

茲で序だから眞症小児麻痺に就いて書
いてみるが、之は脳溢血で死んだ祖父母の
霊が殆んどである。此原因は脳溢血で急死
した霊で、生前無信仰者で霊界あるを信じ
ていない為、霊界へ往つても死を意識せず、
生きていると思つているが肝腎な肉体が
ないので、遮二無二肉体を求め、其場
合他人に憑く事は出来ない霊界の規則で
あるから、自分の霊統の者を求める。勿論
霊統は霊線で繋がれており、子供は憑依し
易いので多くは孫を目掛けて憑依する。其
場合数日間発熱があり痴呆症や半身付随
となる。恰度中風そのままであるのは右の
原因によるからである。

唯物医学と宗教医学

私は之迄現代医学即ち唯物医学の誤謬
と宗教医学の透徹した原理を書いて来た
が、之を讀んだ人で既成医学に囚われてい
ない限り恐らく理解出来ない人はあるま
い。そうして医学の本来の目的は人間の病
気を完全に治し眞の健康体を作るにある
としたら、それが現実に現れなくてはなら
ない事である。今更言つ迄もないが眞の健
康体とは一生涯病気の心配から解放され
る事であつて、そういう人間が増えるとし
たら、茲に人類の理想である病無き世界が
実現するのである。従つて其理想に一步一
歩接近され得る医学こそ眞の医学である。

右によつて今迄私が説いて来た處の事
実を根據としての理論を精読玩味すれば
何人も首肯されない筈はないのであるか
ら、此宗教医学こそ眞の医学でなくて何で

あらう。

此意味に於て一日も早く此医学を世界
人類に知らせ其恩恵に浴せしむべきでは
あるまいか。而も本宗教医学は独り人間の
肉体のみを健康にするばかりでなく併せ
て精神をも健全にするのである。以上今日
最も人類の悩みとされている貧困も恐怖
の的である戦争も必ず解決出来るのであ
る。

従つて之こそ言語に絶する程の偉大な
福音である事は言つ迄もない。それに就
いて最も困難な問題があるのは、何しろ何
世紀の長きに涉つて根強く植付けられて
きた現在の唯物医学であつて、人類悉くは
之に幻惑され無批判的に信じ切つて了つ
ていて、殆んど信仰的と言つてもいい位に
なつていて。

専門家は固より一般人の頭脳もそうで
ある以上、生易しい方法では到底目覚めさ
せる事は不可能である。之が吾々に課せら
れたる一大難事業であつて、普通なれば不
可能に近いとさえ言えよう。さらばといつ
て此儘にしておいたら人類の苦惱は益々
深まり、遂には文化民族没落という運命に
迄及ぶか分らないのである。としたら何が
なんでも一日も早く世界人類に知らせな
ければならないのである。其結果一般人が
分つたとしたら茲に世界的一大センセー
ションを捲き起すと共に、唯物医学の大革
命となるのであらう。実に有史以来之程大
きな革命は未だ嘗てなかつたであらうが、
此事は戦争よりも比較にならない程の重
大な問題である。何となれば戦争はよしん
ば第三次戦争が起つたとしても限られた
時と限られた地域で済むからである。處が
医学のそれに至つては永遠に全人類に関
する問題である事である。

以上の如く何人も夢想だも出来なかつ
た處の病無き世界が出現するとしたら、一
体人間の壽齡はどうなるであらうか。言つ

迄もなく百才以上は可能となり、茲に人類

の理想は実現するのである。然し歴史以前は分りようがないが、歴史に表れているだけでも、一般人が百才以上の壽齡を保つた記録は未だ嘗て見当たらないのである。というのは災害は別として殆んどは病の為に斃れるからで、人間病で死ぬという事は決して常態ではなく変態なのである。勿論病で死ぬという事は自然死でなく不自然死であつて、若し病なき人間とすれば悉く自然死となるから、百才以上は何等不思議はないのである。そこでまだ言い足りない事がある。曩に述べた如く、病氣の原因は靈の曇りが根本で、曇りの発生源は人間の罪と薬毒の二つであるばかりではなく、実は此外に今一つの重要な原因がある。それは農作物に施す肥料であつて、原始時代は知らないが、相当古い時代から使つていた事は想像出来る。日本に於ては糞尿と近來使い始めた化学肥料とであり、外国に於ても化学肥料とであり、外国に於ても化学肥料と其以前にも何等かの肥料を用いたに違ひあるまい。元來人造肥料なるものは人体に如何に有害であるのは今日迄全然分らなかつた。というのは肥料は農作物が一旦吸収して了えば全部有効に働き、何等副作用はないと思ひ込んで来た事である。恰度人体に於ける薬と同様、効果のみで余毒など残らないものと思つたのと同様である。處が私は神示によつて発見した事は、成程実になる迄に毒分は相当減るには減るが、絶無とはならないのである。之に就いては最近米国の有名な酪農会社社長ロデール氏が長年の経験によつて其結果を発表した處によると、化学肥料で栽培した草で家畜を育てると健康も悪く乳も不良であるに反し、堆肥のみで作つた草で育てると非常に健康で乳も優良である事が分つたので此発見を熱心に宣伝した為、近來各方面に漸く認めらるるに至り、米政府も之を支

援する事となつたというのである。

又哲学者の研究も實際家の実験も之に符合した為、漸次社会的世論とさえなつて来たという事が最近の米国の専門雜誌に出ており、次で同氏は人間の病氣も化学薬剤を用いるようになってから悪性な病氣が増えたと言っている。然し右の二つ共私は廿年以前から唱えて来たが、日本は米國と違い新しい説は識者は見向きもしない傾向があり、而も私が宗教家なるが故にテンドン見向きもせず、迷信視されて来たのである。勿論斯ういふ觀方が如何に文化の進歩を妨げているかはよく曰われる處である。

以上によつて分つたであろうが、兎に角罪と薬劑と人造肥料との三つが病氣の根本であるとしたら、此三つの害を除く事こそ人類救済の第一義であらねばならない。處が薬劑と肥料とは、今日只今からでも廃止する事が出来るが、最も至難であるのは罪の問題である。之だけはどうしても宗教によらなければ解決出来ないのは勿論であると言つても、之が実現の可能性ある宗教は今日先ず見当たらないと言つてもよからう。處が此条件に適う宗教こそ我メシヤ教であるとしたら、私の責任も重大なるものである。此意味に於て私は先ず此著によつて全世界の有識者に向つて警鐘をならす所以である。それに就いて前以て一つ重大なる事を知らせなければならぬので、それを之から書いてみよう。

靈界に於ける昼夜の轉換

右の重大事というのは靈界に於ける昼夜の大轉換である。即ち夜と昼との交替である。という可笑しな話で誰しも夜と昼は一日の中にあるではないかと言つてあろう。成程それには違ひないが私の言つ

は大宇宙のそれであつて、此事を知るとしたら人智では到底想像も付かない程の大神秘を会得する事が出来、それによつて今後の世界の動向も分り未来の見当も略ぼつのである。

そうして曩に述べた如く此世界は物象界・空気界・靈気界の三原素によつて構成されており、一日の昼夜とは此物象界と空気界、つまり人間の五感に触れ機械で測定出来るものであるに対し、靈気界のそれは全然無と同様で捉える事が出来ないものであるから、今私の此文を見るとしても直ちに信じ得る事は困難であらう。私と雖も若し神を知らないとしたら一般人と同様であらう。只私は此重大なる使命を有つ以上、神と密接不離な関係にあるから確実に知り得るのである。

それによると靈界に於ても現界に一日の中に昼夜がある如く、十年にも百年にも千年万年にもあるのである。従つて其轉換毎に人類世界にも反映するので、それが靈界の方では絶対正確であるにも拘わらず現界へ移写される場合、幾分の遅差は免れないのである。其事を頭に置いて長い歴史を見る時、大中小種々の歴史的变化を見るのは其表われである。そこで今私が言わんとする處は世界の大轉換に関する主なる點であつて、何よりも先ず大轉換の時期であるが、それは一九三一年六月十五日から始まつており、一九六一年六月十五日迄の三十年間で一段落がつく事になつてゐる。然し人間の頭脳で考える時、三十年と言へば長期間であるが大宇宙に置ける神の経綸としたら一瞬の出来事ではないのである。そうして右の三十年といつても現界に於ては急激な変化はなく、徐々として進みつつあると共に右の三十年を挟んで其前後の時を合せると六十余年の歳月を費す事となる。それは準備期と轉換後の整理とに時を要するからである。

右の如き其轉換の意味は今日迄は夜の世界であつたから謂わば月の支配であつたのである。處が愈々昼の世界となるに就いて、豫て世界の二大聖者として仰がれてゐる釈迦・基督の豫言された通りの事態となつたのである。

そうして先ず佛典によれば釈尊は『吾七十二歳にして見眞実になれり』と言われた後間もない或日、世尊はいつもに似合わず憂鬱の色も蔽い難い御様子なので、弟子の阿難尊者が憂慮しお訊ねした。『世尊よ、今日は常にない御沈みのように見受けられますが、何か御心配事でも御有りですか』と申した處、釈尊は直ちに御答えになつた事は『儂は今迄終生の業として佛法を創成し、一切衆生を救わんとして大いに努力を続けて来たが、今日大佛陀から意外なる御諭しがあつた。それによると或時期に至ると我佛法は滅すると言つ事で大いに失望したのである』との御言葉であつて、それから世尊は斯うも曰われた。『儂は見眞実によつて分つた事だが、今迄説いて来た多くの経文は少からず誤りがあるので、今日以後眞実を説くから之によつて正覺を得られよ』と仰せられたので、此時からの経文こそ佛法の眞髓である事は確實で、それが法華經二十八品と法滅尽經と弥勒出現成就經である。處が其事を發見されたのが、彼の日蓮上人であつて上人は此發見によつて、他宗教義悉くは見眞実以前に説かれたものであるから眞実ではない。独り我法華教こそ佛法の眞諦であるとして他宗悉くを否定し、猛然として一大獅子吼をされたのであるから、上人の此傍若無人的宣言も無碍に非難する事は出来ないのである。というのは法華教とは法の華であつて、最後に法の華を咲かせなければならぬ。其場所と人が日本であり日蓮上人であるから、上人が法華經を翳(かざ)して以下なる受難にも屈せず、一途に日本国中に

法華經を宣布されたのも、此強い信念があったからである。元來佛法は曩に説いた如く月の教えであり陰であり女性である。釈尊が『吾は変性女子なり』と曰われたのも其意味であろう。又上人は前例のない型破りの行り方であった。彼が修行成つて最初故郷である安房の清澄山に於て東方日の出に向つて妙法蓮華經の五文字を高らかに奉唱され、其時を契機として愈々法華經の弘通に取掛つたという有名な話も、それ迄佛教各派の悉くは南無阿弥陀佛の六文字の法名を唱えたので、之にも意味がある。即ち五は日の数であり六は月の数であるからである。それ迄は人も知る如く日本に於ける佛教といへば陰性であつたものが、一度日蓮宗が生まるるや極端に陽性を發揮し、太鼓を叩き花を飾り声高らかに經文を唱える等、何から何迄陽氣一点張りである。全く佛華を咲かせたのである。又世間同宗を以つて一代法華と言つたのも花は咲くが散るから一時は好いが長くは続かないという譯であろう。今一つの神秘がある。それは法華經二十八品の数である。二十八の数は月の二十八宿を表わしたもので、其二十五番目に普門品があるのは、二十五の数は五・五・二十五で五は日であり出づるであるから、日の出の意味である。つまり月の佛界に日が生れた表徴である。

即ち此時既に夜の最奥靈界には、ほのぼのと黎明の光が射し始めたのである。そうして面白い事には外の佛教は全部西から生れたに対し、独り日蓮宗のみは東から出ている。而も安房の清澄山こそ日本に於ける最も東の端で、此地点こそ大神秘が包蔵されている事は、私が以前書いた自觀叢書奇蹟物語中に概説してあるから参照されたい。つまり此地が靈界二次元に於ける昼の世界の初発点であるのである。

次に日本に於て何故佛法の花を咲かせなければならぬかという点、そこにも深

い密意が秘んでいる。即ち花が咲かなければ実が生らないからで、其実というのが実相世界であつて、此実の程が如意輪觀音の御働きでもある。

私がいつも言う如く觀世音は日の弥勒であり、阿弥陀が月の弥勒であり、釈迦が地の弥勒であり此三人の佛陀が三尊の弥勒である。とすれば阿弥陀と釈迦は夜の世界の期間の御役であつたに対し、觀音は昼の世界にならんとする其境目に觀音力を揮(ふる)わせ給つのである。此經論こそ昔印度に於て佛法發祥の時己に誓約されたものである。

本教が最初日本觀音教団として出發したのも、私が觀音を描き御神体として拝まつた事も、私に始終觀音の靈身が付き添われて居られた事も右の因縁に外ならないのである。

處が釈迦・阿弥陀は如来であつたので、觀世音の菩薩の御名に囚われ、宗旨によつては阿弥陀や釈迦より觀音の方が下位とされていたのも、右の因縁を知らば誤つてゐる事が分るであろう。處が其後御位が上られ光明如来となられたので、現在は光明如来の御働きである事は信者はよく知つてゐる通りである。

佛滅と五六七の世

其後釈尊は素晴らしい豫言をされた。それは今より数えて五十六億七千万年後佛滅の世となり、次いで弥勒菩薩下生され弥勒の世を造り給う。弥勒の世というのは、居乍らにして千里の先まで身を運ばれ、居乍らにして千里の先の声を聴き、居乍らにして千里の先から愍するものが得られるというので、其頃としては想像もつかない夢の世界である。處が現在の世界は最早右の豫言通りになつて來てゐるではないか。

としたら物質的には已に弥勒世となつて
いるのである。處で今迄佛者が迷つたのは
此五十六億七千万年という数字であつた。
然し之は一寸考えただけでも直ぐ判る筈
である。何となれば如何に釈尊と雖も現実
的に五十六億七千万年等という途方もな
い先の世の中を豫言される譯ないからで
ある。それ程先の世の中を豫言したとて何
の役にも立たないではないか。言つ迄もな
くそれまでに地球はどうなるかテンデ見
当もつかないであらう。之は全く五・六・
七という数字を知らせんが為である。とい
うのは弥勒の世とは私の言つ五六七の世
界であつて、此五・六・七を解釈すれば五
は日であり六は月であり七は地の意味に
なるからで、即ち順序正しい世界という事
である。之に就いて一層深い意味を書いて
みよう。

今迄夜の世界というのは日が天に向か
つて昇つていなかった時の事である。勿論
靈界の事象ではあるが、之を小さく地球に
譬えてみればよく分る。夜は月が上天にあ
つて照らしていたが、段々地球を一周して
西の涯から下つて地球の蔭に隠れる。する
と太陽が東から昇つて中天に輝くとすれ
ば、之が昼間の世界である。

そうなれば天は火であり中界は水素の
世界であり、地は依然として地であるから、
之が五六七の順序である。右を一言にして
言えば昼の世界とは今迄見えなかつた日
が中天に輝く姿で、それが五六七の世であ
る。又釈尊は或日弟子から佛教の眞髓を訊
かれた事があつた。世尊は『左様、一言に
していえば眞如である』と仰せられた。眞
如とは無論眞如の月の事で、其時既に佛法
は月の教えである事を示されたのである。
そうして眞如という文字は眞の如くと書
くのであるから眞ではない譯で、此点もよ
く考えなくてはならない。それから佛典で
は真相眞如と言われているが、之は逆であ

る。何となれば真相とは眞実という意味で、
即ち昼の世界である。眞如は夜の世界であ
るから順序からいって眞如が先で真相世
界は次に生れるのである。

今一つ同じような事がある。それは經文
には三千大千世界とあるが、之も逆である
から私の善言讚詞の中には大千三千世界
と直してある。というのは三千世界とは神
幽現の三界であるに對し、之を纏めて一つ
にすれば大千世界となる。大とは一人と書
くのであつて、主神御一方が主宰され給う
意味である。

次に釈尊は斯ういふ事も曰われた。此世
は厭離穢土であり火宅であり苦の娑婆で
もある。又生病老死の四苦があるとも云わ
れ、諸行無情諸惡滅法等とも言われたので、
どれもこれも世を果敢なんだ言葉である。
又一切空とか空々寂々とか無だとも言わ
れた。そこで右の意味を總括してみると、
どうせ此世は苦の娑婆だから苦は脱れら
れない。人間は生れ乍らにして苦しみを背
負っているのだ。いくら藻掻いたとて仕方
がないから覺るのが肝腎だ。つまり諦めで
ある。人間が如何に大きな望みを抱いたと
て無駄であり、一寸先も分らぬ闇の世であ
るから安心等出来よう筈がない。そうして
此世は仮の娑婆だから、いくら骨折つて造
つたものでも結局は無になり、空になつて
了うので何事も永遠性はない。だから一切
の慾望は結局一時的煩惱にしか過ぎない
のだから諦める事だ。諦め切つて了えば眞
の安心立命を得られるのだと説かれたの
であつて、之が佛教の眞髓である。とした
ら全く夜の世界の姿をよく物語っている。
此意味に於て萬事は昼の世界迄の運命
でしかない事を遺憾なく示されている。従
つて人間は真相世界が来るまで待つより
仕方ない事で、それが今日までの賢明な考
え方であつたのである。

佛教の起源

觀世音菩薩の御本尊は伊都能賣神である事は以前から私は度々知らしてある處であるが、之に就いて分らねばならない事は、元來佛身なるものの根本である。單に佛といつても実は二通りあつて、本來の佛身と神の化身との両方ある。そうして本來佛とは約二千六百年以前釈尊の時から生れたものであつて、其頃迄は今日の印度は當時月氏国とも言われたので、同国に於ては餘程以前から彼の婆羅門教が隆盛を極めていたのであつて、此婆羅門教なるものは教義のよくなものは更になく、只肉体的難行苦行によつて宇宙の眞理を掴もうとしたのである。今日でも絵画彫刻等に残つてゐる羅漢等は其苦行の姿であつて、此姿を見ても分る如く樹上に登つて鳥の巢の如きものを拵え、それに何年も静座をした。當時の高僧、鳥巢禪師などもそこであり、又掌の上に塔の模型の如きものを載せたまま何年もジツトしていたりする等、いづれも一種異様な形をし乍ら合唱座禪をしており、一々見る者をして奇異の感に打たれるのである。酷いになると、板の上に沢山の釘を打ち付け、其上で座禪を組むので、釘の尖で臀部に穴が穿き、出血と共に其苦痛は名状すべからざるものがある。然し此我慢が修業なのであるから到底今日では想像も出来ないのである。

彼の達磨大師にしても面壁九年という長い歲月座禪のまま壁に對つて瞑想を續けていたのであるから、其苦行は並大抵ではあるまい。茲で一寸達磨に就いての説であるが、右の印度の達磨大師とは別に今から千二・三百年前支那にも同名異人の達磨が現われたので、之がよく混同され易いようである。支那の達磨は聖徳太子の時代日本へも渡來し、太子に面謁されたという相

當確かな記録を私は見た事がある。

話は戻るが婆羅門の行者達は何故それ程の難行苦行をするかというに、之に就いては其頃多くの求道者達は競つて宇宙の眞理を知ろうとして、其方法を難行苦行に求めたのである。恰度今日學問の修業によつて博士號や名譽・地位を得ようとするようなものである。そうして達磨に就いての今一つの面白い話は、彼は面壁九年目の或夜フト満月を仰ぎ見た時、月光が胸の奥深く照らすと思つて一刹那豁然として大悟徹底したので、其喜びは絶頂に達したという事で、それからの達磨は見眞実の如くに如何なる難問にも明答を与え、當時拔群の行者として多くの者の尊信を集めたという伝説がある。

そうして當時の印度に於ては日本でいう、天照大御神と同様人民の最も畏敬の中心となつていたのは彼の大自在天神であつた。其外大廣目天・帝釈天等々色々な御名があるが、之は日蓮宗の曼陀羅に大体出ているから見れば分るが、兎に角婆羅門教が圧倒的に社会を風靡していた事は間違いない。處が其頃突如として現われたのが言つ迄もなく釈迦牟尼如来であつた。此経緯は後に書くが、兎に角皇太子であられた悉達太子が修業終つて大覺者となり出したのである。太子は幽現界の眞相を會得したのである。太子は慈悲心を以つて一切衆生を濟度せんとする本願を立てた。そうして其手段として先ず天下に開示されたのが經文を讀む事によつて覺りを得るという方法で、之を大衆に向つて大いに説諭されたのだから、當時の社会に一大センセーションを捲き起したのは勿論である。何しろ當時婆羅門式難行苦行を唯一無二のものとしていた事とて喜んだのも無理はない。何しろ之に代るべきものとしての讀經という安易な修行であるから、茲に大衆は釈尊の徳を慕い日に月に佛門に歸依する

もの續出するので、遂に釈尊をして印度の救世主の如く信奉の的となつたのは無理もない。其様な譯で遂に全印度を佛法化したので、之が佛教の起源である。それからの印度はさしもの婆羅門の勢力も漸次萎靡不振となつたのは勿論であるが、いつて全然消滅した譯でなく、今日も一部には尚残つており同宗行者は仲々の奇蹟を現わしているという事で、英国の学者中にも研究の為印度に渡り熱心に研究する者もあるとみえ、私は先年其記録を讀んだ事があるが、素晴らしい奇蹟の数々が掲載されていた事を今も憶えている。

伊都能賣神

前項に述べた處は自在天なる言わば婆羅門宗盛んであつた頃の主宰者を表わしたのであるが、其当時曩に述べた如く日本古来の神々は印度へ渡航し化身佛となられたので、其化身佛の總領が伊都能賣神であつて、当時日本に於ける最高の地位であられたのである。處が其頃素盞鳴尊を中心とする朝鮮の神々が渡来され、伊都能賣神の地位を狙つて犯そうとしたが、容易に応諾されない為威圧や迫害等から進んで、遂に生命に迄及んで来たので急遽御位を棄てられ、変身によつて眼を外らし、窃かに日本を脱出し支那を通つて印度へ落ち延び給つたのである。そうして觀自在菩薩の御名によつて、当時印度の南方海岸にある補陀洛という名の餘り高からざる山の上に安住せらるべく、新なる清き館を建てられた此事は悲華經の中にある。曰く『觀自在菩薩は補陀洛山上柔かき草地の上に金剛精座を出来、二十八部衆を随え結迦扶座して説教されたと云つ』とある。当時まだ善財童子という御名であつた若き釈尊は此説教を聴聞して、其卓伐せる教に感激

すると共に心機一転してそれ迄の悉達太子という皇太子の御位を放棄し一大決意の下に、当時紊れていた俗界を離脱し、直ちに壇特の山深く別け入り菩提樹(一名橄欖樹)の下、石上に安座し一意専心悟道に入るべく修行三昧に耽つたのである。此修業の期間に就て諸説紛々としているが、私は七ヶ年と示された。

そうして業成り出山するや愈々釈迦牟尼如来として佛法開示に取り掛かれたのであるから、實際上佛法の本当の祖は日本の伊都能賣神であつた事は確かである。そうして今一つ日本から佛法が出たという證據として見逃し得ない事がある。それは佛教でよく稱える本地垂跡の言葉である。之は私の考察によれば本地とは本元の国即ち日本であり、垂跡とは勿論巡跡教を垂れる事である。即ち最後に至つて故郷である日本全土に一度佛の教を垂れると共に、佛華を咲かせ実を生らせなければならぬという密意である。又今一つは觀世音の御姿である。其最も得意の点は漆黒の素直な頭髮で、之は日本人特有のものである。

それに引換え釈迦・阿弥陀は全然異つた赭色縮毛であるにみても、両如来が印度人であつた事は明かである。

又觀世音の王冠や首飾り等も高貴な地位を物語つており、頭巾を被られているのは御忍びの姿である。

そうして又釈尊の弟子に法藏菩薩という傑出した一人がいた。彼は一時釈尊から離れて他の方面で修行し、業成つてから一日釈尊を訪れていうには『私は今度印度の西方に一の聖地を選びて祇園精舎を作り、之を極樂淨土と名付けた。其目的は今後世尊の御教によつて覺者即ち佛の資格を得た者を寄こして貰いたい。さすれば右の極樂淨土別名寂光の淨土へ安住させ、一生歡喜法悦の境遇にあらしめるであらう。』と

いつて約束されたのである。寂光とは寂しい光であるから勿論月光である。處が此法藏菩薩が他界するや阿弥陀如来の法名となつて靈界に於て一切衆生を救われたのである。つまり現界は釈迦、靈界は阿弥陀が救うという意味である。

そうして觀自在菩薩は終りには觀世音菩薩と御名を変えられたのである。之は梵語ではアバロキテイシュバラの御名であつたが、後支那に於ける鳩摩羅什なる学者が譯され、觀世音と名付けられたという事になつてゐる。處が此觀世音の御名に就いては一つの深い神秘があるからそれを書いてみよう。

觀世音菩薩

前項迄に觀世音に就いての因縁を色々な面から説いて来たが、そうなられる迄の根本と言へば全く素尊の暴厭が原因であつた事は既に述べた通りである。處が伊都能賣神去り給いし後の日本はどうなつたかといつと、其弟神であつたのが、彼の天照天皇であつた。此天皇は惜しくも何の理由もなく俄に崩御され給うたので、止むなく其皇后を立てて御位に即かせられたのが彼の女性である天照大御神であつた。今も天照大御神が日の神であり乍ら女神として祀られてゐるのはそういう譯なのである。又以前私は書いた事があるが、素尊は日本の統治權を得んとして餘りに焦り目的の為に手段を擇ばず式で力の政治を行つた結果、人心は紊れ拾収すべからざるに至つたので、茲に父君である伊邪那岐尊の御勘気に觸れ譴責の止むなき事になつた。というのは素尊は本来朝鮮系統の神でもあつたからである。而も其後悔悟の情なく依然たる有様なので、最後の手段として日本を追放される事になつたのである。此

時の事を古事記には斯う出ている。「素盞鳴尊の素行や悪性に対し伊邪那岐尊の御尤め蒙り神譴にやはられた」とあり、其行先は黄泉の国には母神である伊邪那美尊が在るので、罪の赦される迄母神の許にいて暫くの間謹慎すべく思つて出発の前、天に在わす姉神天照大御神に暇乞いをせんとしたのである。此事を古事記には斯う書いてある。

素盞鳴尊は忽ち山川響動し天に昇らんとした處、それを知つた天照大神は大いに驚き、さては弟素尊は自分を攻めに来たのではないかと疑心暗鬼を抱いていた處へ、素尊は天に上り、天照大神に面会された處、どうも姉神の様子が普通でないのを見てとつた素尊は姉神は私を疑われてゐるようであるが、自分の肚は何等の邪念はない。此通り潔白であるから今其證しを御目にかけてと言ひ、素尊は劔を抜き天の眞奈井の水に注ぐや、忽ち三女神が生れた。即ち市杵島姫命・瑞津姫命・田露姫命である。すると天照大神は、では自分の清い心も見せようと申されて、胸に掛けた曲玉を外し同じく水に注ぎ揺らがした處、五男神が生れた。即ち天忍穗耳命・天穗日命・天津彦根命・活津彦根命・熊野樟日命である。勿論之は比喻であつて、實際は其時素尊は三人の息女、天照大神は五人の重臣を呼んだのである。というのは此時両神は右の五男三女を證人として一つの誓約をされようとしたからで、其誓約とは近江の琵琶湖一名、志賀の湖、又右の天の眞奈井もそのであつて、此湖水を中心として東の方を天照大神、西の方を素盞鳴尊が領ぐといふ約束したのである。つまり今日で言ふ平和条約である。之によつて兎も角一時小康を得たが、其後素尊は相変わらず謹慎の色が見えないので、茲に本當の追放となつたのである。此時の事を八州河原の誓約と言われているが、今日でも琵琶湖の東岸に八州河

原という村があるのは此地点であつたのであろう。

茲で昔から人口に膾炙されている龍宮の乙姫という女神の事を書かねばならないが、之に就いては少し遡つて書く必要がある。それは伊邪那岐・伊邪那美尊から生れた五柱の男女の兄弟があり、即ち長男は伊都能賣天皇・次男が天照天皇・三男が神素盞鳴尊・長女が稚姫君命・二女が初稚姫命である。そこで伊邪那岐尊は最初伊都能賣尊に日本を統治させ、次で天照天皇、次で天照皇后の順序にされたのであるが、素盞鳴尊には最初から朝鮮を統治させたのである。

そうして素尊の妻神をされたのが勿論朝鮮で出生された姫神であつて、此姫神が弟の妻神となつた。言わば弟姫であるから、之を詰めて音(こ)姫と呼ばれたのである。昔から乙米姫とも言われたが、之は未婚の時に朝鮮名の中に米の字が入っていたからであらう。

右の如く弟姫即ち音姫は夫神が流浪の旅に上がられたので、それからは孤獨の生活となつたのは勿論で、間もなく故郷の朝鮮へ帰り壮麗な城廓を築き、宮殿内に多くの侍女を侍らせ空閨を守っていたのである。處が其頃信州地方の生れである太郎なる若者が漁が好きなので、常に北陸辺りの海岸から海へ出ていた。すると或る時大暴風に遭い辛じて朝鮮海岸に漂着して救われたが、当時としては日本人も珍しがられていた事として、遂に男禁制の王城内に迄招げらるるに至つたのも無理はない。處が当時女王格である音姫様は寂寥に堪えなかつたからでもあろうが、兎に角御目通りを許された處、太郎という若者が世にも稀なる美貌の持主であつたから堪らない。一目見るより恋慕の情堪えやらず、遂に何かの名目で城内に滞在させる事となつた。

其様な譯で太郎に対する愛情は益々熱

を加え、日夜離せず御傍に侍らせるといふ譯で、此事がいつか人民の耳に入り、漸く非難の声喧しくなつたので、茲に絶ち難き愛着を絶つ事となり、素晴らしい宝物を箱に納め土産物として太郎に遣り帰国させた。之が彼の有名な玉手箱である。又之を開けると白髪になる等という伝説は誰かの作り事であらうし、又浦島という姓は朝鮮は日本の裏になつてゐるからで、後世の作者がそういう姓を付けたのであろう。

そうして音姫が朝鮮の女王格であつた時代は日本も支那も制圧されて了い、印度以東は朝鮮の勢力範圍と言つてもいい位であつた。勿論それは素盞鳴尊が一時飛ぶ鳥も落とす程の勢いであつたからでもある。恰度其頃印度の経綸を終えた觀自在菩薩は帰国しようとして南支方面に迄来た處、まだ日本は危険の空気を孕んでゐる事が分つたので暫く其地に滞在する事となつたので、其時から觀世音の御名となつたのである。という譯はつまり印度滞在中は自在天の世を客觀していたので觀自在といひ、今度は音姫の世を靜觀する事となつたので觀世音と名付けられたのである。即ち觀世音を逆に讀めば音姫の世を觀るという意味になる。そうしておいて菩薩は、南支那地方民に教を垂れ給つた處、何しろ徳高き菩薩の事として四隣の民草は親を慕うが如く追々寄り集つ有様で、此時から觀音信仰は遂に支那全土に迄行き渡つたのである。處が御年も重ね給ひ、之迄で経綸も略々成し遂げられた事として、遂に此土地で終焉され給つたのである。そうして今日と雖も支那全土即ち滿州・蒙古・西藏辺に到る迄觀音信仰のみは依然として衰えを見せないのは深い理由のある事であつて、之も追々書くが、茲で遺憾な事は南支地方に觀音の遺跡がありそつなものだが、全然無いのは全く其地方が其後幾度となく兵火に見舞われ、地上にある凡ゆるものが消

滅した結果で亦止むを得ないのである。

彌勒三會

佛教に於ては昔から彌勒三會の言葉があるが、此事は今日迄神秘の幕に閉され全然判らなかつたのであるから、今度私は之を明らかにしてみようと思つ。抑々彌勒三會とは讀んで字の如く三身の彌勒が一度に会われる意味であつて、三身の彌勒とは言ふ迄もなく釈迦・阿弥陀・觀音である。そうして釈迦は報身の彌勒であり、阿弥陀は法身の彌勒であり、觀音は応身の彌勒となつてゐる。また釈迦は地の彌勒であり、阿弥陀は月の彌勒であり、觀音は日の彌勒である。

度々言つ通り右の三聖者は本当の順序から言えば日月地・火水土のそれであり、五六七でもあるので此数を合わせると十八になる。此十八の数に就いて大本教の御筆先に斯う書いてある。『今迄は天が六、中界六、地が六でありものが、天から一厘の御魂が地に降りられたので、天は五となり、地は七となりたのであるぞよ』と。然し此意味は最も深奥なる神の経綸であつて、此一厘の御魂こそポチであり、麻の玉であり如意宝珠であり、之によつて五六七の御代が生れるのである。

又三六九をミロクとも云われるが、此事は最後の天国篇に詳説するつもりであるから略すが、兎に角十八の数こそ最も重要なものであつて、之を文字によつて解釈してみると十は経緯の棒の結んだ形であり、又神の表徴でもあり完全の形であり、又八は開く形であり無数の意味でもあつて、昔から佛教に於ても十八の数をよく用いてゐる。浅草の觀音堂も善光寺も十八間四面であり、毎月の参詣日も十八日であり、十八を倍にすれば三十六でミロクである。

除夜の鐘は百八つ打ち、数珠の数も百八個あり百八煩惱等とも言われるが、此場合の百は十が十で百となるので、之等を見ても悉くミロクの意味が含まれてゐる。

茲で伊都能賣の意味を解釈してみるが、伊都能賣とは数でいえば五と三である。即ち五はイツで火で、三はミで水であるからカミ・神であり、又火と水・イツとミツであり、イツノメ・伊都能賣である。そうして火と水の密合が光であるから、文字もそうなつてゐる。即ち光の文字は火の字の眞中へ横棒を一本入れてある。横棒は水であるから実によく出来てゐる。之によつても文字は神が造られた事が分るであらう。處が光だけでは火と水であるから二つの力で、今一つの力である地が加わらなければならぬ。という譯で光が肉体を透るとすると、肉体は土であるから三昧一体の力が出る。淨靈も此意味を考えればよく分る筈である。

話は元に戻るが、曩に述べた處の釈迦・阿弥陀は印度人種と言つたが、之は只觀音との対象の爲であつて、根本からいえばヤハリ日本の神で、只靈体だけ渡られたのである。其靈とは即ち釈迦は稚姫君命であり、阿弥陀は神素盞鳴尊である。従つてそれまでの印度に於ける大自在天を主としていた民族こそ、眞正の印度人種である事も知らねばならない。

次に面白い事を書いてみるが、觀音は佛教から生まれたのであるから、佛教は生みの親であり、其佛教の開祖である釈迦は親の親という事となる。すると其釈迦を生んだ伊都能賣神は、つまり又親で先祖という譯になる。そうして其神が觀世音となるのだから、此点から見ても佛とは神の化身である事が分るであらう。そうして釈迦は地であるから生みの働きをするし、阿弥陀は月であり女であるからヤハリ觀音の母といつてもいい。つまり地も月も日を生む意

味になるといふ譯で宇宙の実相もそうである。又古くからの伝説にある支那の聖王母であるが、聖王母は月の神の化身であつて、其庭にある桃の木から三千年目に一度桃の実が生り、之を貴重な宝として天の大神様に献上するという事や、印度の伝説にある三千年目に法輪菩薩が生れ、其菩薩が現れるや万民は救われ、此世は天国樂土となるという意も今度の事の豫言といつてもよからう。そして右の法輪菩薩とは觀音の別の御名、法輪菩薩の事であらうし、又天理教の親様である天理王の尊も右に關聯がないとはいえないと思つのである。又阿彌陀は月光菩薩とも言われ、觀音は大日如来でもあつて、つまり両尊者は月と日で夫婦という意味にもなる。此事は日本の各地の佛閣によく表われている。即ち觀音の祀つてある處必ず大佛があるが、大佛は阿彌陀であるからである。そして觀音は堂宇の中に祀られて御姿は小さく大佛は外に鎮座されて大きいのは、觀音は日本内地の佛であり、阿彌陀は外地の佛という譯であり、又觀世音は黄金の一寸八分の本体が本当であり、阿彌陀は鍍金佛又は金箔の木像で大きいのをよいとされているにみても凡ては分るであらう。

佛教に於ける大乘小乘

元來佛教は小乘が本來である事は以前私は書いた事があるが、小乘である佛教の中にも大乘と小乘のある事を知つておかねばならないのである。之を判り易く言えば小乘は自力本位であり、大乘は他力本位であると思えばいい。

そうして佛教中禅宗と日蓮宗は小乗であつて、其他は悉く大乘である事で、茲では先ず小乘から解説してみるが、之は自力であるから何処迄も難行苦行を修行の第

一義としてゐる。といふのは此考え方は其根本が婆羅門宗から出ている為である。殊に彼の禅宗に至つては最も此行り方が濃厚に表われている。

曩に詳しく説いた如く、釈尊によつて主唱された佛教精神は婆羅門式難行苦行は誤りであるとし、それに代るに經文を唱える事によつて悟りを得るといふ言わば經文宗教ともいふべきもので、或期間印度全体を風靡した事は人の知る處であるが、其勢いに対してもそれに従う事なく、依然として婆羅門宗を奉ずる一団があつた。勿論信念は頗る固く、相変らず禁慾的難行苦行の道を歩み続けて来たのは勿論で、其信仰的としては彼の達磨であつた。そうして達磨思想の眞髓としては苦行の外に學問であつた。此両道によつて悟道に入るべく鍊磨研鑽したのである。

處が釈尊入滅後数十年を経てから婆羅門宗の行者の中に傑出した一人物が現われた。之が彼の有名な維摩居士である。此維摩こそ禅宗の開祖であつて、此本流が彼の臨濟宗である。處が彼は業成るや印度を捨てて支那内地に移り布教の為各地を巡跡し、最後に至つて有名な五臺山に登つて道場を開き道教の祖となつたのである。其様な譯であるから本当から言えば、禅宗は佛教から出たものではなく日本に入つてから佛教化したものであらうし、そうしなければ布教上にも困難があつたからでもある。此意味に於て、禅宗の寺院も修行法も僧侶の日常生活等も他宗とは大いに異つてゐるにみても分るのである。

彼の禅宗のみに行われる座禅の行も開祖の達磨の修行に則つたものであるのと言つてもない。又問答を修行の第一義としているが、之も他の佛教とは異つたもので、學問から生れたからに違ひない。それらに就ても肯かれる事は支那・日本に於ける古來からの禅僧である。彼等の中、學高き者

は漢詩の如きものを作るが、之には禅の悟りを含めたような言わば漢詩禅ともいふべき詩文を作り旺んに書いたらしい。今日之等の書や大字など相当残っているが、好事家から非常に珍重され價格も高いが、静かに観ると実に脱俗的匂いは人の心に迫りよく筆者の人格を表わして、実に頭の下がる思いがする。其中でも有名な彼の碧巖録の作者円悟禅師の如きは支那随一とされている。

日本に於ける禅宗の開祖は京都大徳寺の開山大燈国師であるが、此人も当時から傑出した僧で其文といい書体といい、先ず日本一と言つてよからう。次は鎌倉円覚寺の開祖無学禅師であるが、私は此人の書は殊に好きである。此様に見て来ると、禅宗の高僧は僧侶よりも寧ろ宗教学者といった方がよい位である。そうして今も日本の禅宗は曹洞宗・臨済宗・黄檗宗の三派となつてゐるが、黄檗宗は微々たるもので、之は支那の方が旺んだという事である。禅宗の方は此位にしておいて、次は日蓮宗をかいてみよう。

日蓮宗は勿論小乗佛教であつて難行苦行による自力本位であるから、他宗の如く釈迦や阿弥陀には余り重きを措かないよつて、只一途に開祖日蓮上人を中心に拝み、苦行によつて自力を強めよつと修行するのは人の知る處である。即ち之等によつてみると此宗は釈尊の佛教を通り越して婆羅門の流れを汲んだものといつてもいい位である。上人が『吾は法華經の行者なり』と言われたが、此行者の言葉も婆羅門から出ているのである。といつて上人は釈尊の經文にも大いに重きを置いてゐる。法華經二十八品を同宗の基礎とした事によつてみて分るが、言わば上人は精神は婆羅門に從い、形体は釈尊に学んだといつてもよからう。そうして此宗は最も靈馮りを奨励し修行の第一義としてゐるが、之も佛教的

ではなく婆羅門的である。

キリスト教

キリスト教はキリスト生誕の時から在世中は固より、十字架に懸られる迄の凡ての事は微に入り細に涉つて書きつくされてゐるので、今改めて書く必要はないから私としての今迄何人も書かなかつた事柄に就いてのみ書くに止めておくので、讀者は諒せられたいのである。

私が常にいう如く神は何千年に涉つて天国的文化を形成する目的の下に經と緯の經綸をされて来たのであるが、其經の經綸の代表的宗教としては佛教であり、緯の代表的宗教としてはキリスト教であつた。そこで佛教に就ては既に解説して来たから今キリスト教に移るが、緯の經綸こそ物質文化の進歩發展の基本であつて即ち科学である。今日驚くべき文化の發展は全くキリスト教以来の世界的經綸である事は言う迄もないが、茲に於てキリストは何故生れたかという事や其他の点に就て次に詳しく書いてみよう。

善と悪發生とキリスト教

此標題の意味を説くに當つて豫め知つておかねばならない事は、再三言つてゐる如く佛教の眞髓は靈が主であり、キリスト教のそれは体が主である事である。とすれば今之を假に善と悪とに別けてみると、靈は善に屬し体は悪に屬するといつてもいいが、併し此場合の善悪は決定的のものでなく、只強いて別けるとすればそうなるのである。換言すれば靈を主とすれば靈主体従となり、体を主とすれば体主靈従となるからである。今それらに就て順次解説し

てみるが、善と悪とに就て徹底的解釈をす
るとなると、之は仲々難しい問題であつて、
今日迄此問題を眞に説き得た者は殆んど
ないといつてもいい位である。何となれば
此事は大宇宙の主宰者である主の神の権
限に属するからで、即ち哲学的に言えば宇
宙意志である。従つて主の神以外の凡ゆる
神でも分り得ないのは当然で、況んや人間
に於てをやである。若し此問題を説く人が
あるとすればそれは人智から生れた想像
の範囲内であつて、それ以外一步も出ない
のである。處がそれを私は茲に解説してみ
ようとするのであるから仲々大変ではあ
るが、といつて私の想像的所産ではなく神
示によるものであるから別段困難はない
のである。といつのは時期来つて地上天国
建設の重任を負わされた私としては、或程
度主神の眞意が感得されるからで、讀者は
此点よく心に止めて讀んで貰いたいので
ある。

そうして今茲に説明する處の理論は私
が常に説く處の大乗よりも一層大乗とも
いふべきもので、勿論前人未踏の説であつ
て、文学や言葉での表現は寔に困難である。
従つて兎も角現代人の頭脳で解し得る程
度と共に、神から許されたる枠内だけの事
を説くのである。

抑々主神の御目的なるものは、之も私が
常に曰う如く眞善美完全き理想世界を造る
にあるから、其御目的に必要程度にまで物
質文化を進歩発達させればいいのであつ
て、それが今日迄の世界の歴史であると思
えばいい。其意味を以て現在の文化形態を
審さに検討する時、最早時期の來ている事
に氣附くであらう。

以上の如く物質文化が此程度に迄進歩
発達したに就ての古代からの課程を凝視
する時、其處に何を見出すであらう。とい
つても人間の頭脳での発見は困難である
が、私は今それを解説しようと思つのであ

る。それは世界の一切は神意による経綸で
ある事を充分知らせたいからである。そこ
で先ず人類の最大苦悩である處の善と悪
との摩擦即ち闘争であるが、此闘争なるも
のの原因は言つ迄もなく悪であるから、愛
の権化ともいふべき神は何故悪を造られ
たかという事である。此事は昔から何人も
知らうとして知り得なかつた謎であつた
が、それを今私は解こうとするのである。
それに就ては先ず心を潜めて歴史とそう
して文化の進歩の跡を顧り視る事である。
としたら其處に何を発見するのであらう
か。それは意外にも人類の闘争によって如
何に文化の進歩を促進したかという事で
ある。若しも人類が最初から闘争も好まず
平和を愛していたとしたら、物質文化が假
令生れたとしても、其發達は遅々たるもの
で到底今日見る如き目覚ましい發達は遂げ
得られなかつたに違いない。此事をよく考
えてみたら悪なるものが如何に必要であ
つたかが分るであらう。處で茲に問題があ
る。それは此善悪の摩擦が文化の進歩に必
要であつたとしても悪は無限に許される
ものではない。いつかは停止される運命が
來るに決つている事であつて、今日其時が
來たのである。何となれば現在の文化形態
をみればよく肯ける。即ち戦争手段として
驚くべき武器の進歩である。言つ迄もなく
彼の原子破壊の發見であつて、此發見こそ
人類の破局的運命を示唆しているもので、
最早戦争不可能の時期の來た事の表われ
でなくて何であらう。これによつてみても
闘争の根本である悪なるものの終焉は最
早寸前に迫つている事に氣附かなければ
ならない。勿論常に私の唱える晝夜の轉換
の如実の現われでもある。これを歴史的に
見てもよく分る。若し悪を無制限に許され
たとしたら社会はどうなつたであらう。人
間は安心して業務に従事し、平和な生活を
営む事は出来ないで遂には魔の世界とな

つて了い、一切は崩壊するに決まっている。としたら或時期迄の統制も調節も必要となるので、其役目として生れたものが宗教であり、其主役を荷った者が彼のキリストである。同教の教義の根本が人類愛であるのもよくそれを物語っている。それによつて兎も角白色民族の社会が魔の世界とならずに、今日見るが如き素晴らしい発展を遂げたのも全くキリスト的愛の賜物でなく何であろう。以上によつてキリスト教發生の根本義が分つたであろう。

そうして今一つ忘れてはならない事は無神論と有神論である。之も実をいえば経綸上の深い意味のある事であつて、それは若しも人類が最初から有神論のみであつたとしたら、悪は發生せず鬭争も起らないからそれに満足し立派な平和郷となり、よしんば唯物科学が生れたとしても發展性はないから到底地上天国の要素たる文化的準備は出来なかつたに違いない。處が無神的思想が蔓つた結果形のみを主とする以上、今日見るが如き絢爛たる物質文化が完成したのであるから、全く深遠微妙なる神の意図でなくて何であろう。然し表面だけしか見えない唯物主義者などはそれからの眞意を汲みとる事は到底出来まいが、右の如く愈々悪の發生源である無神論は最早有害無用の存在となつたのである。としたら世の多くの無神論者よ一日も早く覺醒されるべきで、若し相変らず今迄通りの謬論を棄て切れないとすれば氣の毒乍ら滅亡の運命は君等を待ち構えているのである。何となれば善悪切替えの時機は決定的に接近しており、其場合神業の妨害者は絶對力によつて生存を拒否されるからである。

そうして神は無神論者を救う手段として採られたのが、神の實在を認識させる事であつて、其方法こそ本教淨靈である。見よ本教に救いを求めに来る数多の重難病

患者などが忽ちにして有神論に転向するのは百人が百人皆そうである。何よりも此実例はお蔭話として数え切れない程本教刊行の新聞雑誌に掲載されているにみて、一点の疑いを差挿み得ないであろう。

以上の如く今日迄は悪なるものも大いに必要であつた事と、今日以後は二義的存在として制約される事が分つたであろうが、之に就て別の例を擧げてみようと思つ。それは原始時代に於ける彼のマンモスや恐龍の如き巨大動物である。それは今世界の各地に時折発見される骨であるが、之によつてみても實在したものであつたに違いない。其他にも大蜥蜴やそれに類した奇怪な動物が旺んに横行していた事は想像に難からないが、今は影も見えないという事は全く自然淘汰による為であろう。其理由は不必要となつたからであるのと言つ迄もない。必要というのは何しる地球が形成され相当期間地殻が脆弱であつた為、それを踏み固めしむるべく多くの巨大動物を作り其役に当たらせたのであつて、大方固まつたので淘汰された事と自然硬化作用と相俟つて漸く立派な土壌となつたので、神は植物の種子を造り蒔いた處、漸次植物は地上に繁茂し生物の生活条件が完備したので、茲に人間始め凡ゆる生物を造られたのである。併し乍ら最初の内は至る處、猛獸毒蛇等々が棲息し人間を悩ました事であろう。そこで其時の原始人は之等動物との戦闘こそ生活の大部分であつたであろう。之等動物の幾種かは時々発見される骨や其他部分品等によつてみても大体は想像がつくのである。勿論之等大部分の動物も自然淘汰されたものであろう。それらに就て想われる事は、日本に於てさえ彼の日本武尊が其毒氣に中てられ生命を失つたといふ説にみても、それ程擻猛な奴が到る處に棲んでおり人畜に被害を与えたとに違いあるまい。處が其様な有害無益の

生物も歳を経るに従い消滅又は減少しつつあるのである。從而最早今日では人畜に危険を及ぼすような動物も種類によっては殆んど死滅したのもも尠なくないようである。此様な譯で遂には動物といえれば家畜動物のみとなろう事も想像されるのである。

以上説いた如く文化の進むに従つて、必要であつたものも不必要となり自然淘汰されるとしたら、最後に至つて人間と雖も自然の法則から免れる事は出来ないのは勿論である。としたら人間に對するそれは何かという勿論人間に内在する悪である。曩にのべた如く今後の時代は悪は有害無益の存在となる以上、悪人は淘汰されて了うのは当然の歸結である。之を一言にしていえば進化の道程として動物と同様の人類が進化し半人半獣であつた人間が、即ち外表は人間、内容は獣であつた。其獸性を除去して全人間にするのが今や来らんとする神意の発動であつて、それに服従出来ない者が自然淘汰によつて滅亡の運命となるのである。

以上の如く善悪の人間が精算され、善の人間が大多数となつた世界こそ、本教で謂う處の地上天国の実相である。右によつても分かる如く滅亡の一步手前に迄来ている悪人を悔い改めしめ、犠牲者を少なくする其救いこそ神の大愛である事を知らせるのが本教の大使命である。

經 と 緯

凡そ天地の眞理を知る上に於て、經と緯の意味を知る事が最も肝要である。此事は今迄にも幾度となく説いて来たが、尙一層詳しく徹底的に書いてみよう。それに就ては先ず根本的認識である。それには私が常にいう日は火で、火は經に燃ゆるものであ

り、月は其反對に水で緯に流動するものである。従つて日の本質は高さであり月の本質は広さである。此理によつて今地球を説明してみると地上の空気界は水素が緯に流動しており、火素は經に上下を貫いている。つまり經緯の精が綾のようになっており、布地の如きものである。而もそれが想像を絶する程の密度であつて、此事実として卑近な例ではあるが人間が横臥すれば寒いのは緯に流れている水の精によるからで、起きて經になれば暖かいのは經に昇降している火の精によるからである。又火は靈的・精神的・陽であり、水は体的・物質的・陰である。此理は世界の東西文化を見てもよく判る。東洋は經であるから靈的・精神的であるに對し、西洋は緯で体的・物質的あるから、今日の如き科学文化が発達したのである。宗教に於ても佛教は經であるから經文といつて經の字を用いており、祖先を崇拜し子孫を重視すると共に孤立的であるに反し、キリスト教は祖先を祀らず夫婦愛を基調とし隣人愛を本義とし、何處迄も國際的緯の拡がりである。

右の如く今日迄の世界は東洋文化の精神的に偏した思想と、西洋文化の物質的に偏した思想とであつたが為、どちらも極端に偏する以上一切が巧くゆかなかつたのである。従つて人類の苦惱は何時になつても解決出来ず世界の混乱は停止する處を知らない有様である。斯うみてくるとどうしても經緯両方が結ばれなければ完全な文化は生れない筈である。としたら此經緯の結ばる時こそ問題であるが、驚くべしそれが今日であり其力の行使こそ本教の使命であつて、本教のバツジがそれを表わしている。

次に私は前から言っている事だが、觀音力の働きもそれであつて、即ち經にも非ず緯にも非ずといつて經でもあり緯でもあり何れにも偏らず、応変自在であるから干

変万化・自由無碍というのも此意味である。此理によつて、人間の心のあり方もそうなくてはならない。即ち心は常に原則として経緯結びの中心に置くべきで、之を一言にしていえば常識である。本教が特に常識を重んずるのはそつう譯なのである。處が世間常識人は洵に平凡に見らるるもので、反つて偏る人の方が偉く見えるものであるから此点大いに注意すべきである。事実此偏在精神の持主が偉く見ゆるのは大抵一時的であつて大成は出来ない。何時かは必ず失敗する事は歴史がよく示している。

右の如く経は高いが小さく、緯は低いが大いなのが眞理である。従つて私は此方針で進んでいるので、例えば箱根と熱海がそうである。箱根の聖地は高くて小さいが熱海のそれは低くて大きいのである。又経は霊であるから箱根を先に造り熱海は体であるから後に造るので、之が霊主体従の順序であるからで、此通りにすると実に順調に巧くゆくが、少しでも之を狂わせると必ず故障が起るのは殆んど絶対的といつてもいい。実に神様の御経綸こそ一糸紊れず洵に整然たるものである。